

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第21集

M I G I K U Z U G A S A K O

右葛ヶ迫遺跡

一般国道220号線青島バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書

2000

宮崎県埋蔵文化財センター

M I G I K U Z U G A S A K O

右葛ヶ迫遺跡

一般国道220号線青島バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書

2000

宮崎県埋蔵文化財センター



右葛ヶ迫遺跡全景（北より）

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、一般国道 220 号線青島バイパス建設工事に伴い、平成 6 年度から平成 7 年度にかけて右葛ヶ迫遺跡の発掘調査を行いました。

遺跡の周辺には、縄文時代後・晩期の「松添貝塚」など当時の人々の生活や交流を物語る貴重な遺跡があり、本遺跡においても縄文時代前期末から近世までの遺構・遺物が検出され、先人たちの足跡の一端を明らかにすることができ、この地域の歴史に新たな知見を加えることができたものと考えます。

今回、その調査成果を広く活用していただくため、報告書を刊行するはこびとなりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成 12 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田 中 守

例 言

1. 発掘調査は一般国道青島バイパス建設に伴い宮崎県教育委員会が実施した、右葛ヶ迫遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は建設省九州地方建設局宮崎工事事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、平成6・7年度は県教育庁文化課が実施した。
3. 現地での実測等の記録は、主に日高広人、久木田浩子、今城正広（現 高岡町教育委員会）、宗像大造が作成し、一部を飯田博之、谷口武範、稲岡洋道（現 宮崎市教育委員会）、金丸武司（現 田野町教育委員会）ほか発掘作業員の協力を得た。
4. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、掲載した図面・表等の作成・製図は日高、久木田が主として行い、安楽哲史、石川悦雄、高橋誠、橋川敬子、松永幸寿、松本茂ほか整理作業員の方々の協力を得た。
5. 本書に使用した写真は日高、久木田が撮影し、空中写真については株式会社スカイサーベイに委託した。
6. 本遺跡における自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。
7. 本遺跡で出土した木器の処理及び樹種同定については、株式会社吉田生物研究所に委託した。
8. 本書で使用した位置図および周辺地形図は国土地理院発行の5万分の1図と宮崎市作成2千5百分の1図である。
9. 本書で用いた方位は主に磁北（M. N.）であり、位置図等の一部は座標北（G. N.）である。座標は国土座標第Ⅱ系に準拠した。レベルは海拔絶対高である。
10. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
 竪穴住居跡…S A 土坑…S C 溝状遺構…S E 集石遺構…S I 竪穴状遺構…S Z
11. 土器の色調および土層については農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
12. 編物圧痕については廣田晶子氏（現 高岡町教育委員会）に御教示いただいた。
13. 石材鑑定は一部を青山尚友に鑑定していただき、それを基に日高が行った。
14. 本書の執筆は、各調査員が分担して行い、文責は目次に明記した。編集は日高・久木田が行った。
15. 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節	調査に至る経緯	(谷口)	1
第2節	調査の組織	(日高)	1

第Ⅱ章 調査の概要

第1節	遺跡の位置と環境	(日高)	3
第2節	層序	(日高)	6
第3節	調査の経過	(日高)	8

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 A・B区の調査

1.	縄文時代の遺構と遺物		
(1)	竪穴住居跡	(日高・久木田)	11
(2)	集石遺構	(日高・久木田)	13
(3)	縄文土器	(日高)	17
(4)	土器片加工品	(日高)	82
2.	弥生時代の遺構と遺物		
(1)	竪穴住居跡	(日高・久木田)	92
3.	古墳時代の遺構と遺物		
(1)	竪穴住居跡	(日高・久木田)	97
4.	弥生～古墳時代の包含層出土の遺物	(久木田)	117
5.	時期不明の遺構と遺物		
(1)	溝状遺構	(日高・久木田)	124
(2)	竪穴状遺構	(久木田)	135
(3)	土坑	(日高・久木田)	136
6.	中・近世の出土遺物	(久木田)	140
7.	石器	(日高)	141

第2節 D区の調査

1.	調査の概要	(久木田)	169
2.	遺構と遺物		
(1)	溝状遺構	(久木田)	169

第3節 E区の調査

1.	調査の概要	(久木田)	190
2.	遺構と遺物		
(1)	竪穴状遺構	(久木田)	190
(2)	畝状遺構	(久木田)	196
(3)	溝状遺構	(久木田)	196
3.	包含層出土の遺物	(久木田)	196

第Ⅳ章 自然科学分析調査の結果

第1節	テフラ分析	254
第2節	放射性炭素年代測定結果	259
第3節	炭化材の樹種同定	260
第4節	植物珪酸体分析	263
第5節	花粉分析	271
第6節	種実同定	280

第Ⅴ章	まとめ	(日高・久木田)	283
-----	-----	----------	-----

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図……………	4
第2図	右葛ヶ追遺跡周辺地形図……………	5
第3図	右葛ヶ追遺跡土層柱状図……………	7
第4図	右葛ヶ追遺跡グリット配置図……………	9・10
第5図	B区縄文時代遺構分布図……………	12
第6図	B区SA11実測図及び出土土器実測図…	14
第7図	B区SA11出土土器実測図……………	15
第8図	B区SA13実測図及び出土土器実測図…	16
第9図	B区SI1～6実測図……………	18
第10図	B区SI7・8実測図及びSI3 出土土器実測図……………	19
第11図	B区SI4出土土器実測図及び 縄文土器実測図……………	21
第12図	縄文土器実測図(2)……………	22
第13図	縄文土器実測図(3)……………	23
第14図	縄文土器実測図(4)……………	24
第15図	縄文土器実測図(5)……………	26
第16図	縄文土器実測図(6)……………	27
第17図	縄文土器実測図(7)……………	28
第18図	縄文土器実測図(8)……………	29
第19図	縄文土器実測図(9)……………	30
第20図	縄文土器実測図(10)……………	31
第21図	縄文土器実測図(11)……………	33
第22図	縄文土器実測図(12)……………	34
第23図	縄文土器実測図(13)……………	35
第24図	縄文土器実測図(14)……………	36
第25図	縄文土器実測図(15)……………	37
第26図	縄文土器実測図(16)……………	38
第27図	縄文土器実測図(17)……………	39
第28図	縄文土器実測図(18)……………	40
第29図	縄文土器実測図(19)……………	41
第30図	縄文土器実測図(20)……………	42
第31図	縄文土器実測図(21)……………	43
第32図	縄文土器実測図(22)……………	44
第33図	縄文土器実測図(23)……………	45
第34図	縄文土器実測図(24)……………	46
第35図	縄文土器実測図(25)……………	47
第36図	縄文土器実測図(26)……………	48
第37図	縄文土器実測図(27)……………	49
第38図	縄文土器実測図(28)……………	53
第39図	縄文土器実測図(29)……………	54
第40図	縄文土器実測図(30)……………	55
第41図	縄文土器実測図(31)……………	56
第42図	縄文土器実測図(32)……………	57
第43図	縄文土器実測図(33)……………	58
第44図	縄文土器実測図(34)……………	59
第45図	縄文土器実測図(35)……………	60
第46図	縄文土器実測図(36)……………	62
第47図	縄文土器実測図(37)……………	63
第48図	縄文土器実測図(38)……………	64
第49図	縄文土器実測図(39)……………	65
第50図	縄文土器実測図(40)……………	67
第51図	縄文土器実測図(41)……………	68
第52図	縄文土器実測図(42)……………	69
第53図	縄文土器実測図(43)……………	70
第54図	縄文土器実測図(44)……………	71
第55図	縄文土器実測図(45)……………	73
第56図	縄文土器実測図(46)……………	74
第57図	縄文土器実測図(47)……………	75
第58図	縄文土器実測図(48)……………	76
第59図	縄文土器実測図(49)……………	78
第60図	縄文土器実測図(50)……………	79
第61図	縄文土器実測図(51)……………	80
第62図	縄文土器実測図(52)……………	81
第63図	縄文土器実測図(53)……………	83
第64図	縄文土器実測図(54)……………	84
第65図	縄文土器実測図(55)……………	85
第66図	縄文土器実測図(56)……………	86
第67図	縄文土器実測図(57)……………	87
第68図	土器片加工品実測図(1)……………	89
第69図	土器片加工品実測図(2)……………	90
第70図	土器片加工品実測図(3)……………	91
第71図	B区弥生時代遺構分布図……………	93
第72図	B区SA4実測図及び出土土器実測図…	94
第73図	B区SA7実測図及び出土土器実測図…	95
第74図	B区SA10実測図及び出土土器実測図…	96
第75図	B区古墳時代遺構分布図……………	98
第76図	B区SA1実測図……………	100
第77図	B区SA1出土土器実測図……………	101
第78図	B区SA1出土土器実測図……………	102
第79図	B区SA2実測図……………	103
第80図	B区SA2出土土器実測図……………	104
第81図	B区SA2出土土器実測図……………	105
第82図	B区SA2出土土器実測図……………	106
第83図	B区SA2出土土器実測図……………	107
第84図	B区SA3実測図及び出土土器実測図	108
第85図	B区SA5実測図及び出土土器実測図	111
第86図	B区SA6実測図及び出土土器実測図	112
第87図	B区SA8実測図及び出土土器実測図	113
第88図	B区SA8出土土器実測図……………	114
第89図	B区SA9実測図……………	116
第90図	B区SA12実測図及び出土土器実測図	119
第91図	B区包含層出土土器実測図……………	120
第92図	B区包含層出土土器実測図……………	121
第93図	B区包含層出土土器実測図……………	122
第94図	B区包含層出土土器実測図……………	123
第95図	A・B区時期不明の遺構分布図及び SE1～5土層断面実測図…………	125・126
第96図	B区SE6平面図及び 土層断面実測図……………	128
第97図	B区SE6(B-B'・C-C')及び SE1(D-D')土層断面実測図…………	129
第98図	B区SE6出土土器実測図……………	130
第99図	B区SE6出土土器実測図……………	131
第100図	A区1号竪穴状遺構(SZ1)実測図…	132
第101図	A区包含層出土土器及び SZ1出土遺物実測図……………	133
第102図	A区2号竪穴状遺構(SZ2)実測図…	134

第103図	B区SC1～4実測図及びSC4～6 出土遺物実測図	138
第104図	B区SC5～8実測図	139
第105図	A・B区出土中世・近世の遺物 実測図	140
第106図	石器実測図(1)	143
第107図	石器実測図(2)	144
第108図	石器実測図(3)	145
第109図	石器実測図(4)	146
第110図	石器実測図(5)	147
第111図	石器実測図(6)	148
第112図	石器実測図(7)	149
第113図	石器実測図(8)	150
第114図	石器実測図(9)	154
第115図	石器実測図(10)	155
第116図	石器実測図(11)	156
第117図	石器実測図(12)	157
第118図	石器実測図(13)	158
第119図	石器実測図(14)	159
第120図	石器実測図(15)	161
第121図	石器実測図(16)	162
第122図	石器実測図(17)	163
第123図	石器実測図(18)	164

第124図	石器実測図(19)	165
第125図	石器実測図(20)	166
第126図	D区遺構分布図	171～172
第127図	D区SE7土層断面実測図	173
第128図	D区SE7出土遺物実測図	174
第129図	D区SE8土層断面(E-E') 実測図	175～176
第130図	D区SE8出土土器実測図	179
第131図	D区SE8出土土器実測図	180
第132図	D区SE8出土土器実測図	181
第133図	D区SE8出土土器実測図	182
第134図	D区SE8出土土器実測図	183
第135図	D区SE8出土土器実測図	184
第136図	D区SE8出土土器実測図	185
第137図	D区SE8出土土器実測図	186
第138図	D区SE8出土土器実測図	187
第139図	D区SE8出土土器実測図	188
第140図	E区遺構分布図	191
第141図	E区(A-A')土層断面実測図	192
第142図	E区1号竪穴状遺構(SZ1)実測図	193
第143図	E区SZ1出土土器実測図	194
第144図	E区SZ1出土土器実測図	195
第145図	E区包含層出土遺物実測図	197

グラフ目次

第1グラフ	円盤 長・短比分布	91
第2グラフ	円盤 長径・重量分布	91
第3グラフ	石錘 長・幅比分布	161

表目次

第1表	A・B区出土縄文土器観察表(1)～(31)	199
第2表	A・B区出土遺物観察表(1)～(10)	230
第3表	土器片加工品計測表	239
第4表	石器計測表(1)～(6)	240
第5表	装身具一覧表	245
第6表	D区出土遺物観察表(1)～(6)	246
第7表	E区出土遺物観察表(1)～(2)	251
第8表	木製品一覧表	253
第9表	鉄製品計測表	253

図版目次

巻頭図版1	右葛ヶ迫遺跡全景	
写真1	SA1カマド検出状況	
写真2	SA1カマド完掘状況	
図版1	右葛ヶ迫遺跡全景② A区全景	
図版2	B区全景①②	
図版3	右葛ヶ迫遺跡B区土層 SA11・13 SI1～4・6	
図版4	SI7・8 B区遺物出土状況①② SA11出土土器①②	
図版5	SI3出土土器 SI4出土土器及びI類土器 I類土器② II類土器①～③	
図版6	II類土器④～⑥ IV類土器①② V類土器①	
図版7	V類土器② VI類土器①② VII類土器①② VIII類土器①	
図版8	VIII類土器②～⑦	

図版9 VII類土器⑧～⑬
 図版10 VII類土器⑭～⑲
 図版11 VII類土器⑳～㉔
 IX類土器①②
 図版12 X類土器①～④
 XI類土器①②及びVII類土器①
 図版13 XII類土器②～④
 XIII類土器①②(底部圧痕)
 XIV類土器①
 図版14 XIV類土器②
 XV類土器①②
 XVI類土器①②
 XVI類土器③及びXIX類土器①
 図版15 XVI類土器④
 XVII類土器①～④
 XVII類土器①
 XIX類土器②
 図版16 XVIII類土器②～⑤
 XIX類土器③④
 図版17 XIX類土器⑤⑥
 XX類土器①
 XX類土器②及びXXI類土器
 XXII類土器
 土器片加工品
 図版18 SA4出土土器
 SA7、SA7出土土器
 図版19 SA7出土土器
 SA10、SA10出土土器
 SA1、SA1出土土器
 図版20 SA1出土土器
 図版21 SA1出土カマド支柱及び軽石製品
 SA2、SA2出土土器
 図版22 SA2出土土器
 図版23 SA2出土土器
 図版24 SA2出土土器
 SA3遺物出土状況
 SA3
 SA3出土遺物
 図版25 SA5、SA5出土土器
 図版26 SA6、SA6出土土器
 SA8
 図版27 SA8出土土器
 図版28 SA9
 SA12、SA12出土土器
 B区包含層出土土器
 図版29 B区包含層出土土器
 図版30 B区包含層出土土器
 図版31 B区包含層出土土器

B区SE1
 B区SE1土層断面(D-D')
 A区SE4土層断面(A-A')
 図版32 A区SE5土層断面(B-B')
 B区作業風景
 B区SE6
 B区SE6土層断面(A-A')
 B区SE6土層断面(B-B')
 B区SE6土層断面(C-C')
 B区SE6出土土器
 図版33 B区SE6出土土器
 図版34 B区SE6出土土器
 B区SE6出土鉄製品
 A区SZ1
 A区SZ1土層断面
 A区SZ1遺物出土状況
 A区SZ2土層断面
 A区SZ1出土加工木材
 図版35 SC1～8
 図版36 SC4～6出土土器
 A・B区出土中・近世の遺物
 石器①～④
 図版37 石器⑤～⑪
 図版38 石器⑫～⑲
 図版39 D・E区遠景
 D区SE8
 図版40 D・E区遠景
 D区SE7
 D区SE8土層断面(E-E')
 D区作業風景
 D区SE8西側壁遺物出土状況
 図版41 D区SE7出土遺物
 D区SE8出土土器
 図版42 D区SE8出土土器
 図版43 D区SE8出土土器
 図版44 D区SE8出土土器
 図版45 D区SE8出土土器
 図版46 D区SE8出土土器
 D区SE8出土木製品
 D区SE8出土遺物
 図版47 E区中央土層断面
 E区SZ1遺物出土状況
 E区SZ1土層断面
 E区畝状遺構
 E区SZ1出土土器
 図版48 E区SZ1出土遺物
 E区包含層出土土器

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎市の南に位置する加江田地区から日南市風田地区を走る一般国道220号線沿いには、青島海水浴場や堀切峠、鶏戸神宮など県内でも有数の観光地が並び、シーズンによってはかなりの交通渋滞を招き、さらには、台風や集中豪雨などの災害により度重なる通行止めをも引き起こしていた。そのため、建設省九州地方局宮崎工事事務所では、国道220号線の青島～日南改良工事が計画され昭和47年から継続して工事が実施されている。特に混雑の激しい折生迫地区おりゅうごでは、青島バイパスとして平成元年から工事が行われてきた。

平成4年、県教育委員会文化課が実施した開発事業照会の中で、青島バイパス予定路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれていることが判明した。予定路線内の宮崎市大字折生迫字右葛ヶ迫周辺は、周知の遺跡として、実際に土師器や陶磁器類が表採できる。また、隣接して立地する松添遺跡の発掘調査が宮崎市教育委員会によって平成4年度から実施され、多くの遺構・遺物が検出されていることなどからも、路線内における遺跡の存在は確実なものと推定された。そのため、県文化課では宮崎工事事務所にその旨を通知し、工事の施工方法や調査の期間や経費等について協議を重ねてきた。協議の結果、遺跡が影響を受ける13,800㎡を発掘調査対象面積とし、調査は2ヶ年度に亘って調査を行うこととした。

調査は、第1次調査を平成6年9月6日から開始し平成7年3月31日まで、第2次調査を平成7年4月17日から平成7年11月2日までで終了したが、南側の約2,000㎡については、用地未買収で調査を完了できなかった。以後、遺物整理を平成10年度まで行いながら用地取得を待ったが、取得が難しい状況のためこれまで調査した箇所の報告書を平成11年度に刊行することとした。

このため、未調査部分については用地買収後に調査を実施し、本書とは別に報告書を作成する必要がある。

第2節 調査の組織

調査の組織は、次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

発掘調査 <平成6・7年度>

教 育 長	田原 直廣
教 育 次 長	八木 洋・仲田 忠
文 化 課 長	江崎 富治
課 長 補 佐	田中 雅文
主幹兼庶務係長	高山 惠元
主幹兼埋蔵文化財第一係長	岩永 哲夫 (平成6年度、平成7年度 主幹兼埋蔵文化財第二係長)
主査 (調整担当)	谷口 武範 (平成6年度)・永友 良典 (平成7年度)
主事 (調査担当)	日高 広人 (平成6年度)・久木田浩子 (平成7年度)
調査員 (囑託)	今城 正広 (平成6年度)・宗像 大造 (平成7年度)

整理報告 <平成8～11年度>

宮崎県教育委員会

教 育 長

田原 直廣（平成8年度）
岩切 重厚（平成9年度）
笹山 竹義（平成10年度～）

教育次長

川崎 浩康（平成8～10年度）
河野 聚（平成8・9年度）
新垣 隆正（平成11年度）
岩切 正憲（平成10年度～）

文化課長

江崎 富治（平成8年度）
仲田 俊彦（平成9年度～）

課長補佐

稲田 憲男（平成8・9年度）
矢野 剛（平成10年度～）

主幹兼庶務係長

高山 恵元（平成8年度）
井上 文弘（平成9年度～）

埋蔵文化財係長

面高 哲郎（平成8年度）
北郷 泰道（平成9年度～）

同主査（調整担当）

永友 良典（平成8年度）
柳田 宏一（平成9年度）

主任主事（調整担当）

重山 郁子（平成10年度～）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長

藤本 健一（平成8・9年度）
田中 守（平成10年度～）

副 参 事

木幡 文夫（平成8年度）

副 所 長

岩永 哲夫（平成8・9年度）
江口 京子（平成10年度～）

庶 務 係 長

三石 泰博（平成8・9年度）
児玉 和昭（平成10年度～）

調査第二係長

北郷 泰道（平成8年度）
岩永 哲夫（平成9年度 兼務、
平成8年度 調査第一係長兼務）

青山 尚友（平成10年度～）

同主査（調整担当）

谷口 武範（平成8・9年度）
石川 悦雄（平成10年度～）

同主事（報告書担当）

日高 広人（平成8～10年度 調査第一係）
久木田浩子

なお、次の方々に調査及び報告書作成の指導・協力をいただいた。記して謝意を表したい。

泉 拓良（天理大学）、吉留秀敏（福岡市教育委員会）、松永幸男（北九州市市立考古博物館）
桑畑光博（都城市教育委員会）、金丸武司（田野町教育委員会）、廣田晶子（高岡町教育委員会）、石川
悦雄・菅付和樹・谷口武範・竹井真知子（宮崎県埋蔵文化財センター）、鹿児島県立埋蔵文化財センター

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と環境（第1・2図）

右葛ヶ迫遺跡は、宮崎（沖積）平野の南東部、亜熱帯性植物群落と「鬼の洗濯岩」の名で親しまれている隆起海床と奇形波食痕に囲まれた青島より西南西に約1kmの宮崎市大字折生迫内に所在する。

その青島に繋がる海岸砂丘は、大淀川や清武川・加江田川から日向灘に注がれた土砂が南流する沿岸流の土砂運搬作用によって堆積し、形成されたものである。現在では、開発等により徐々に昔の面影を失いつつあるが、海岸砂丘の内陸側には小規模な数条の砂丘列（砂堤）と砂丘（堤）間低地があり、砂丘列上および周辺では主に畑地として、砂丘間低地では水田として利用されていた。

また後背（西南側）には、標高737.6mの岩壺山をはじめ、花切山や斟鉢山といった山々が最高稜線をなす鶴戸山地と呼ばれる宮崎層群から成る山地があり、これらの山々から丘陵が幾筋も派生してのびる。遺跡はそうした丘陵裾部と最も内側にある砂丘列との間に挟まれた後背湿地上（標高約8.5m～約11.6m）に立地し、縄文前期～中・近世にかけて断続的ではあるが人々が利用し続けた事を踏まえて、時代別に周辺の遺跡を概観していきたい。

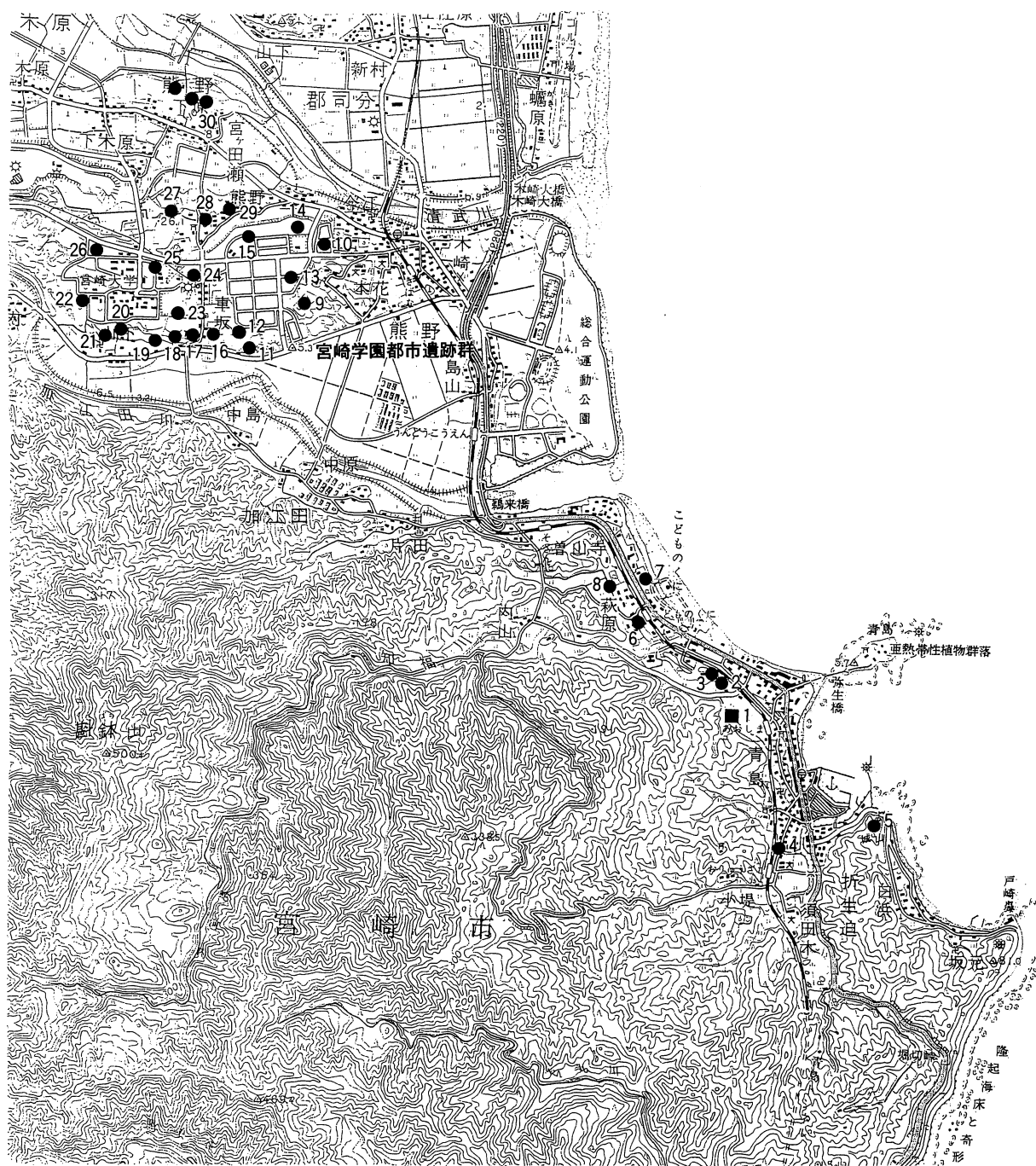
縄文時代の遺跡では松添遺跡（貝塚）・納屋向遺跡・平畑遺跡等が挙げられる。このうち、松添遺跡（貝塚）は本遺跡の北北西に約300mの砂丘上に立地し、貝塚の範囲が東南約12m・南北約18mにおよぶことが確認されている。貝塚は縄文時代後期後半～晩期の遺物とともに大量のスガイやイシダタミ・レイシと共に、ハマグリ・サザエ・アサリ・シジミといった貝類から、スズキ・マグロ・クロダイ等の魚類、クジラやイルカ・シカ・イノシシ等のほ乳類等で構成され、当時の人々の生活や生業等が垣間見ることが出来る。なお、県内では唯一、犬の埋葬遺構も検出されている。また貝塚の西～南側にかけての範囲では、竪穴状遺構や土坑・集石遺構等とともに縄文時代後期初頭～晩期前半にかけての遺物が多量に出土しており、徐々に遺跡の全体像が明らかになりつつある。

平畑遺跡は清武川と加江田川に挟まれた台地上の西側に位置する宮崎学園都市遺跡群内に立地し、縄文時代後期～晩期の竪穴住居跡67軒とともに土器廃棄所が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、堂地東遺跡・熊野原遺跡A・B地区・前原北遺跡（宮崎学園都市遺跡群）等の集落跡が挙げられる。このうち中期後半では前原北遺跡で中央に二本の主柱穴を持ち、柱穴を壁際に円形状に巡らす「松菊里型住居」が確認されている。後期になると上記で挙げた遺跡で共通して南九州で独自の住居形態である花卉状間仕切り住居を中心とした集落が構成されるようになる。

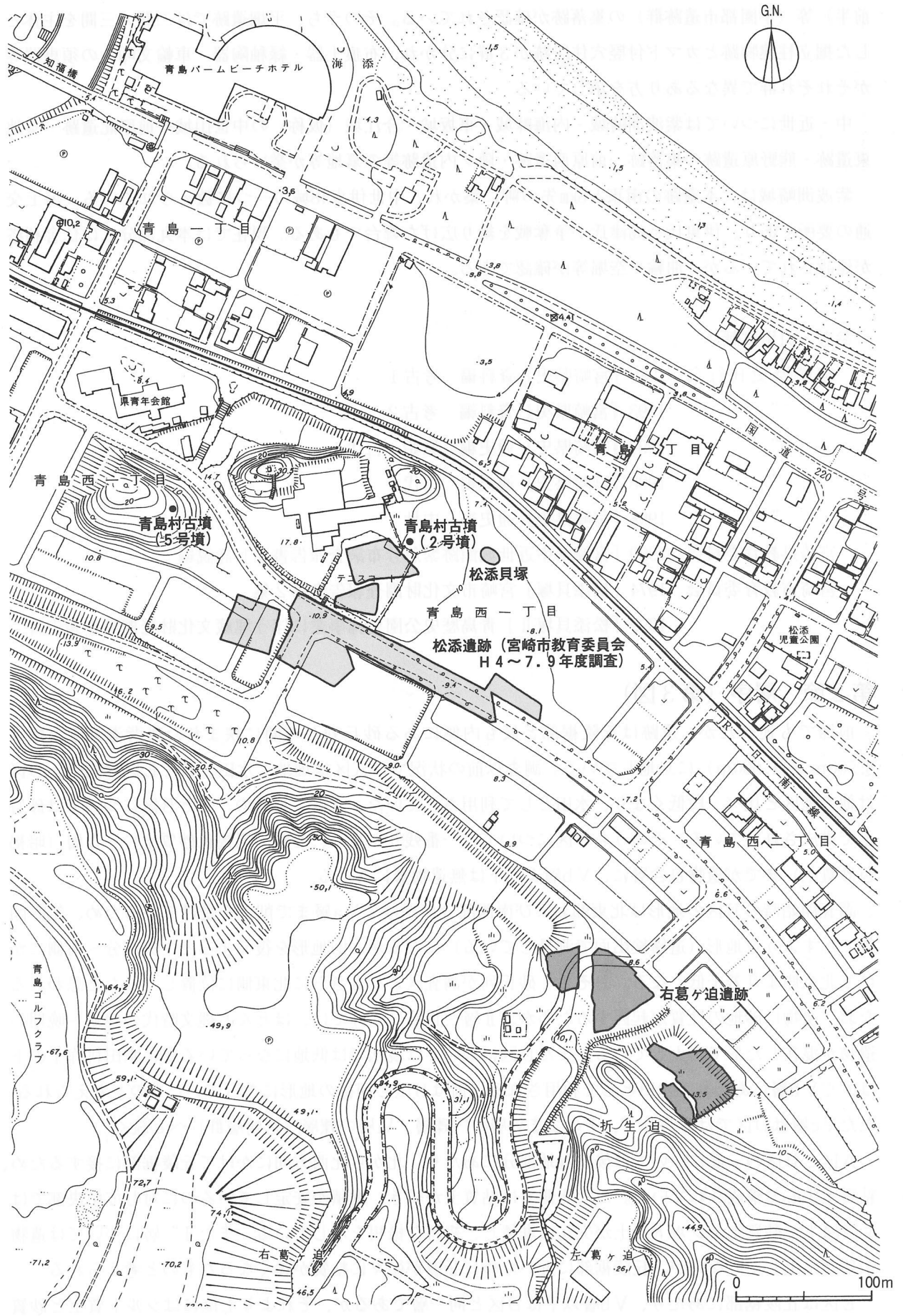
古墳時代の遺跡では、前期の集落跡である熊野原遺跡C地区・前原北遺跡・前原南遺跡・陣ノ内遺跡（宮崎学園都市遺跡群）等の集落跡が確認されている。そのうち前原北遺跡では後期後半まで継続して営まれて、陣ノ内遺跡でも後期後半の竪穴住居跡が1軒見つかっている。また後期になると青島村古墳や木花村古墳が確認されている。そのうち青島村古墳は本遺跡の北西約350～450mに立地し、昭和10年に県指定史跡に指定されている。指定当時は5基あったとされているが、現在ではそのうちの2基が確認出来るのみである。宮崎市教育委員会では平成2・3年度に確認調査を行い、5号墳の石室内より6世紀後半代の土師製の椀を確認しており、本遺跡との関連に注目される。

古代では、平畑遺跡（9～10世紀）・前原南遺跡（10世紀前半）・陣ノ内遺跡（10世紀前半・12世紀



- | | | |
|-------------|------------|------------|
| 1. 右葛ヶ迫遺跡 | 11. 車坂城跡 | 21. 山下第3遺跡 |
| 2. 松添遺跡(貝塚) | 12. 陣ノ内遺跡 | 22. 平畑遺跡 |
| 3. 青島村古墳 | 13. 前原南遺跡 | 23. 犬馬場遺跡 |
| 4. 納屋向遺跡 | 14. 前原北遺跡 | 24. 熊野原遺跡 |
| 5. 紫波洲崎城跡 | 15. 前原西遺跡 | 25. 堂地東遺跡 |
| 6. 萩原遺跡 | 16. 車坂第1遺跡 | 26. 堂地西遺跡 |
| 7. 子供の国遺跡 | 17. 車坂第2遺跡 | 27. 西ノ原遺跡 |
| 8. 子供の国西側遺跡 | 18. 車坂第3遺跡 | 28. 熊野第1遺跡 |
| 9. 木花遺跡 | 19. 山下第1遺跡 | 29. 熊野第2遺跡 |
| 10. 今江城跡 | 20. 山下第2遺跡 | 30. 木花村古墳 |

第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 右葛ヶ迫遺跡周辺地形図 (S=1/4,000)

前半)等(学園都市遺跡群)の集落跡が確認されている。そのうち、平畑遺跡では二間×三間を主体とした掘立柱建物跡とカマド付竪穴住居跡が3群に分かれ、布痕土器・緑釉陶器・車輪文叩きの須恵器等がそれぞれ群で異なるあり方を示している。

中・近世については紫波洲崎城・内海峠城・車坂城・今江城(仮称)の中世山城や前原北遺跡・堂地東遺跡・熊野原遺跡の集落跡、前原西遺跡・陣ノ内遺跡等の墓地等が挙げられる。

紫波洲崎城は、本遺跡の南東2.8km先の岬に築かれ、中世伊東48城の一つに数えられている。海上交通の要所であり、伊東氏と島津氏が争奪戦を繰り広げた舞台でもある。現在では本丸部分には仏舎利塔が建設されているが、曲輪や空堀等が確認できる。

<参考・引用文献>

- | | |
|----------|--------------------------------------|
| 宮崎県史刊行会 | 1989『宮崎県史』資料編 考古1 |
| ” | 1993『宮崎県史』資料編 考古2 |
| ” | 1997『宮崎県史』通史編 原始・古代1 |
| ” | 1998『宮崎県史』通史編 古代2 |
| ” | 1998『宮崎県史』通史編 中世 |
| 宮崎県教育委員会 | 1999「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ」詳説編 |
| 宮崎市教育委員会 | 1974「松添貝塚」宮崎市文化財調査報告書第2集 |
| ” | 1999「松添貝塚Ⅱ」青島歴史公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |

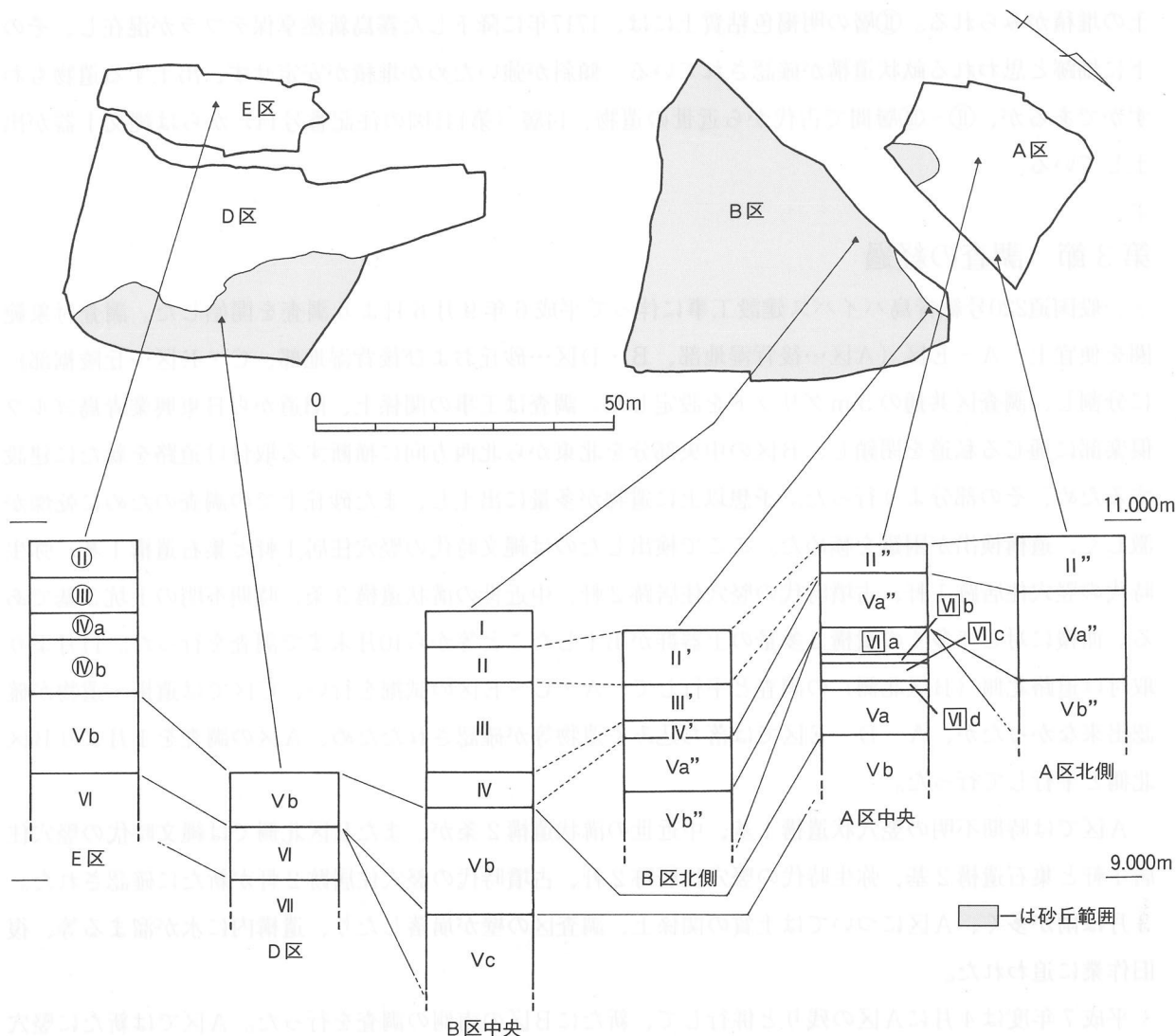
第2節 層序(第3図)

前節でも述べたが、遺跡は丘陵裾部と最も内側にある砂丘列との間に挟まれた後背湿地上(標高8,500m~11,600m)に立地している。調査以前の状況ではA区は畑地と水田、B・E区は畑地、D区は他の地区と比べ一段低くなり、水田として利用されていた。A区・D区の一部とB区については砂質土で構成されている。そのうちB区については一番残りが良く、Ⅱ層(黒褐色砂質土)~Ⅳ層(暗褐色砂質土)までが遺物包含層に、Vb層より下は無遺物層にあたる。

調査開始時のB区の地形は北東部および南西部分にかけてVa層まで削平を受けているため、第5図等で示すような地形(遺構検出面で測量している)になるが、旧地形を復元すると中央部分~南側にかけて北東側より若干低くなる。おそらく砂丘列が調査区よりもさらに北東側に位置していたと思われる。なお、遺物は砂地の性質が起因するためか、Ⅱ層~Ⅲ層にかけては、ほとんど縄文時代の中期~晩期の遺物が混在した形で出土している。またD区については現状では低地になっているが、水田耕作土の下はすぐVb層にあたり、水田として利用される以前はB区と同様の地形になっていたものと考えられる。ただVc層はD区ではみられず、そのままⅥ層の円礫層・Ⅶ層の礫層(宮崎層群)へと続く。

A区とB区の一部については後背湿地部分にあたり、北から北西方向にかけて丘陵裾部に接するため、粘質土中心で構成されている。ただ北側では粘質土が続き、堆積が安定しているのに対して中央部ではV”層下で砂質土とシルト質土が交互に堆積し、複雑な様相を示している。またⅡ”層については遺物が殆ど出土していないが、丘陵裾部に近いためにⅡ層が徐々に粘質が強くなったものと考えられる。

E区は丘陵裾部にあたり、Vb層以下はD区と同一層であるが、それより上位にはシルト質土と砂質



- I 表土
- II 黒褐色(10YR2/3)砂質土～細粒砂でややしまりがある。やや粘質である。石器、礫、縄文時代後期～古代頃の土器片等を含む。
- II' 黒褐色(10YR2/3)砂質土～IIに比べ、粘質の割合が高くなる。石器、礫、縄文時代後期～古代頃の土器片等を含む。
- II'' 黒褐色(10YR2/3)シルト質土～II''に比べ、さらに粘質の割合が高くなる。
- III 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土～細粒砂で、ややしまりがある。主に石器、礫、縄文時代中期～晩期の土器片等を含む。
- III' 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土～IIIに比べ、粘質の割合が高くなる。主に石器、礫、縄文時代中期～晩期の土器片等を含む。
- IV 褐色(10YR4/6)砂質土～やや粗粒砂でしまりが無い。III層、V層の漸移層。石器、礫、縄文時代前期～中期の土器片等を含む。
- IV' 褐色(10YR4/6)砂質土～IIIに比べ、粘質の割合が高くなる。
- V a 緑灰色(10YR4/6)砂質土～粗粒砂で、やや粘質が強い。無遺物層。第141図の注記番号20
- V a'' 明黄褐色(7.5YR5/6)粘質土～硬質でしまりがある。粘質が強く、乾燥するとクラックが入る。場所によっては黄味・緑味が強くなる。また部分的に砂質が強くなる場合もみられる。無遺物層。
- V b 明黄褐色(10YR4/6)砂質土～粗粒でしまりが無い。若干、軽石を含む。無遺物層。
- V b'' にぶい黄褐色(10YR8/6)粘質土～硬質でしまりがある。鉄分がまだら状に多く含まれる。若干、砂質がある。無遺物層。
- V c 明黄褐色(10YR4/6)砂質土～粗粒砂でしまりが無い。若干、軽石を含む。無遺物層。
- VI 円礫層第141図の注記番号24
- VII 礫層(宮崎層群)
- ① 明黄褐色(2.5YR5/4)粘質土～しまりがあり、土器片等をわずかに含む。明青灰色砂質土・明黄褐色粒・灰白色・鉄分を含み、西側に向かって量が增加する。第141図の注記番号11
- ② 黒褐色(2.5YR3/1)粘質土～しまりがある。灰白色粒・砂礫、浅黄橙色粒・砂礫を含む。第141図の注記番号13
- ④ a 灰オリブ色(5Y5/3)シルト質土～鉄分を多く含む。第141図の注記番号15
- ④ b オリブ灰色(2.5GY5/1)砂質土～粗粒砂でしまりがある。ごくわずかに軽石を含む。第141図の注記番号18
- VI a 明緑灰(10GY7/1)砂質土～粗粒砂でややしまりがなく軟質。
- VI b 明緑灰(10GY7/1)砂質土～粗粒砂でややしまりがなく軟質。明黄褐色粒を含む。
- VI c 明緑灰(10GY7/1)シルト質土～やや軟質。炭化物や植物遺体等を若干含む。明黄褐色砂粒を部分的に含む。
- VI d 明緑灰(10GY7/1)砂質土～粗粒砂でややしまりがなく軟質。やや粘質あり。

第3図 右葛ヶ迫遺跡 土層柱状図(1/20)

土の堆積がみられる。⑩層の明褐色粘質土には、1717年に降下した霧島新燃享保テフラが混在し、その下に畑跡と思われる畝状遺構が確認されている。傾斜が強いためか堆積が安定せず、出土する遺物もわずかであるが、⑩～⑫層間で古代から近世の遺物、14層（第141図の注記番号14）からは縄文土器が出土している。

第3節 調査の経過

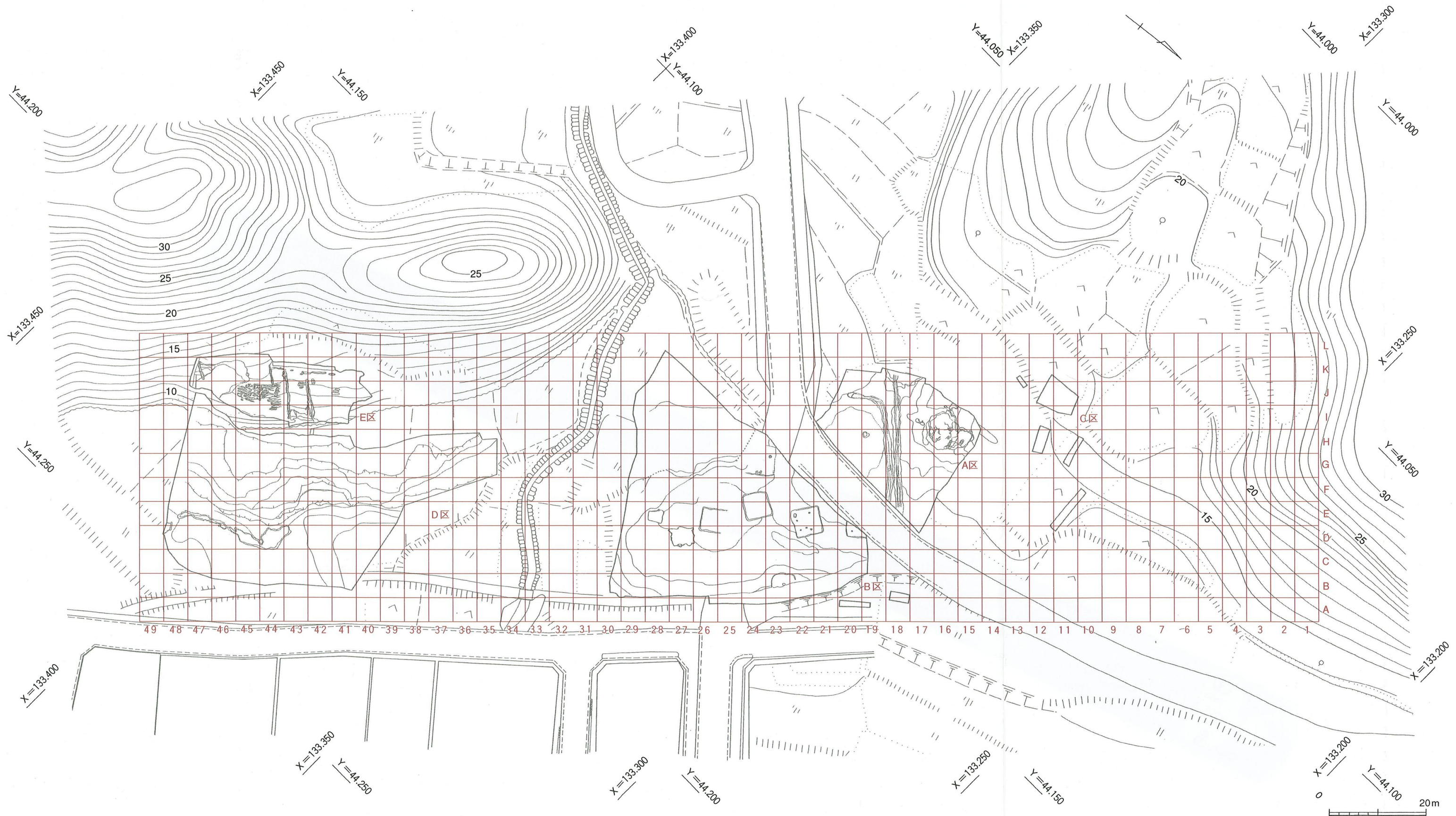
一般国道220号線青島バイパス建設工事に伴って平成6年9月6日より調査を開始した。調査対象範囲を便宜上、A～E区（A区…後背湿地部、B・D区…砂丘および後背湿地部、C・E区…丘陵裾部）に分割し、調査区共通の5mグリッドを設定した。調査は工事の関係上、旧道から日東興業青島ゴルフ倶楽部に通じる私道を閉鎖し、B区の中央部分を北東から北西方向に横断する取付け道路を新たに建設するため、その部分より行った。予想以上に遺物が多量に出土し、また砂丘上での調査のために乾燥が激しく、遺構検出が困難を極めた。ここで検出したのは縄文時代の竪穴住居1軒と集石遺構1基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡2軒、中近世の溝状遺構3条、時期不明の土坑3基である。面積に対して多くの遺構と多量の土器群が出土したこと等から10月末まで調査を行った。11月より取付け道路北側（B区北側）の調査と平行して、A・C～E区の試掘を行い、C区では遺構・遺物が確認出来なかったが、A・D・E区では落ち込みや遺物等が確認されたため、A区の調査を1月よりB区北側と平行して行った。

A区では時期不明の竪穴状遺構1基、中近世の溝状遺構2条が、またB区北側では縄文時代の竪穴住居1軒と集石遺構2基、弥生時代の竪穴住居跡2軒、古墳時代の竪穴住居跡2軒が新たに確認された。3月は雨が多く、A区については土質の関係上、調査区の壁が崩落したり、遺構内に水が溜まる等、復旧作業に追われた。

平成7年度は4月にA区の残りとは併行して、新たにB区の南側の調査を行った。A区では新たに竪穴状遺構1基を、B区南側では縄文時代の集石遺構3基や古墳時代の竪穴住居跡3軒、中近世の溝状遺構1条、時期不明の土坑4基が確認された。また調査区南西隅にてSE8の一部を確認した。調査区を工事範囲ぎりぎりまで拡張することも考えたが、SE8の深さが1.5m以上あり、埋土中の粘質土と砂層の間から水が浸透し、その都度、壁の崩落を繰り返したために、危険性を感じ、作業を中止した。

6月下旬からはD区、E区の調査に取りかかった。まず、E区の表土を重機で剥ぎ取り、その後は人力により掘り下げを行った。近世以降の畑跡や溝状遺構4条、平安時代の遺物が多く出土する竪穴状遺構1基が検出されている。これと併行して表土剥ぎが終了していたD区北東側半分の第Vb層上面で遺構検出を行い、自然流路と思われるSE7が確認された。7月中旬に、D区の残り半分の表土剥ぎを行った。ここは、試掘調査で大溝があるとされていた部分で、丘陵地に沿って幅12～13mの黒色シルト質土の溝状遺構（SE8）が検出された。当初、遺構の断面形態が人工的であること、遺構埋土に遺物が多く含まれていることなどから検出した全長約65mを人力による掘り上げを予定したが、時間的問題と途中、自然地形としての谷である可能性が高くなったことから、一部人力、残りを重機によって掘り上げる作業を行った。

11月2日に調査範囲のすべてを終了した。しかし、D区南側には未買収地が残り、その部分にはSE8が続くため、買収後、調査を行う予定である。



第4図 右葛ヶ迫遺跡グリッド配置図(S=1/700)

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 A・B区の調査

本来なら区ごとに分けて報告するべきだが、A区とB区の間が約9m幅の道路を隔てているだけであり、遺物包含層であるⅡ～Ⅳ層の範囲がA区の一部まで広がる。また出土している遺物のうち、区間での接合や同一個体もみられること等から便宜上、A・B区まとめて報告していきたい。

A区～B区にかけては砂丘および後背湿地部にあたりA区北西側より緩やかに傾斜し、B区ではさらに傾斜が緩くなり、平坦な面が多くなる。

A区(664㎡)は、Ⅴ層上面にて、古代～中世の竪穴状遺構2基、中～近世の溝状遺構2条が確認されている。またB区(1,715㎡)では、北側から北東部および南西部分にかけてⅤa層まで削平を受け、遺物包含層が消失していた。遺構は主にⅢ層～Ⅳ層上面にて検出し、縄文時代の遺構では竪穴住居2軒と集石遺構8基、弥生時代の竪穴住居跡3軒、古墳時代の竪穴住居跡8軒、中～近世の溝状遺構4条、時期不明の土坑8基、自然流路1条が確認された。また遺物では縄文時代前期～中近世までの遺物が確認され、その中でも縄文時代後期の遺物が多量に出土している。

1. 縄文時代の遺構・遺物

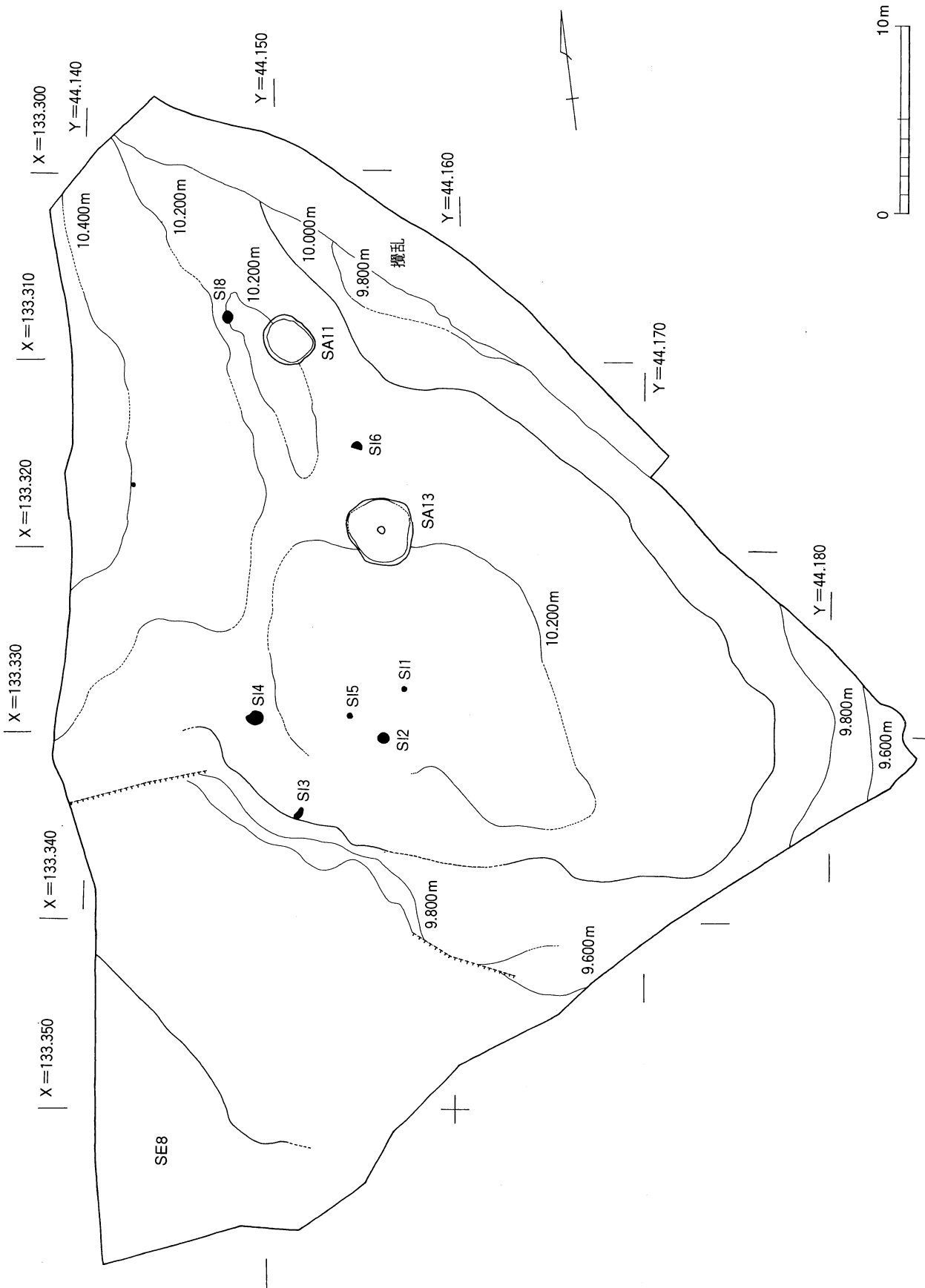
縄文時代の遺構については、B区の中央付近から北にかけて。西側から緩やかに傾斜する丘陵地がややフラットになった砂丘地帯に竪穴住居跡2軒、集石遺構8基が確認されている。以下、遺構ごとに説明していく。なお、ここでは遺構の説明のみを行い、遺構内出土遺物については、別に後述する。また、竪穴住居跡内等の遺物分布は報告書掲載遺物についてのみ分布状況を記号で表示している。記号の●が土器、○が石器を表している。

(1) 竪穴住居跡(SA)

竪穴住居跡はⅣ層からⅤb層で2軒確認されており、主にB区の中央部から北側にかけてのフラットな砂丘地帯に分布する。なお、Ⅲ層中で幾つか遺物が集中する部分がみられたが、掘り込み等は確認出来なかった。

SA11(第6図)

SA11はB区北側に位置する。検出面はⅣ層の褐色砂質土面で、長軸約2.70m、短軸約2.35m、検出面からの深さ約15cmの円形プランを呈する。床面積は3.98㎡を測る。埋土は暗褐色砂質土の単一層である。規模が小さく、支柱穴も確認されていない。遺物は土器・石器合わせて約50点確認出来、大半が住居中央付近から南側にかけて分布し、床面から約5cm～10cm浮いた状態で集中して出土している。その中で土器は径が復元できるものを中心に5個体(1～7)を図示する。石器は7点出土し、内訳はスクレイパー(903)1点、使用痕剥片1点、凹石(950)3点、石錘(991)2点である。なお、遺構内出土遺物については第6・7・109・111・116・121図に示している。



第5図 B区縄文時代遺構分布図 (S=1/300)

SA13 (第8図)

SA13はB区の中央からやや北寄りに位置し、北東に位置するSA11と約8m離れている。SA11と同様にIV層上面で検出している。長軸約3.8m・短軸約3.5mの楕円形プランを呈し、検出面からの床面までの深さは、約30mを測る。床面積は、8.6㎡である。埋土は1層で、粗粒でややしまりのある暗褐色砂質土が堆積していた。また、中央床面には44cm×34cmの範囲で被熱を受け赤化した焼砂がみられる。その他、柱穴などの付帯施設は確認出来ていない。なお、住居跡の北西側には、浅い凹みがみられ、土坑があった可能性も考えられるが、確認出来ていない。

遺物は、土器・石器合わせて15点と少なく、大半が住居内西側に分布し、床面から約20cm～30cm浮いた状態で出土している。土器の大半が小片で、そのうち2個体を図示する。石器は、石錐(894)と小形の台石(970)の2点が出土している。そのうち小形の台石(970)は、中央の焼砂上面で出土している。

なお、遺構内出土遺物については第8・119・894図で示している。

(2) 集石遺構(SI)

集石遺構は、8基確認されており、主にB区の中央部やや南寄りの緩傾斜地及びフラットな砂丘地帯に集中(SI1～4)している。規模としては径が60～70cmのものが目立つ。また後世に攪乱されたものも多く見られる。

集石は礫の密集度および掘り込みの有無等により、礫が密集するもの(SI2・5～7)。礫が密集し、掘り込みを持つもの(SI8)。礫がやや散在しているもの(SI1・4)の3つに分類することができる。以下個別に説明していきたい。

SI1 (第9図)

SI1は、B区中央に位置する。古墳時代の竪穴住居であるSA8の床面近くで確認されたが、住居に伴うものではなく、住居築造時に壊された集石遺構の残石と思われる。5～10cm程の角礫で、激しく火を受けたと思われる赤化や黒変が見られる。

SI2 (第9図)

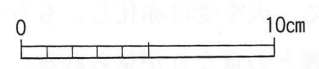
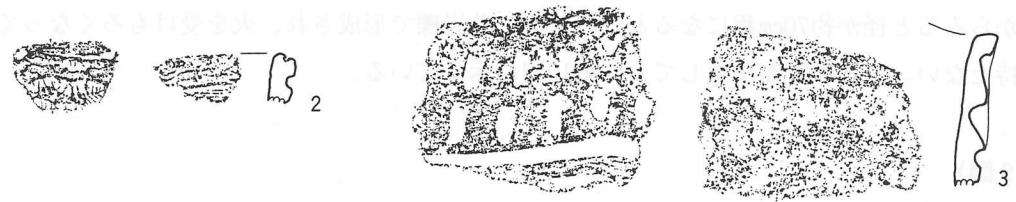
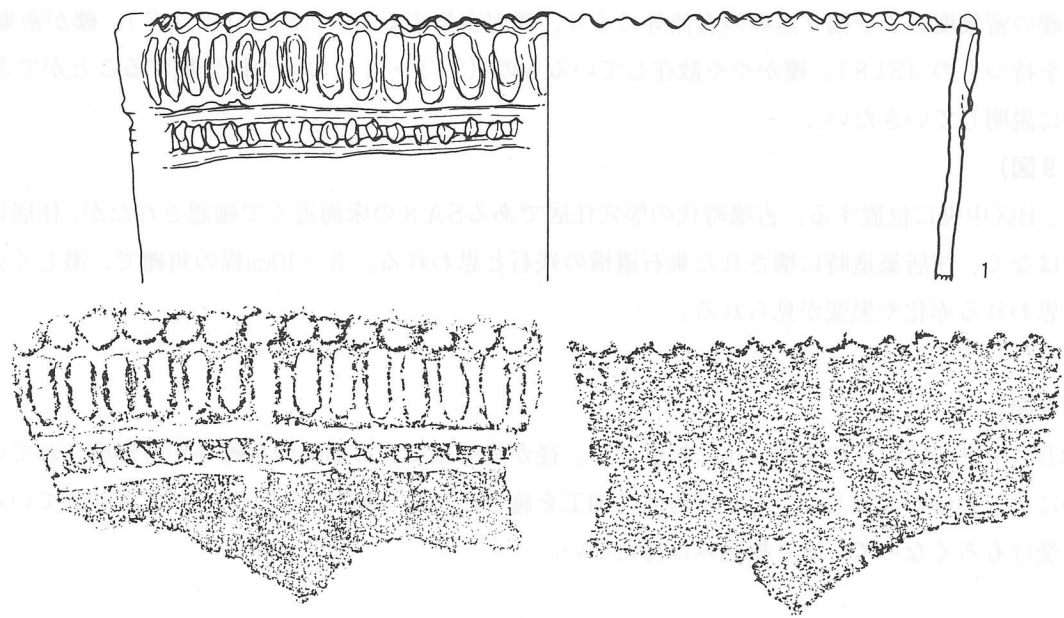
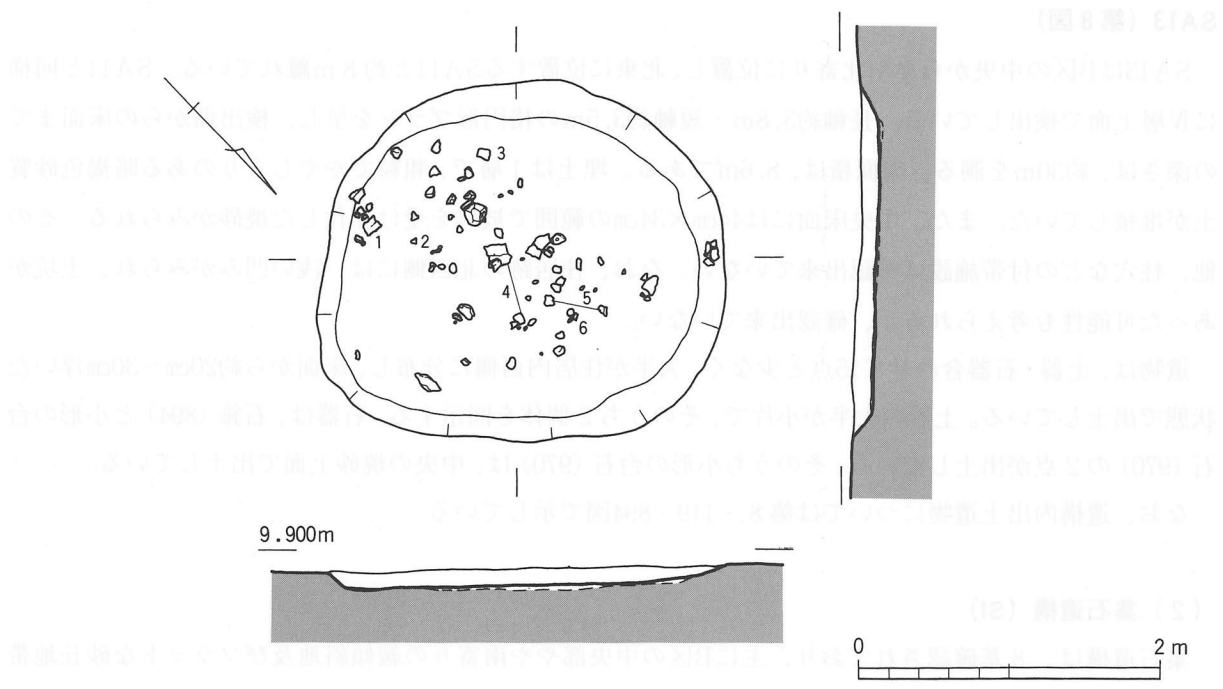
SI2はB区中央部、SI1の南西3mに位置する。径が約65cmで、37個程の角礫等から形成されている。底部中央には、半分が欠損しているが縁辺部に加工を施した石皿(第118図 966)が配置されている。礫は火を受けもろくなっている。掘込みは持たない。

SI3 (第9図)

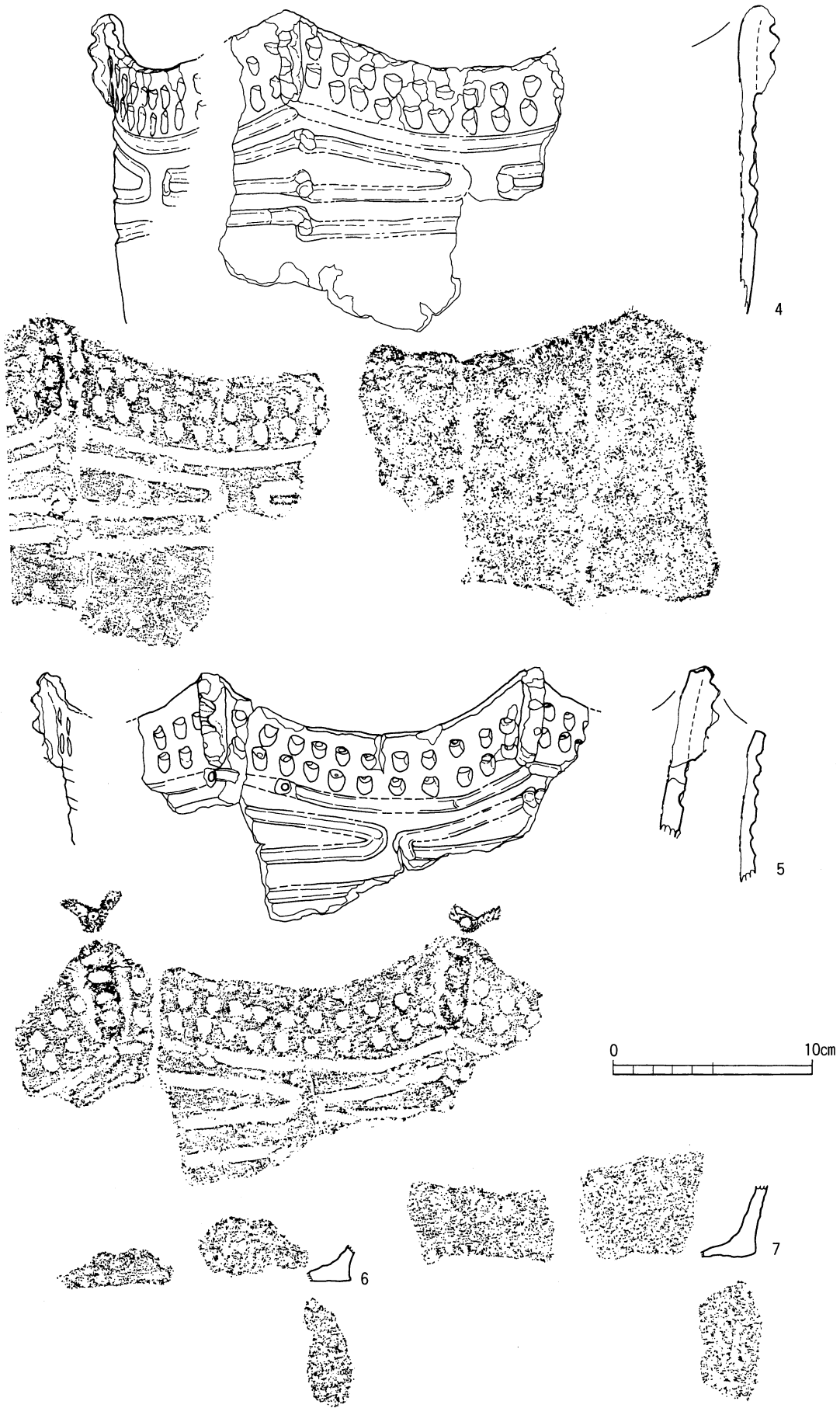
SI3は、SI1の南西約9mに位置する。遺構の北西側は後世の土坑(SC3)によって壊されている。遺存状況からみると径が約70cm程になると思われる。砂岩礫で形成され、火を受けもろくなっている。掘込みは持たない。土器片等が出土しており第10図に示している。

SI4 (第9図)

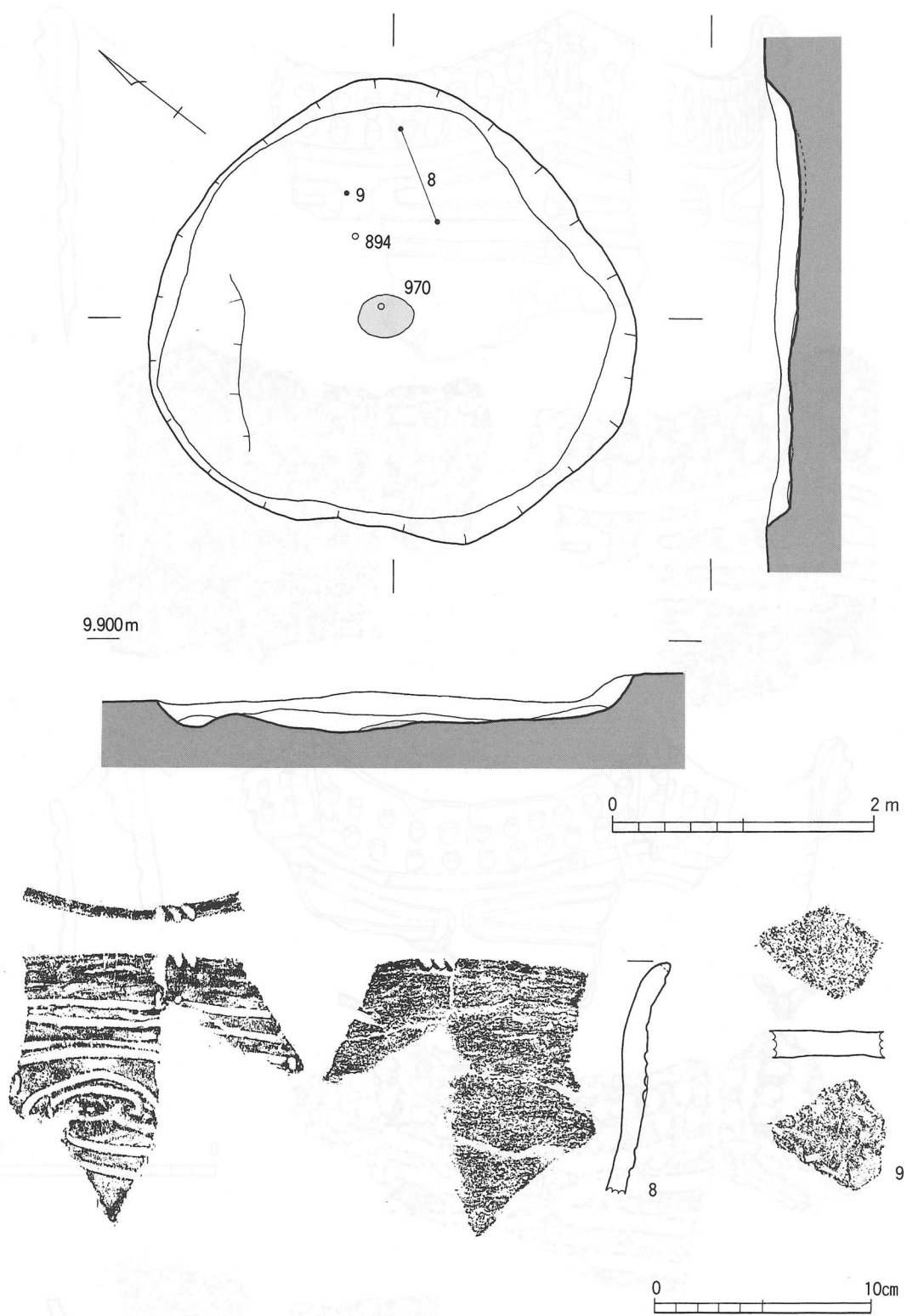
SI4は、SI3の北北西約5mに位置する。直径1mの範囲に10cm未満の砂岩礫約71個が散らばっている。火を受け赤化し、もろくなっている。下部に掘込みは確認できない。大型土器片(第11図 14)と礫との重なりが見られる。



第6図 B区SA 11 実測図 (S=1/50) 及び出土土器実測図 (S=1/3)



第7图 B区SA 11 出土土器实测图 (S=1/3)



第8図 B区SA 13 実測図 (S=1/50) 及び出土土器実測図

SI 6 (第9図)

B区の中央北寄りに位置し、南東に位置するSA13と約3m離れている。Ⅲ層下位で検出し、南側半分は、SA4(弥生時代)によって消失しているが、おおよそ直径約70cm規模の円形状になるものと考えられる。残存部では、47個の拳大から幼児頭大ほどの大きさの砂岩で構成されていて、主に円礫が多く、一部角礫を用いている。礫の密集度は高い。全体的に赤化が進み、特に東側について著しい。反対に東側は部分的に黒変した礫が多くみられる。明確な掘り込みは、確認できなかったが、断面の形状では、若干窪んでいる。

SI 7 (第10図)

B区の北西寄りに位置し、東に位置するSI6と約12m離れている。Ⅲ層直上で検出し、直径約35cmの楕円形状を呈し、9個の拳大から幼児頭大ほどの大きさの砂岩の円礫・角礫で構成されている。礫は、比較的まとまりを持つ。

今回図化していないが、北東側で土器小片2点、凹石1点が出土している。集石を構成する礫のほとんどに顕著な赤変が見られず、部分的に赤くなっているように見える程度である。

SI 8 (第10図)

B区の北寄りに位置し、南東に位置するSI6と約10m、SA11と約2m離れている。Ⅲ層下位からⅣ層上面で検出し、直径約60cmの円形を呈し、74個の拳大から幼児頭大ほどの大きさの砂岩の円礫・角礫で構成されていて、比較的円礫を多く用いているようである。礫の密集度は高い。礫のほとんどが赤化していて、特に西側について著しい。また、部分的に黒変した礫もみられる。下には、検出面より深さ約20cmの楕円形を呈する掘り込みが確認できた。

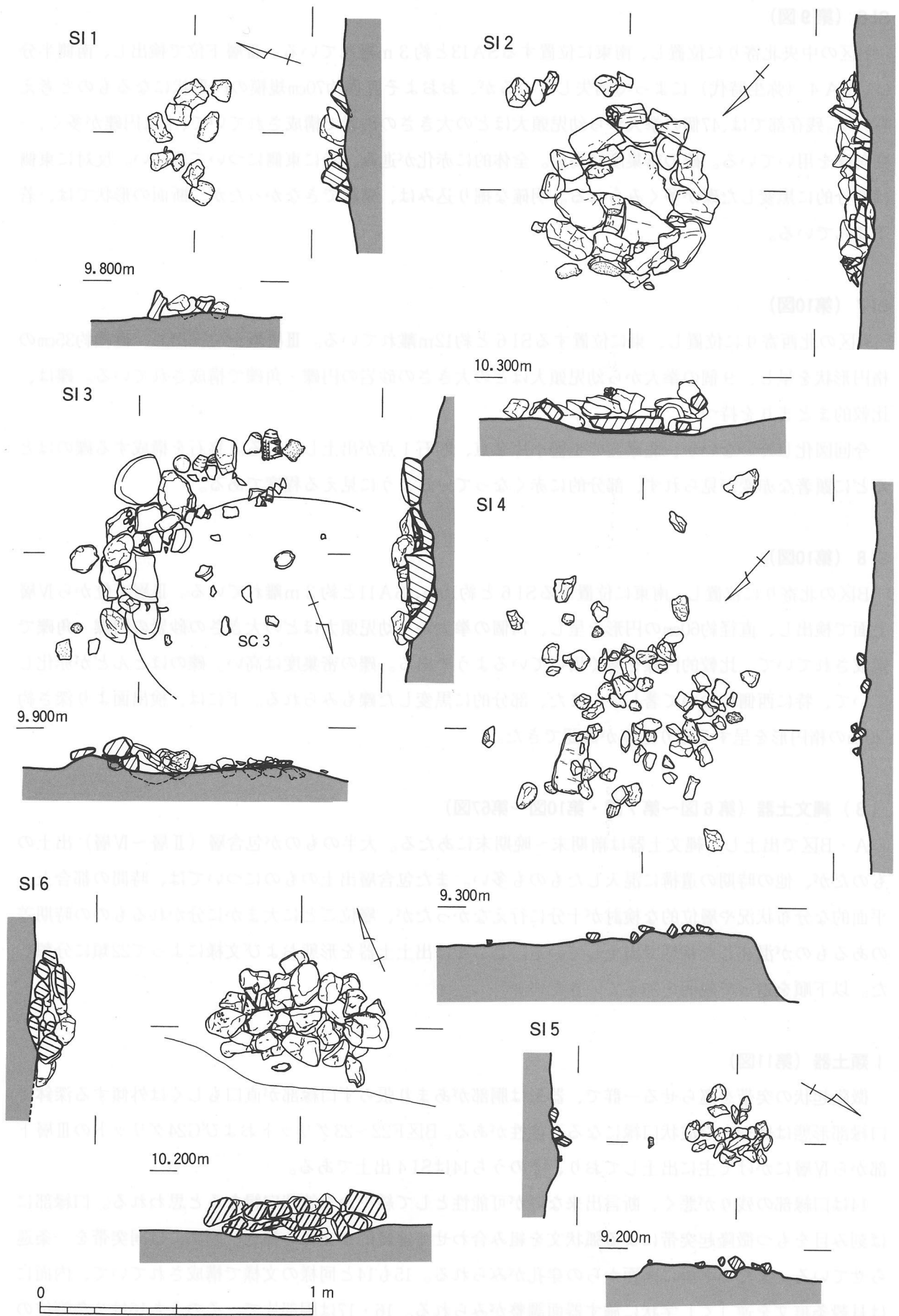
(3) 縄文土器 (第6図～第7図・第10図～第67図)

A・B区で出土した縄文土器は前期末～晩期末にあたる。大半のものが包含層(Ⅱ層～Ⅳ層)出土のものだが、他の時期の遺構に混入したものも多い。また包含層出土のものについては、時間の都合上、平面的な分布状況や層位的な検討が十分に行えなかったが、層位ごとに大まかに分かれるものの時期差のあるものが混在した状態で出土している。ここでは出土土器を形態および文様によって22類に分類した。以下順を追って説明を加えていきたい。

I 類土器 (第11図)

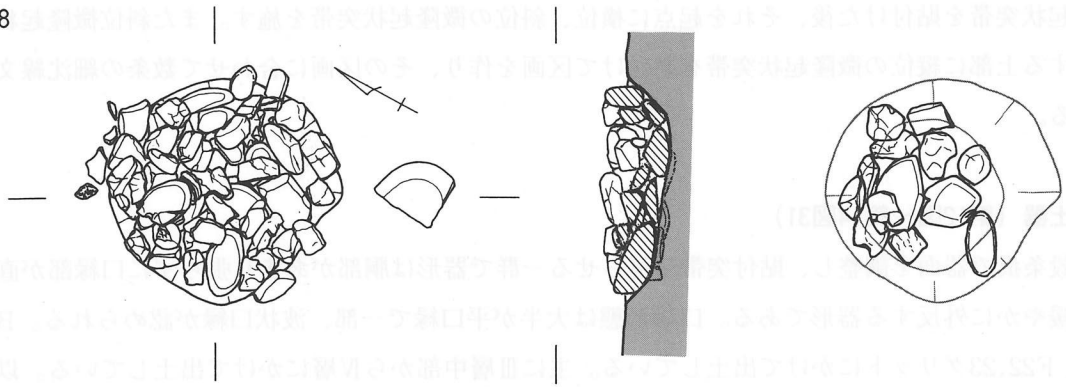
微隆起状の突帯を巡らせる一群で、器形は胴部があまり張らず口縁部が直口もしくは外傾する深鉢で口縁部形態は緩やかな波状口縁になる可能性がある。B区F22～23グリットおよびG24グリットのⅢ層下部からⅣ層にかけて主に出土しており、そのうち14はSI4出土である。

14は口縁部の残りが悪く、断言出来ないが可能性として緩やかな波状口縁なると思われる。口縁部には刻み目をもつ微隆起突帯による弧状文を組み合わせる連続的な文様を描き、胴部には同突帯を一条巡らせている。また2ヶ所に両面からの穿孔がみられる。15も14と同様の文様で構成されていて、内面には貝殻条痕文を逆「く」字状に施す器面調整がみられる。16・17は胴部片で、そのうち16は2条縦位の

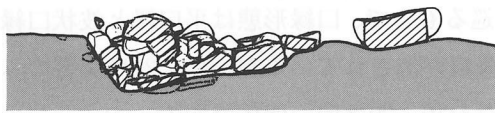


第9図 B区SI1~6実測図 (S=1/20)

SI 8

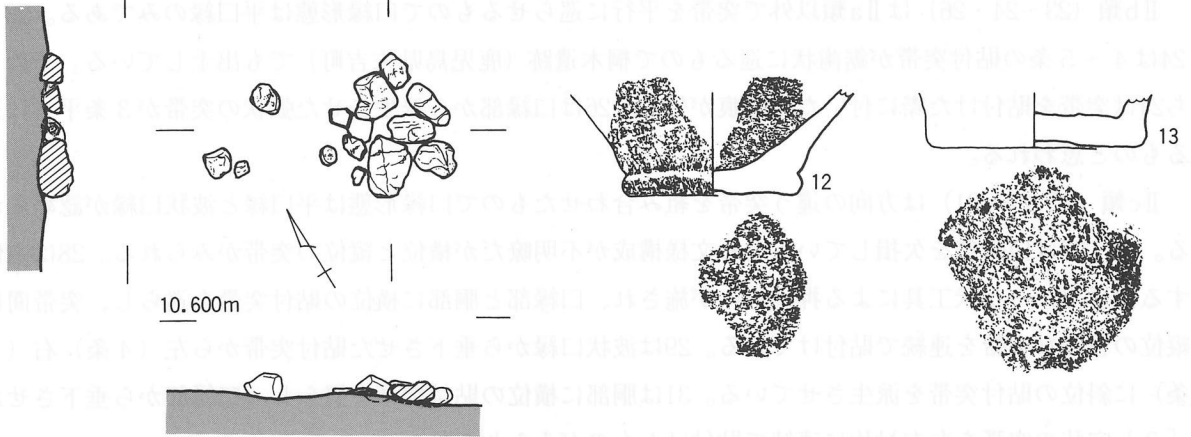


10.500m

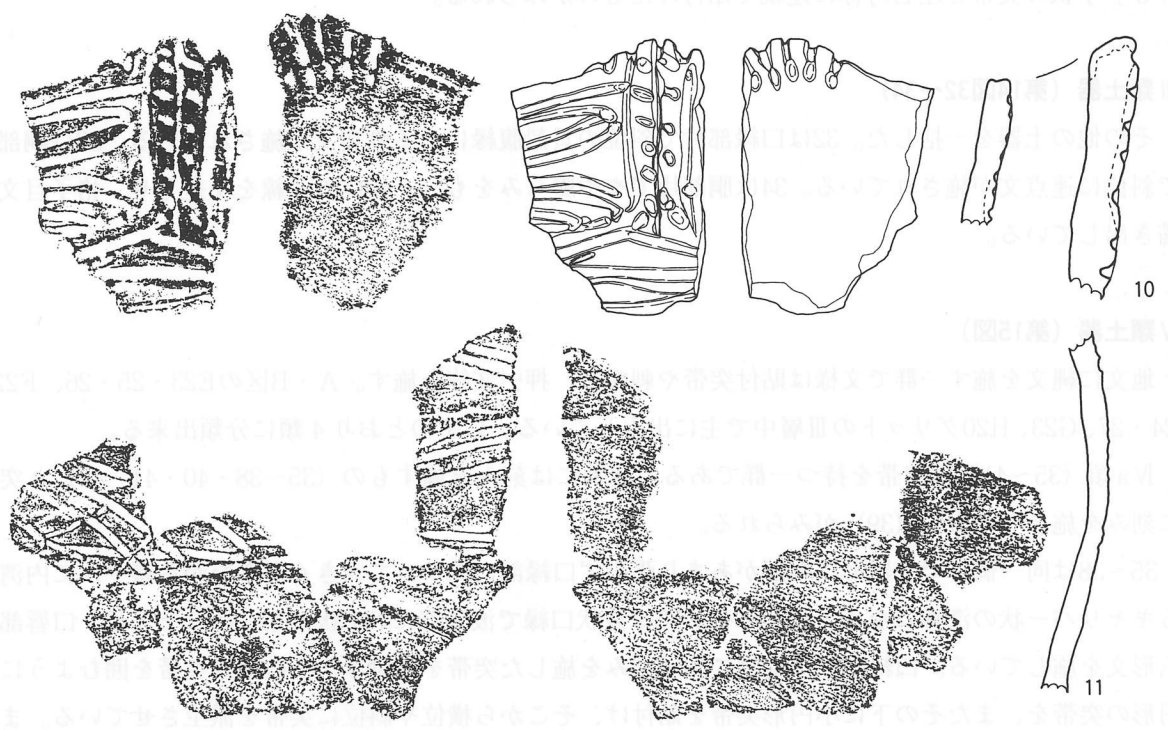


0 1 m

SI 7



10.600m



0 10cm

第10図 B区SI 7・8 実測図(S=1/20)及びSI 3出土土器実測図(S=1/3)

微隆起伏突帯を貼付けた後、それを起点に横位、斜位の微隆起伏突帯を施す。また斜位微隆起伏突帯が交差する上部に縦位の微隆起伏突帯を貼付けて区画を作り、その区画に合わせて数条の細沈線文を施している。

II 類土器 (第12図～第14図31)

貝殻条痕で器面を調整し、貼付突帯を巡らせる一群で器形は胴部があまり張らずに口縁部が直口もしくは緩やかに外反する器形である。口縁形態は大半が平口縁で一部、波状口縁が認められる。B区E23～27、F22、23グリットにかけて出土している。主にⅢ層中部からⅣ層にかけて出土している。以下の通り3類に細分した。

IIa類 (18～22) は数条の貼付突帯が横位に平行に巡るもので、口縁形態は平口縁と波状口縁が認められる。18、22は突帯間にナデ調整を施し地文の貝殻条痕が消されているが、19・21は突帯のみナデ調整が施され突帯間には地文の貝殻条痕が残っている。なお19・20は同一個体である。

IIb類 (23～24・26) はIIa類以外で突帯を平行に巡らせるもので口縁形態は平口縁のみである。23・24は4～5条の貼付突帯が鋸歯状に巡るもので桐木遺跡(鹿児島県末吉町)でも出土している。そのうち24は突帯を貼付けた際に付いた指頭痕が残る。26は口縁部から派生させた弧状の突帯が3条平行に巡るものと思われる。

IIc類 (25・27～31) は方向の違う突帯を組み合わせたもので口縁形態は平口縁と波状口縁が認められる。27・30は口縁部を欠損しているため文様構成が不明瞭だが横位と縦位の突帯がみられる。28は内傾する口唇部にヘラ状工具による押圧刻みが施され、口縁部と胴部に横位の貼付突帯を巡らし、突帯間に縦位の粗雑な突帯を連続で貼付けている。29は波状口縁から垂下させた貼付突帯から左(4条)右(1条)に斜位の貼付突帯を派生させている。31は胴部に横位の貼付突帯を巡らし、口縁部から垂下させた「3」字状の突帯を左右対称に連続で貼付けたものがみられる。

III 類土器 (第14図32～34)

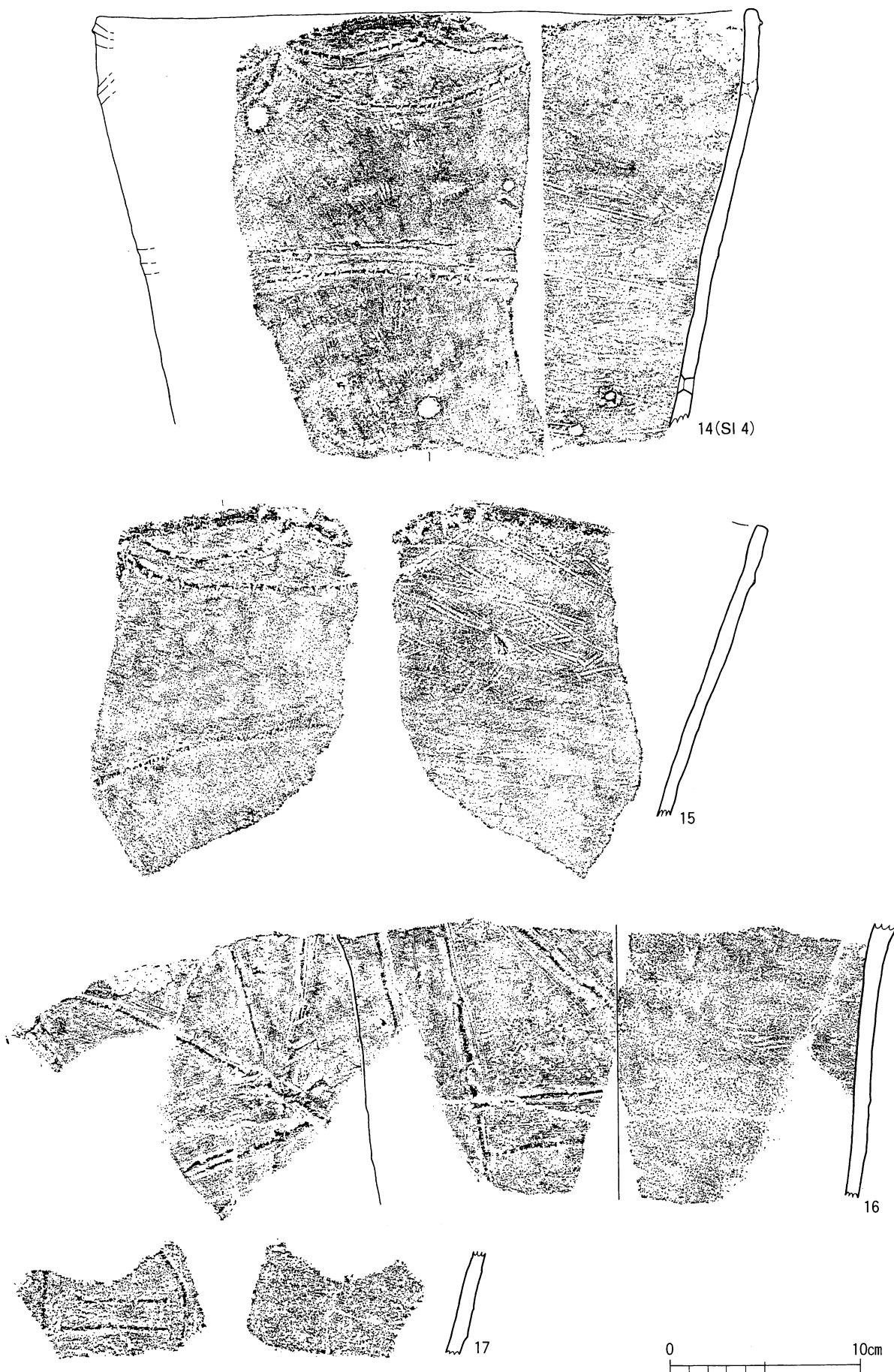
その他の土器を一括した。32は口縁部片で斜位の貝殻腹縁による刺突文が施されている。33は胴部片で斜位に連点文が施されている。34は胴部片でやや膨らみをもつ。斜位の沈線を交差させ、格子目文を描き出している。

IV 類土器 (第15図)

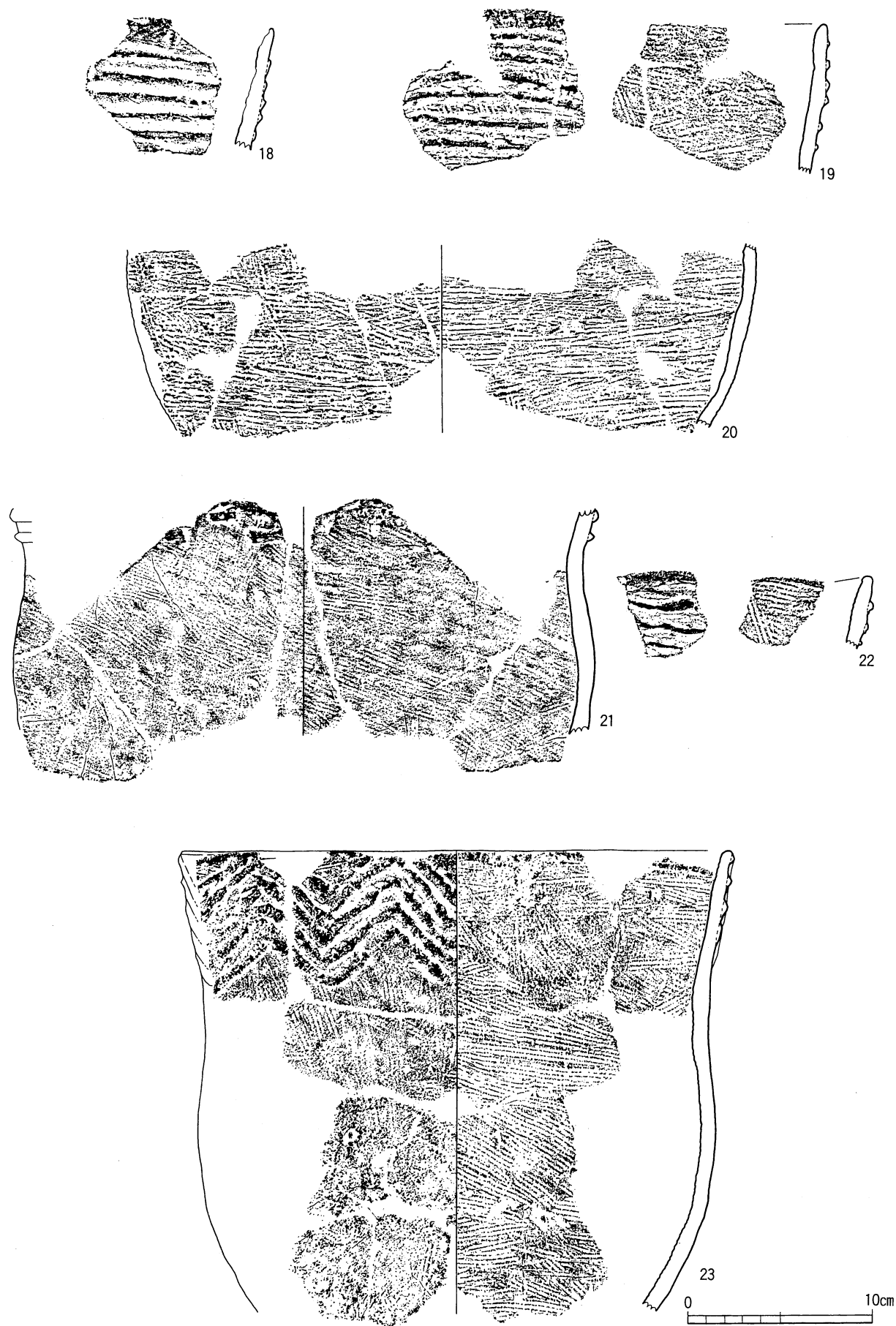
地文に縄文を施す一群で文様は貼付突帯や刺突文、押引文等を施す。A・B区のE23・25・26、F22・24・27、G23、H20グリットのⅢ層中で主に出土している。以下のとおり4類に分類出来る。

IVa類 (35～41) は突帯を持つ一群である。突帯には刻みを施すもの(35～38・40・41・45)と突帯に刻みを施さないもの(39)がみられる。

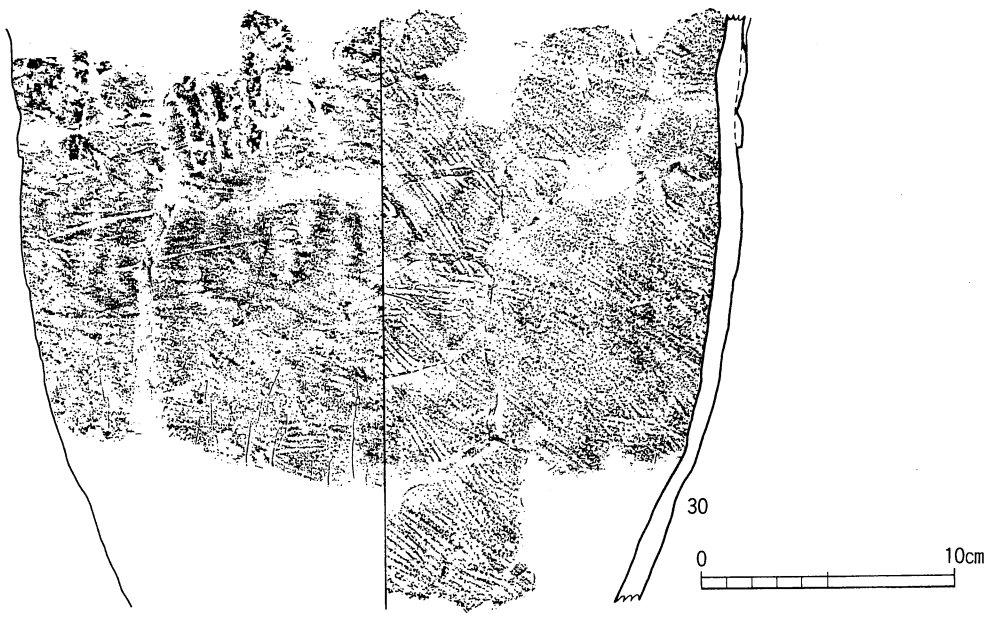
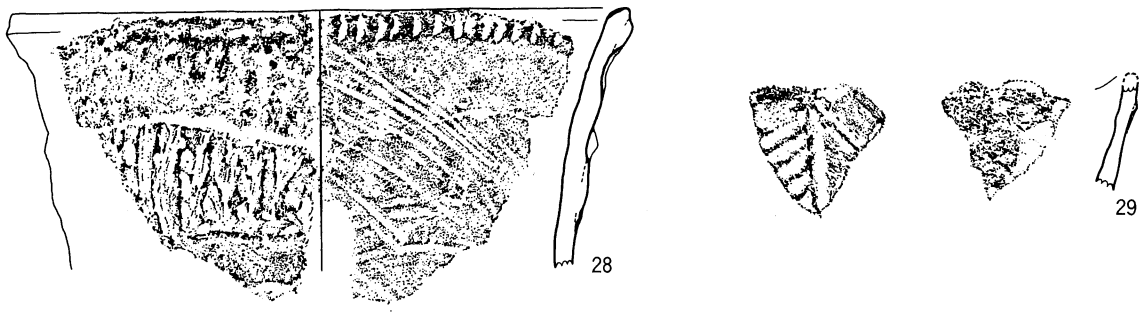
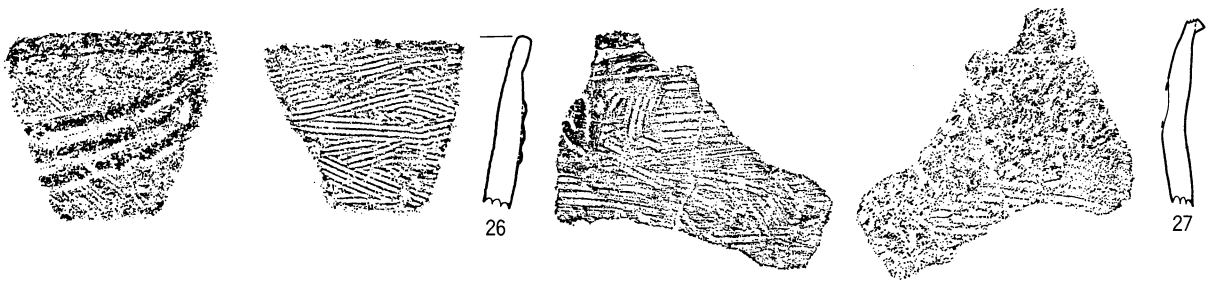
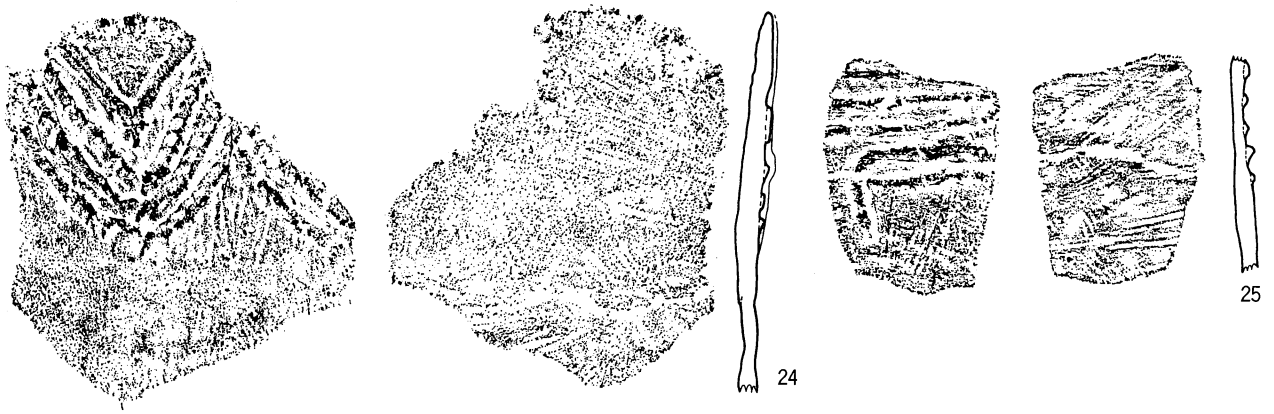
35～38は同一個体で、器形は胴部があまり張らず口縁部に向かって大きく開きながら緩やかに内湾するキャリパー状の深鉢になると思われる。35は波状口縁で波頂部にU字状の深い抉りを入れ、口唇部に爪形文を施している。口縁部には縦位に押圧刻みを施した突帯を貼付け、その刻目突帯を囲むように大円形の突帯を、またその下に小円形突帯を貼付け、そこから横位や斜位に突帯を派生させている。またそれらの突帯には爪形文が施されている。36～38は頸部～胴部片で35と同様、爪形文の施した突帯によ



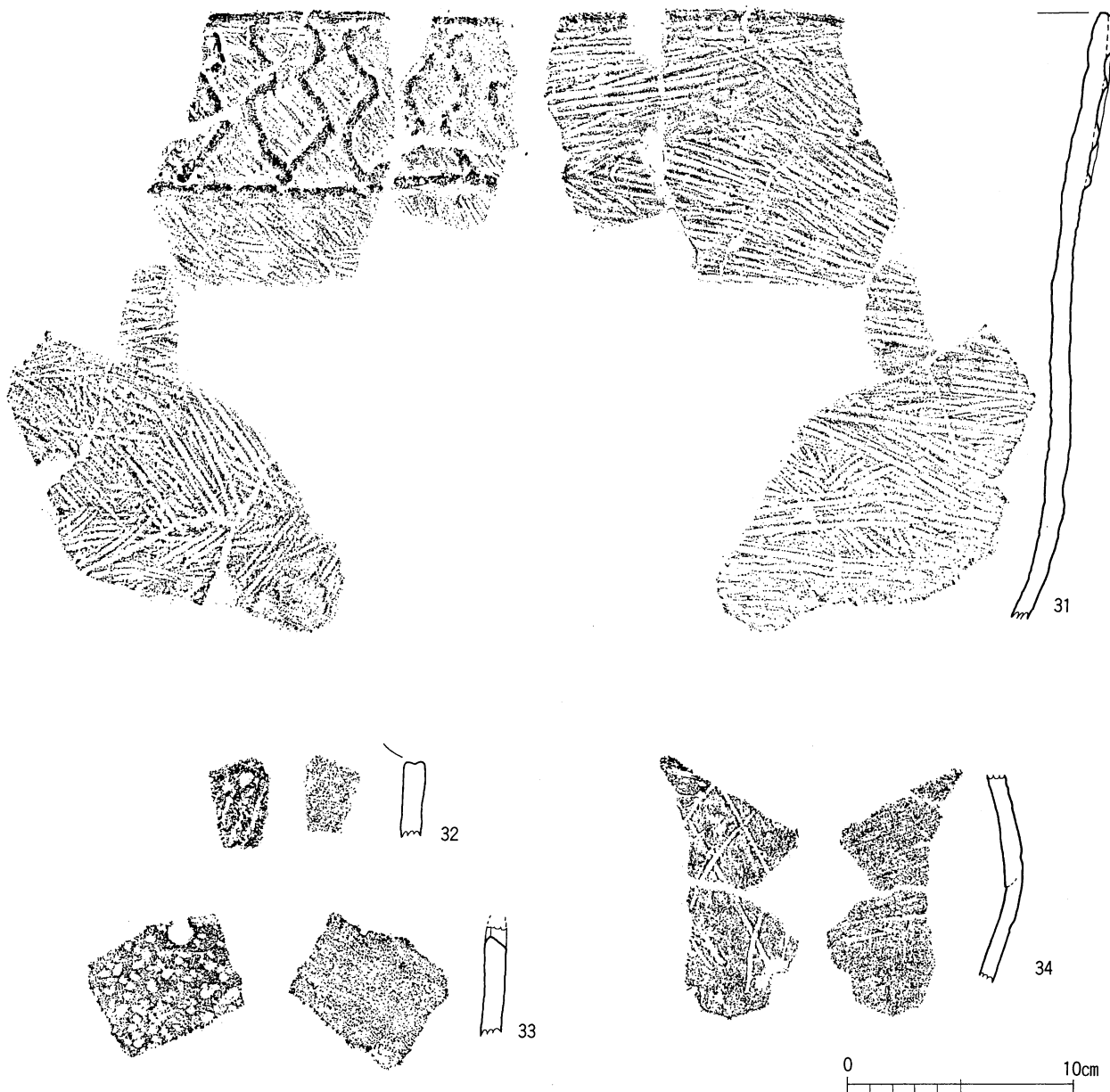
第11図 B区SI4 出土土器実測図及び縄文土器実測図(S=1/3)



第12図 縄文土器実測図(2)(S=1/3)



第13図 縄文土器実測図(3)(S=1/3)



第14図 縄文土器実測図(4)(S=1/3)

て文様を施している。38は口縁部に向かって開きながら口縁端部でやや内湾する器形で、口唇部と突帯に細かく押圧刻みを施している。41は口縁部が外反するもので頸部に刻目突帯を貼付けている。外面に施文されている縄文はナデ調整のため部分的に消されている。また内面上部には2段の無節縄文が施され、境に稜を作り出している。

39は波状口縁で口縁直下に突帯を貼付け、波頂間の低くなる部分から縦位、斜位に突帯を派生させている。斜位に下ろした突帯間に円形や弧状の突帯を張り付けている。突帯のまわりにはナデ調整が行われている。

IVb類(42~44)は押引文や刺突文を施す一群である。42・44は外反する口縁部でどちらも口縁形態は波状口縁で、外面には押し引き文が施されている。外面には縄文が施されていないが、内面上部には無節の縄文が施されている。43は内外面および口唇部に撚りの強い縄文が施され、外面にはヘラ状の工具による連続刺突文がみられる。

IVc類(45~47)は胴部片を一括した。45・46は地文の縄文に刻目突帯と連続刺突文とを組み合わせ、文様を描いている。47は外面に無節の縄文を施している。

V類土器(第16図)

刻みのある貼付突帯もしくは連続刺突文や沈線文等が巡る一群で、器形は口縁部を内湾させる、いわゆるキャリパー状を呈するものや外反させている。A・B区C23、E23・26、F23・25・26、H20グリットで主にⅢ層中より出土している。また、SA7やSE6等、他の時期の遺構に混入するものが多い。以下のとおり4類に細分出来る。

Va類(48~55)は刻みのある突帯をもつ一群である。なお、この中には刻目突帯と他の施文との組み合わせのものも含めた。口縁形態は大半が波状口縁で、一部に平口縁が認められる。48・49は緩やかな波状口縁で、48は口縁部から弧状の突帯を連続で貼付け、そのうち波頂部の下を巡るやや浅い突帯内に「M」字状の突帯を貼付けている。突帯で充填しない方には口唇部に薄めの粘土帯を貼付け、その上に押圧刻みを施している。49は波頂部に鋸歯状の太い突帯を貼付け、両脇の口唇部には48同様、薄めの粘土帯を貼付け、その上に押圧刻みを施している。どちらも突帯にも貝殻腹縁による押圧を施している。また貼付突帯には弧状(50)や横位(51)、鋸歯状(54)といったものや2状の垂下する突帯に横位の短い突帯がつけられたもの(55)もみられる。52・53は同一個体で、器形はキャリパー状の器形を呈する。波状口縁から垂下させた連続刺突文が施された貼付突帯から左右に沈線文や連続刺突文を施している。

Vb類(56~59)はVa類土器以外の施文によって文様を施された一群である。56はキャリパー状の器形を呈し、2段の連続刺突文が施されている。59も同じくキャリパー状の器形で口縁部の上位に沈線文を施し、中位に連続刺突文が施されている。57・58は押引文が施文されているもので、57は外反する器形だが、58は口縁端部がやや内湾している。

VI類土器(第6図1~3、第7図4~7、第17図~第18図74)

指頭や竹管状工具、棒状工具等による凹線文を施す一群で、B区SA13やC20・21、D20~23、E21・23、E21、F24グリットでⅢ層中より出土している。以下のとおり4類に細分出来る。

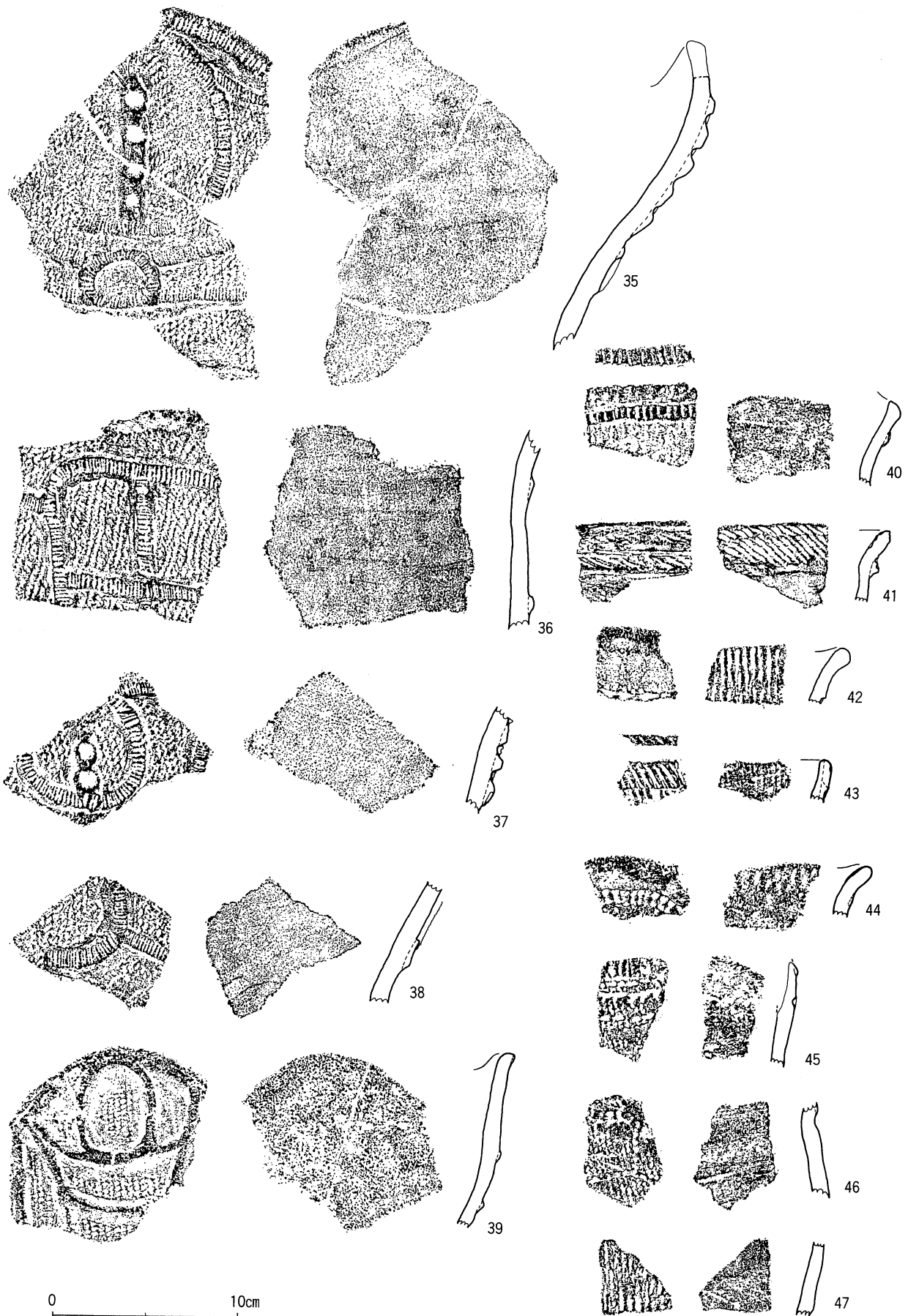
Va類(60・61)は口唇部に押圧刻みをもち、口縁部から胴部にかけて凹線文を施す一群である。器形は胴部があまり張らず口縁部が直口もしくは内傾ぎみになる深鉢で口縁部形態は平口縁である。

60は波状の凹線を施す。61は崩野遺跡(南郷町)出土のものと同様構成が同一で凹線による同心状に渦巻文や三角形を施す。内面には外面を施文した際についた凸痕がみられる。

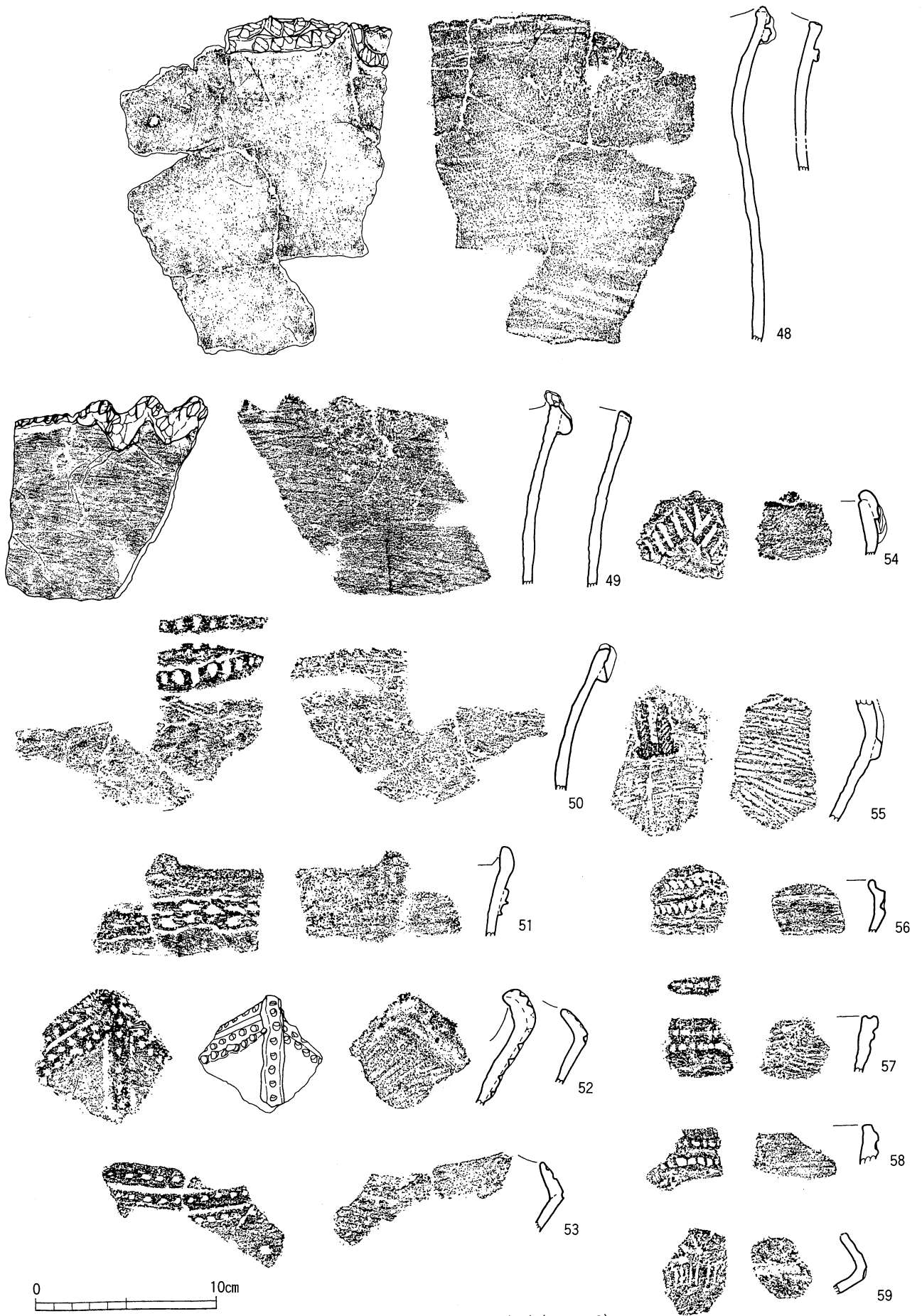
Vb類(62~70)は口縁部に短凹線文や刺突文等を巡らし、その下位に凹線文を施す一群である。器形は胴部があまり張らず口縁部が直口もしくはやや外反する深鉢で口縁部形態は平口縁と波状口縁とがみられる。

平口縁のもの(1・65~67・69)は口唇部に押圧刻みを施し、波状を呈するものが多い。口縁部には縦位の短凹線文や刺突文を1段ないし2段巡らせ、その下には1のように2条の凹線を巡らせた後、凹線間に連続刺突文を施すものや66のように曲線的な凹線文を施したものがみられる。

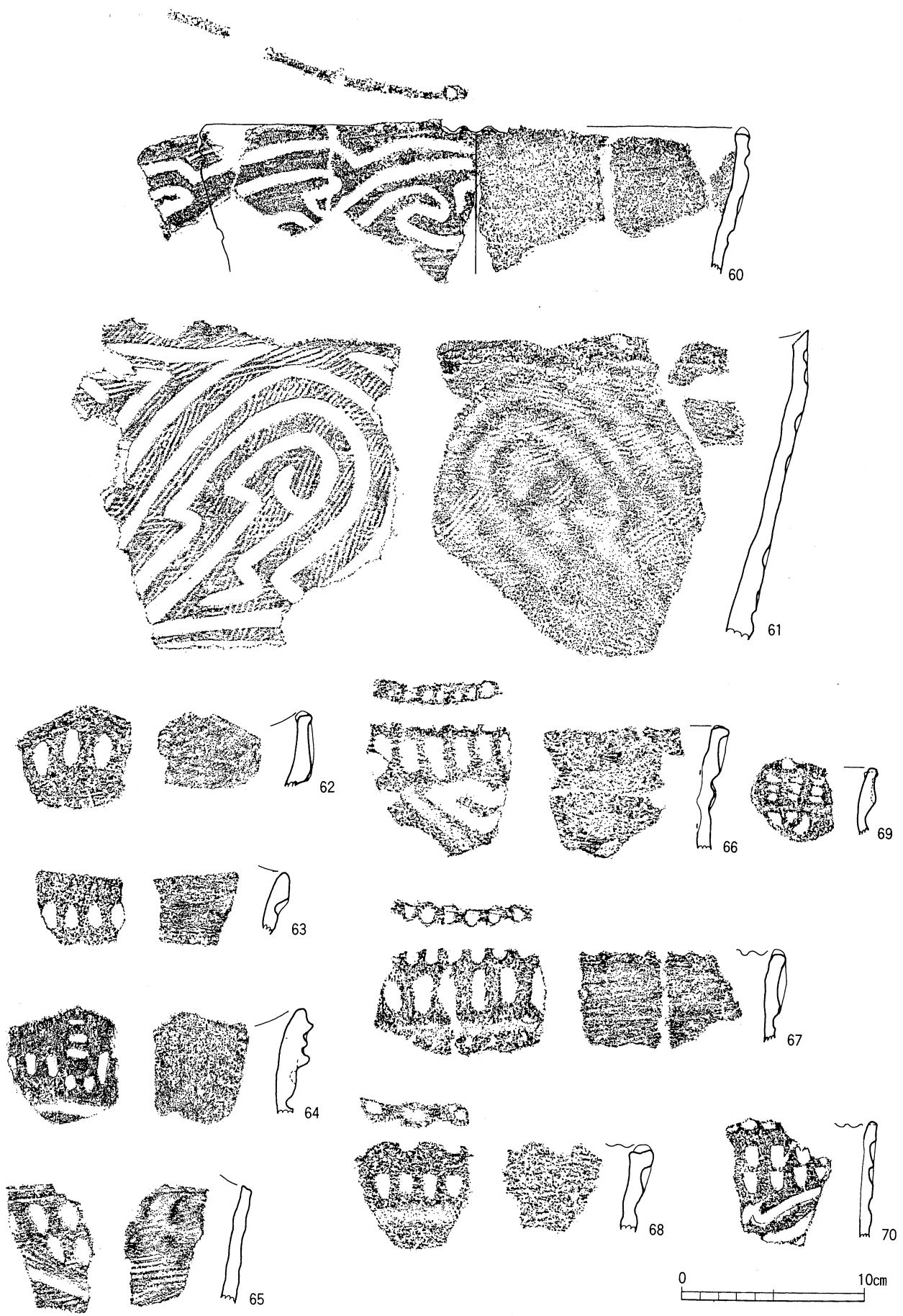
波状口縁のもの(3・4・5・62~65)には平口縁同様、口縁部には縦位の短凹線文や刺突文を1段ないし2段巡らせている。波頂部には貼付突起もつもの(4・5・64)もあり、その突起の左右に短凹



第15図 縄文土器実測図(5)(S=1/3)



第16図 縄文土器実測図(6)(S=1/3)

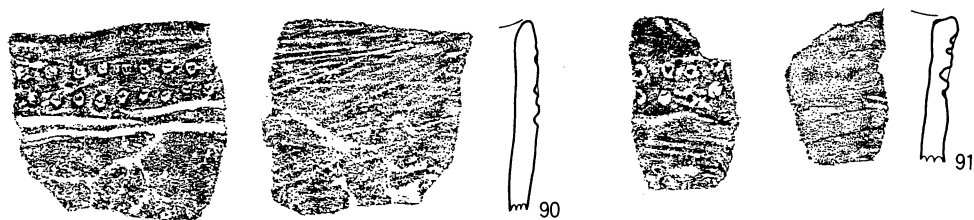
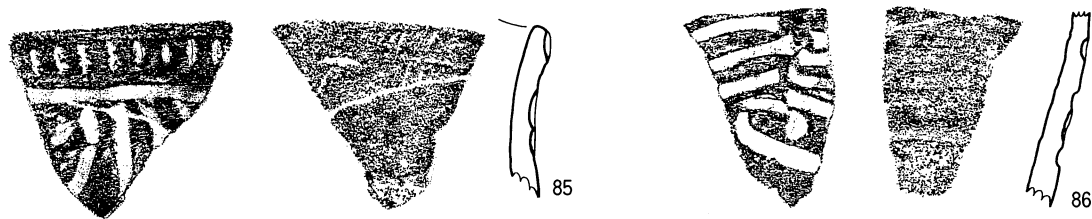
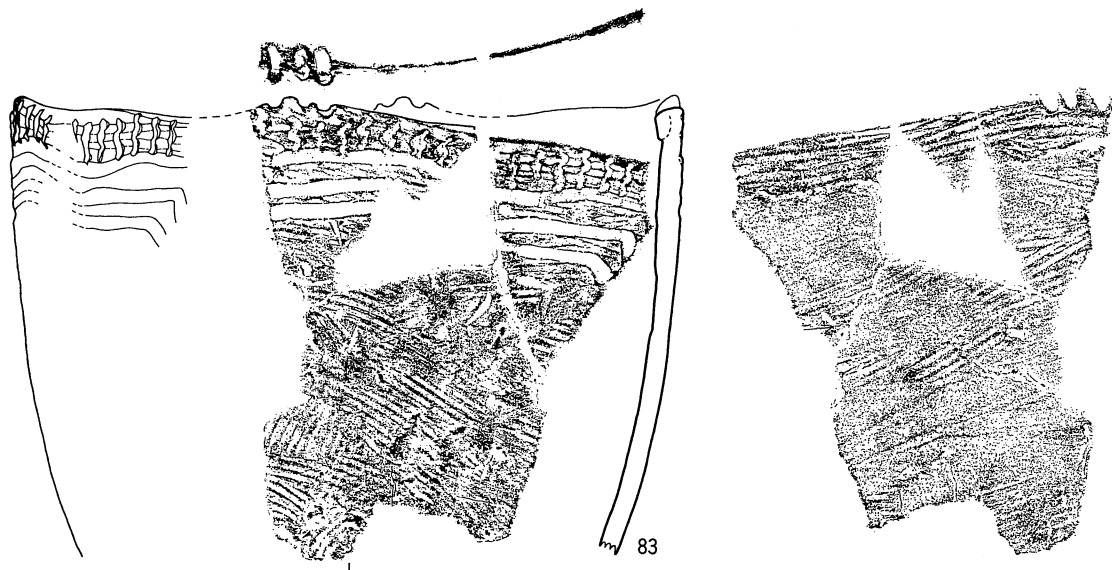


第17図 縄文土器実測図(7)(S=1/3)

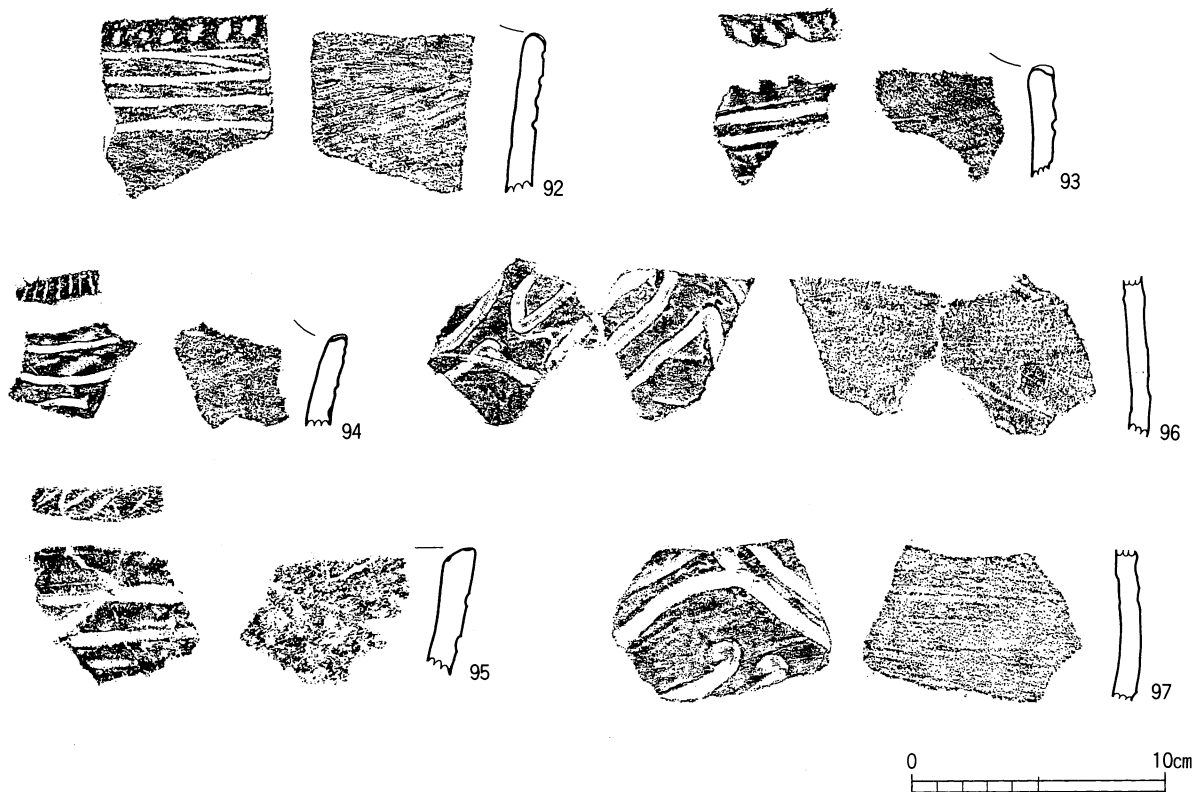


0 10cm

第18図 縄文土器実測図(8)(S=1/3)



第19図 縄文土器実測図(9)(S=1/3)



第20図 縄文土器実測図(10) (S=1/3)

線文や刺突文を展開させている。口縁部のみの資料が多いため胴部文様が不明なものが多いがその中で同一個体である4と5は胴部まで残る資料で6ヶ所に波頂部をもち、波頂の口唇部には竹管状工具による刺突を施し、その下に貼付突起もつ。突起間には同工具による2段の連続刺突を施し、その下には突起と突起を結ぶように凹線文が巡る。その下の凹線文との間には三角形の区画文を施しているが、いずれも突起を起点に描かれている。なお7も4・5の同一個体の可能性があり、底面にはアジロ編み圧痕(1本越え1本潜り1本送り)がみられる。

Vlc類(74・75)は2点のみの資料で口縁部形態は波状口縁をなし、胴部があまり張らず口縁部がやや外反する深鉢で口縁部に2条の凹線文巡らし、その凹線間に貝殻腹縁刺突文を施す。下位には凹線文によって文様を描いている。

Vld類(71~73)は胴部片を一括した。

VII類土器(第18図76~第20図)

凹線文や太めの沈線文を施す一群で、主にB区C20・23、D21・22、E22・23・25・27、F22・23・25・27グリットにおいてⅢ層中より出土している。以下のとおり4類に細分出来る。

VIIa類(76~78)は凹線文を施す一群である。器形は胴部がやや張り、内傾しながらわずかに外反するか、もしくは緩やかに外反する深鉢で口縁形態は平口縁と波状口縁とが認められる。口縁下に横位凹線文や太めの沈線文の下に文様を施している。

VIIb類(79~91)は口縁部に連続刺突文を巡らし、その下に凹線文や沈線文を施す一群である。器形は胴部があまり張らず、口縁部が直口もしくはやや外反する深鉢で、口縁形態は平口縁と波状口縁とが認められる。口唇部は内傾するものが多い。口縁部の刺突文は縦位もしくは斜位の貝殻腹縁による連続刺突文を巡らせるもの(79~88)や竹管状工具による連続刺突文を巡らせるもの(90・91)がみられる。波状口縁のもの(83・84)は波頂部に押圧刻みが施されている。胴部文様帯は数条の横位沈線文を巡らせた単純なもの(79~81・83・87~88・90)や曲線文との組み合わせを持つもの(82)、横位沈線文の下に縦位や斜位に沈線文を巡らせたもの(84・85)がみられる。また87・88のように沈線文上もしくは沈線間に貝殻腹縁刺突を施す例もみられる。なお84~86は同一個体の可能性がある。

ただし89は他のものと文様構成が逆転しているが、器形や調整など似通る点も認められることからこの分類に含めた。91は刺突のみだが前者と同様に含めた。

VIIc類土器(92~95)はVIIb類同様の器形で口唇部に押圧刻みを施し、その下に沈線文を施す一群である。

VIIId類土器(96~97)は胴部を一括した。

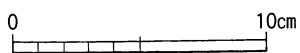
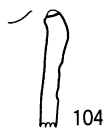
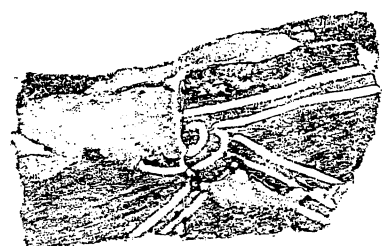
VIII類土器(第8図8、第10図10・11、第21図~第37図)

口縁部から胴部にかけて2条の平行沈線文を基本として文様を施す一群で、最も出土量が多く本遺跡の主体をなす土器である。B区SA11やSI8、C22・23、D21~25、E21~25、F22~27、G23グリットでII層~III層中より出土している。

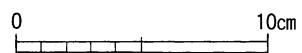
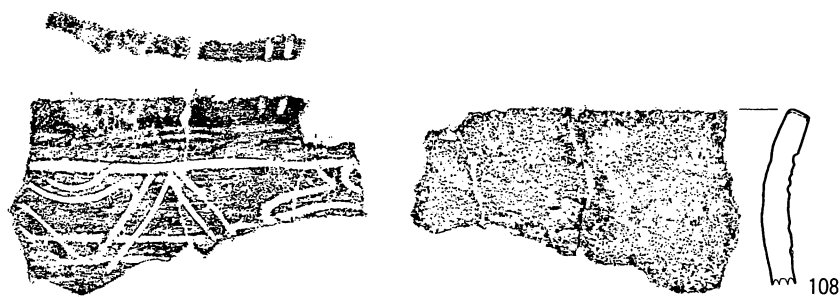
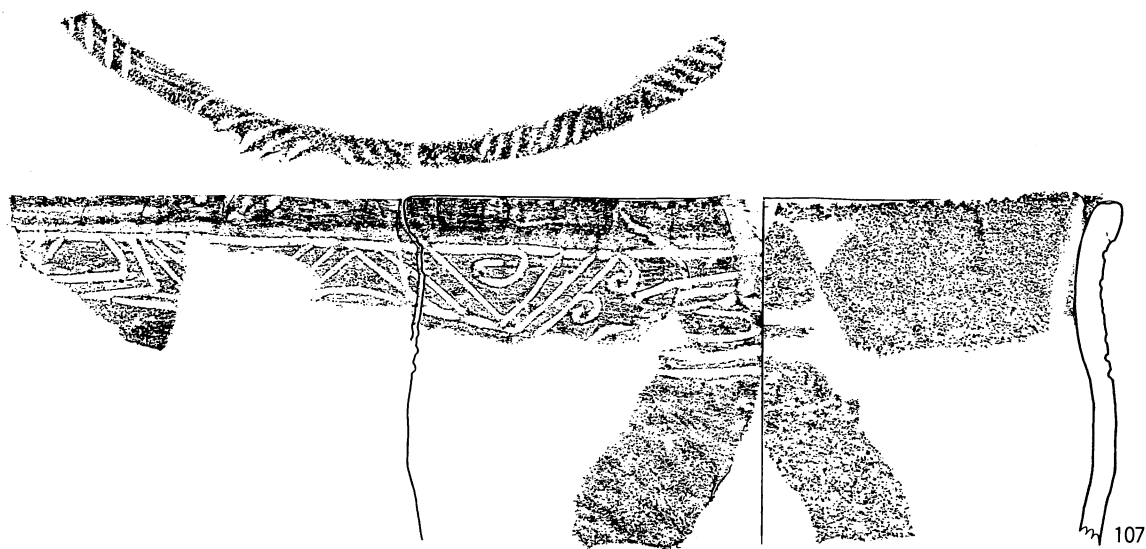
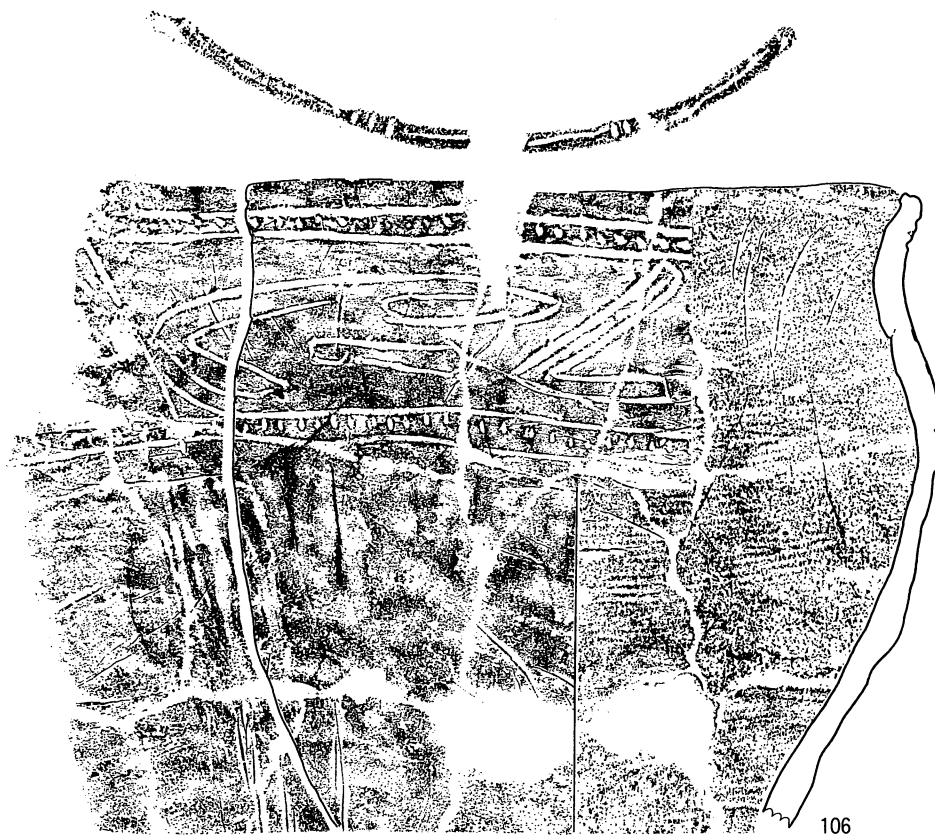
VIIIa類(8・98~151・198)は2条の平行沈線文を施すもの一群で、器形や文様のバリエーションが多く、細分出来そうだが、便宜上一括した。器形は口縁に向かって、直口もしくは外反ぎみに開くものと胴部が膨らみ、口縁部が外反するものがあり、口縁形態は平口縁もしくは波状口縁がある。中には内面を肥厚させるものや稜をもつものもみられる。平口縁のものは口唇部に押圧刻みや沈線文を巡らせるもの(8・106~108)がみられ、波状口縁のものには押圧刻みを施すもの(109~113・142~149・151)や押圧刻みと連続刺突文を組み合わせたもの(114)がみられる。

文様は長方形の区画文や口縁部~頸部と胴部に巡らした沈線間に沈線文や曲線文を充填させるもの(98・106~108・131・149)や、さらに沈線間を斜位の沈線文で結んで平行四辺形区画をつくるもの(113)、その平行四辺形区画内に沈線文や曲線文を充填させるもの(111・117・118・128・141~143・148・150・151)等、複雑なものもみられるが、中には単純に2平行の短沈線文を巡らせるもの(109・126)や波頂部から垂下させるように蛇行状の2平行沈線文を施し、波底部には2平行の縦位の短沈線文を施すもの(114)がみられる。なお、102・103、104・105、107・108、117・118は同一個体の可能性がある。

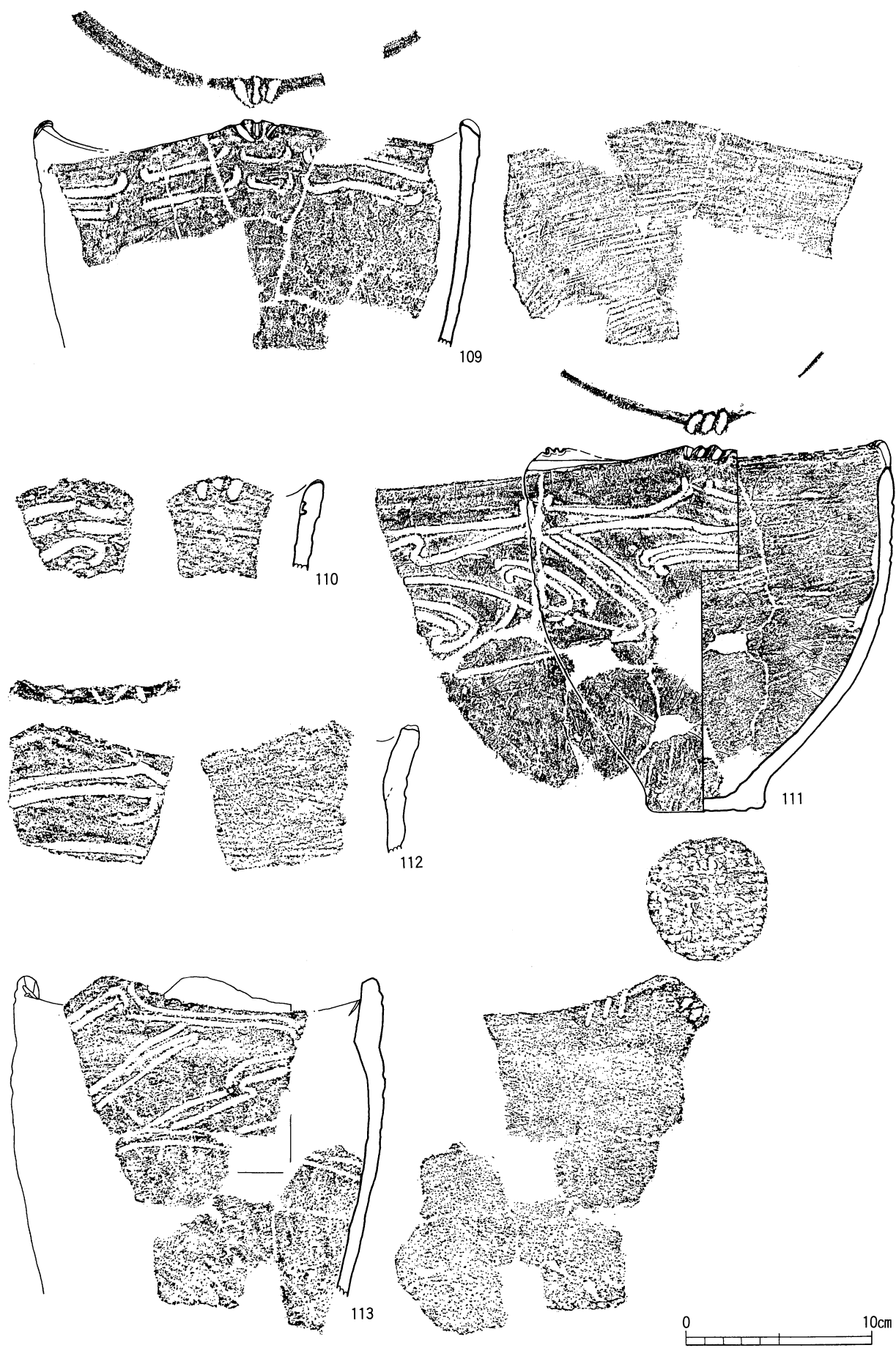
VIIIb類(152~163)は刺突文と沈線文を組み合わせた一群で口縁部に連続刺突文を巡るもの(159~162)や頸部付近等に連続刺突文を巡らせるもの(152~158)等が認められる。前者は口縁部に向かってやや外傾する深鉢や胴部があまり張らず、口縁部が外反する深鉢で、口縁形態は平口縁と波状口縁とが認められる。159、160は沈線文を施文後に刺突を行っており、159は胴部文様帯内にも刺突がみられる。161は口唇部に押圧刻みを施している。163は棒状工具によって口唇部の押圧刻みや口縁部の連続刺突文を施し、頸部に短沈線文を充填した長方形の区画文を巡らせ、その下位に入組み繋ぎ手文を連続させて文様を描き出している。



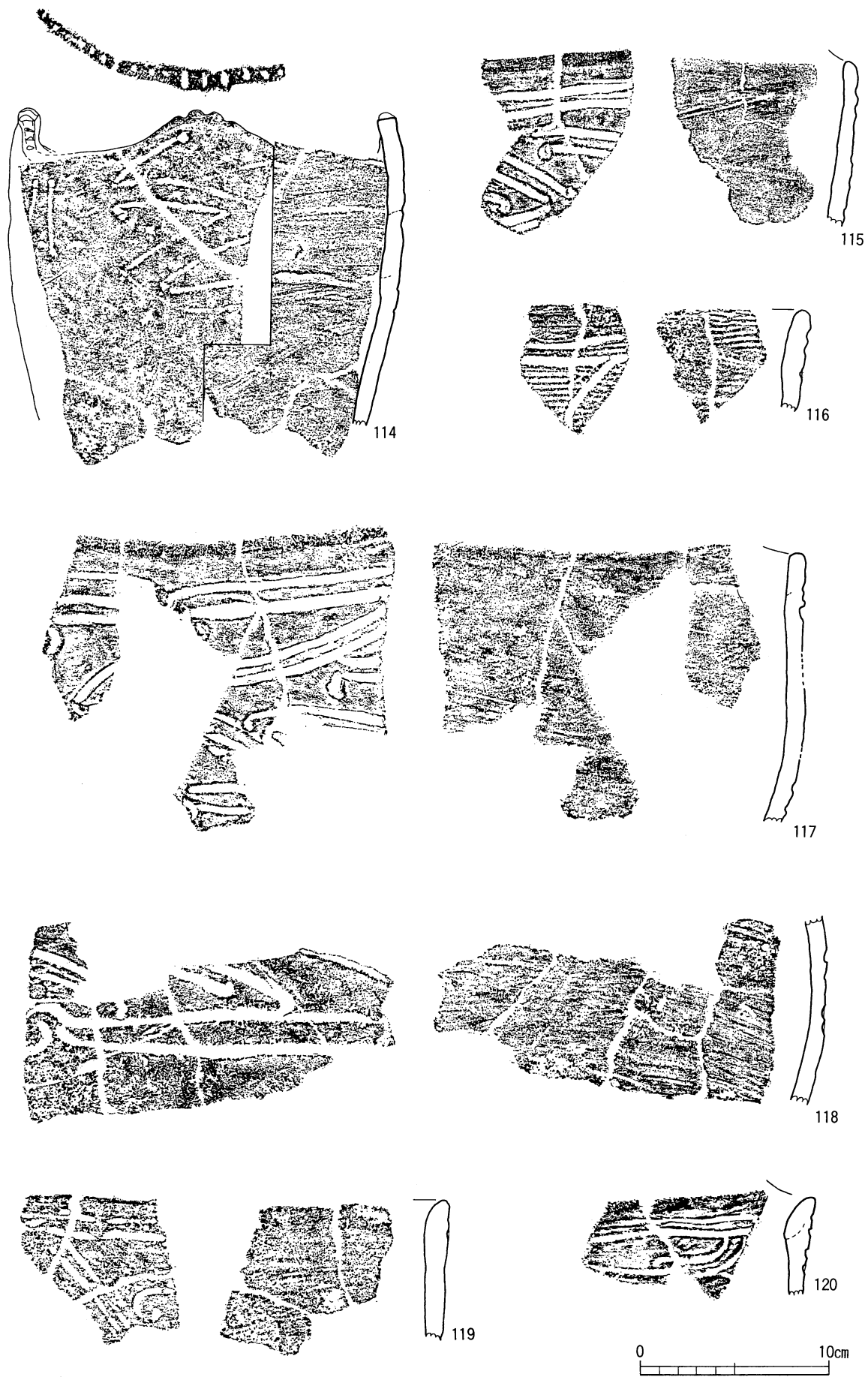
第21図 縄文土器実測図(11)(S=1/3)



第22図 縄文土器実測図(12) (S=1/3)



第23図 縄文土器実測図(13) (S=1/3)



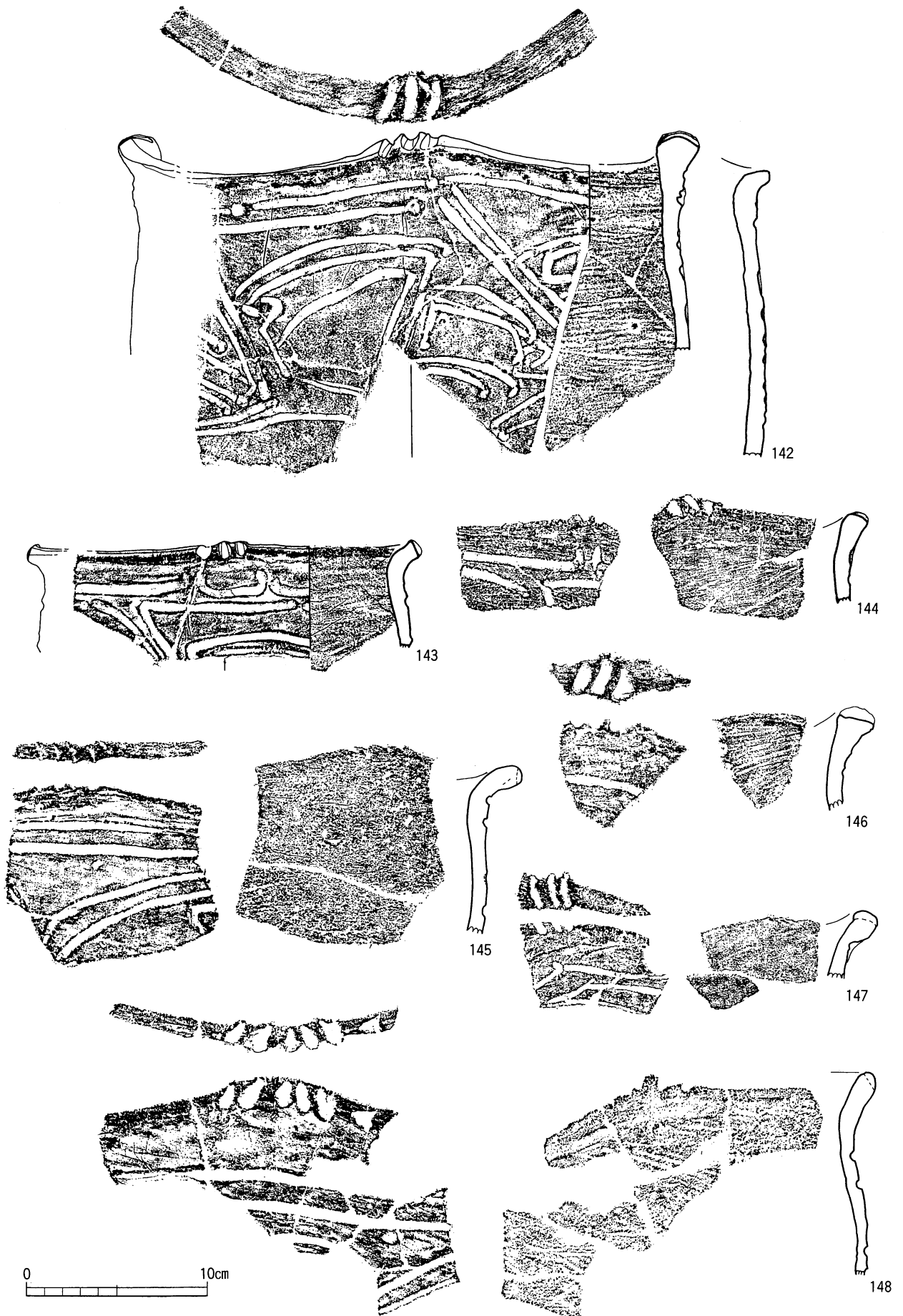
第24図 縄文土器実測図(14) (S=1/3)



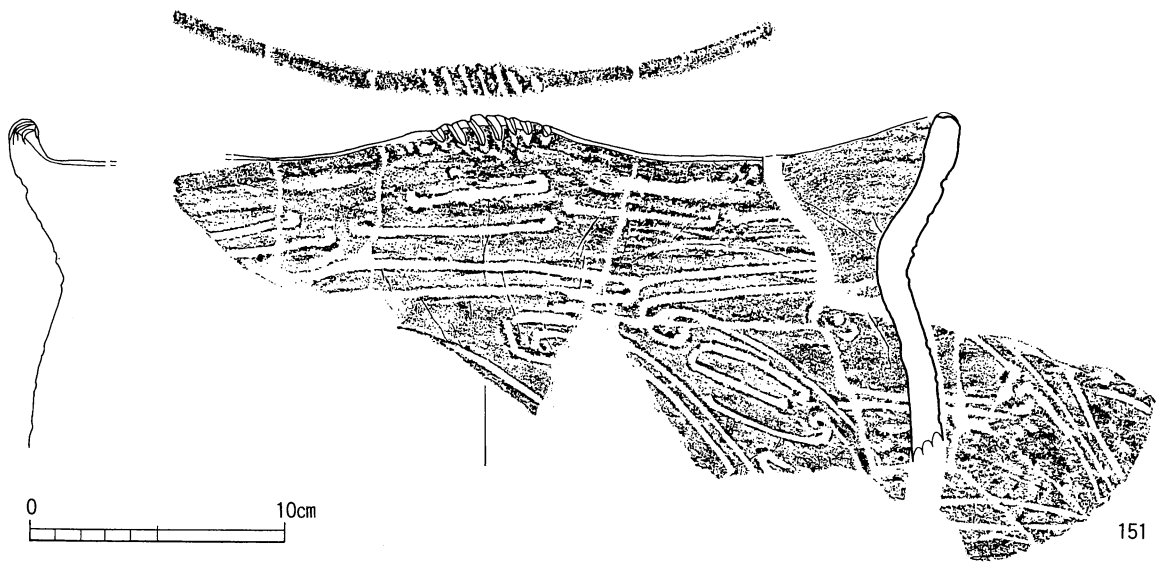
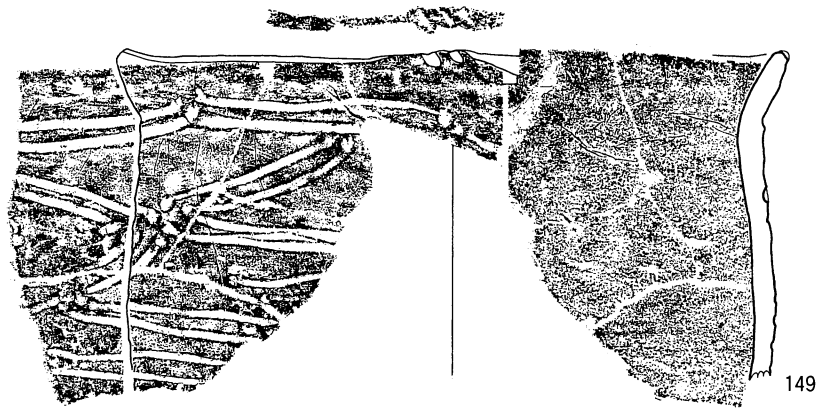
第25図 縄文土器実測図(15) (S=1/3)



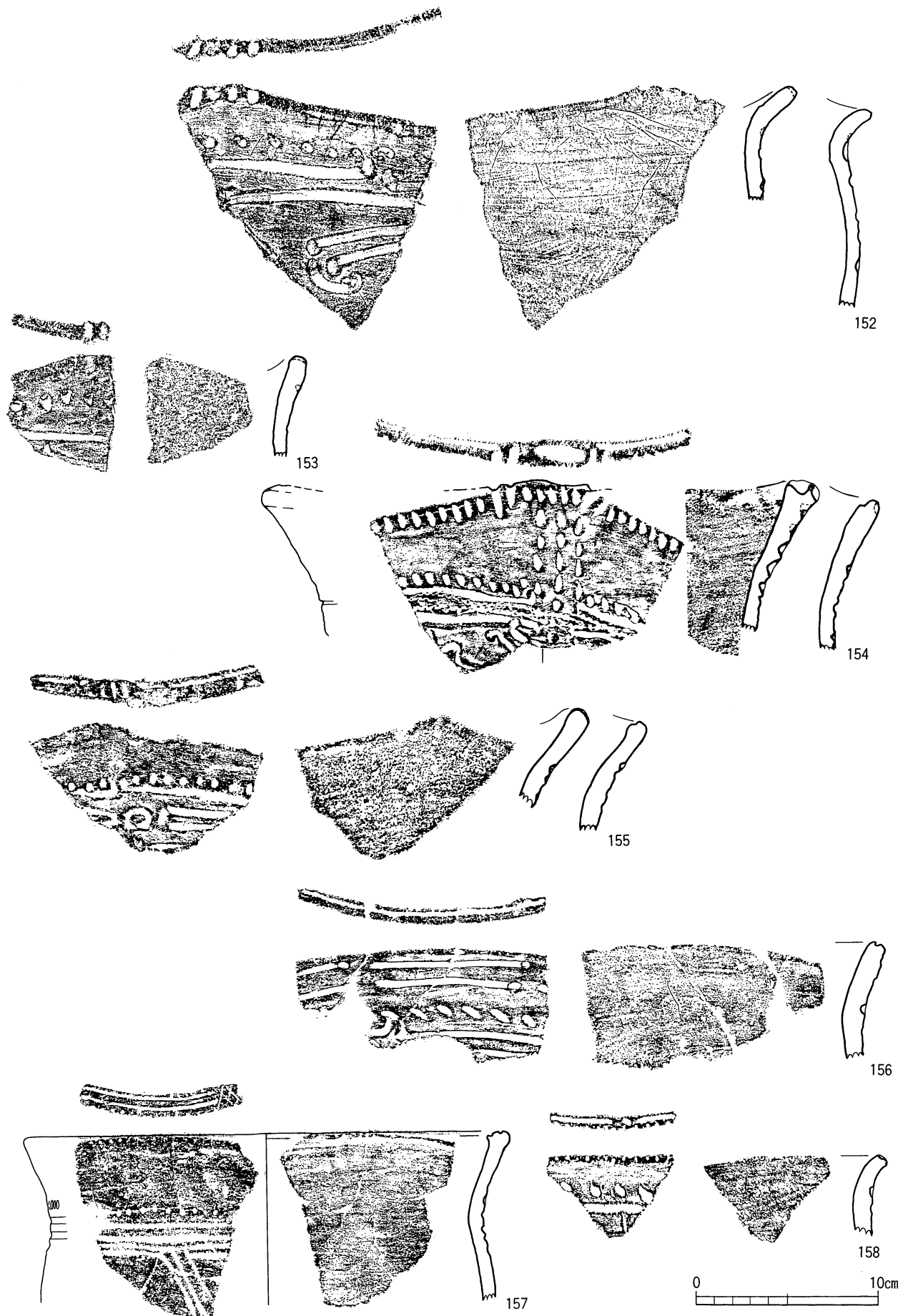
第26図 縄文土器実測図(16) (S=1/3)



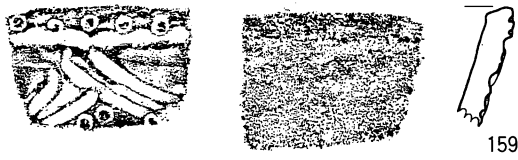
第27図 縄文土器実測図(17) (S=1/3)



第28図 縄文土器実測図(18) (S=1/3)



第29図 縄文土器実測図(19) (S=1/3)



159



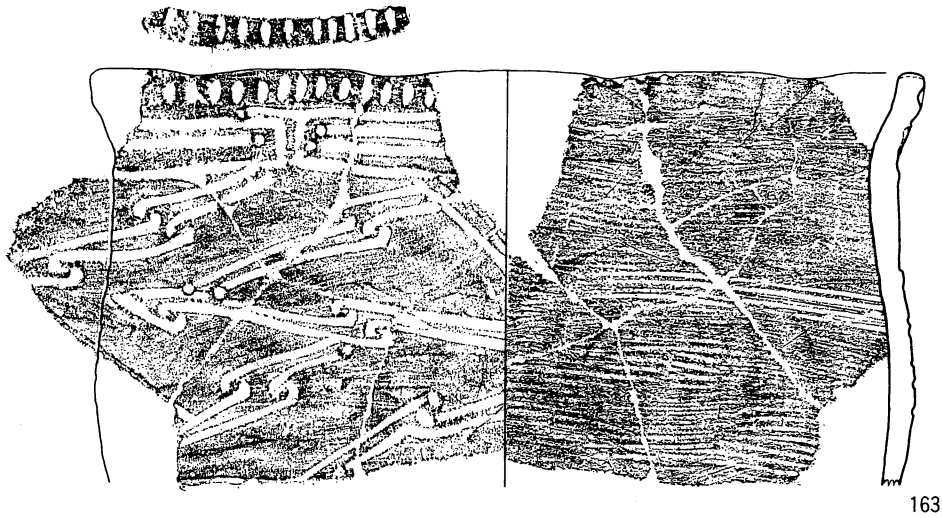
160



161



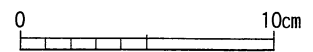
162



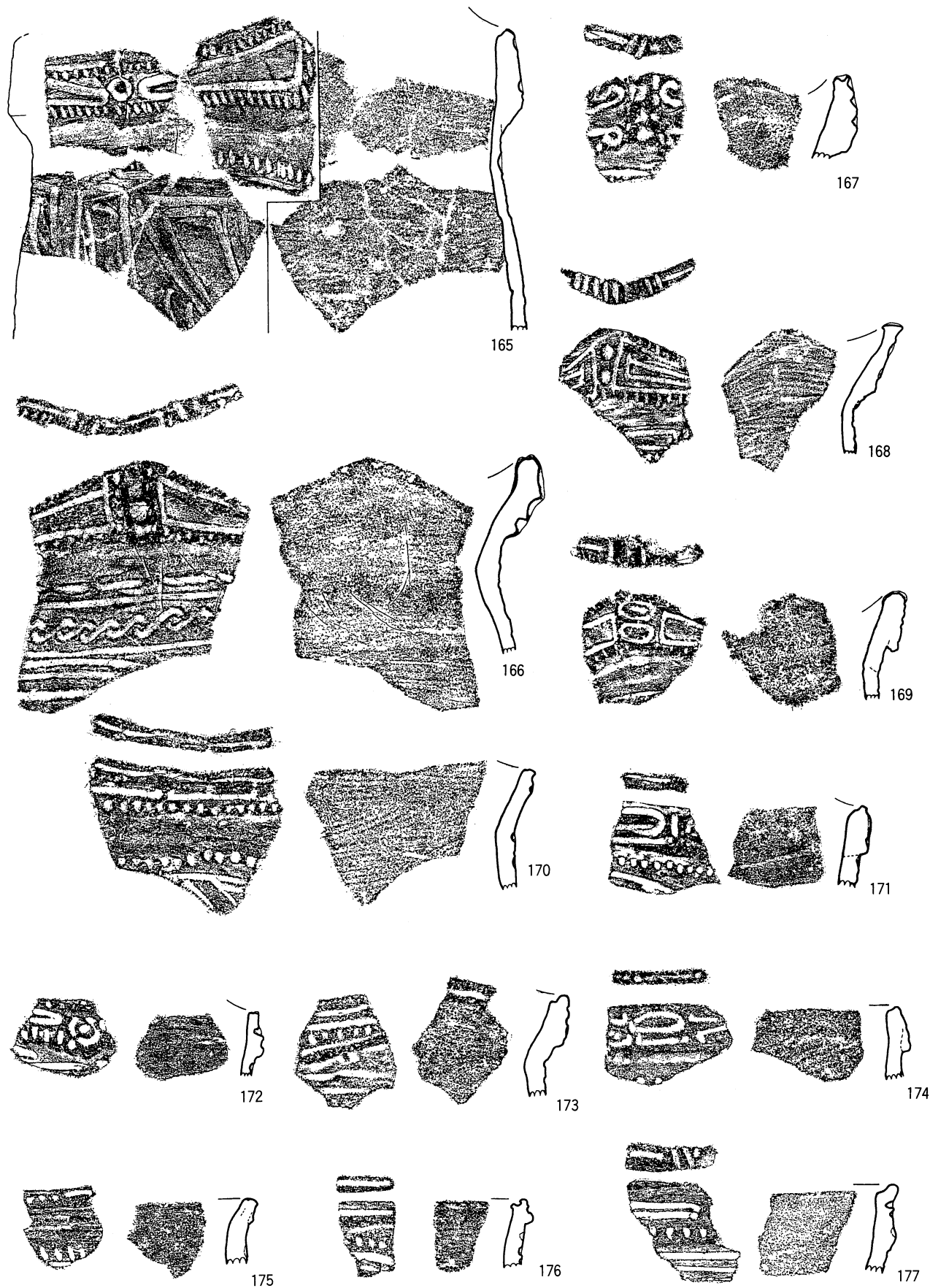
163



164

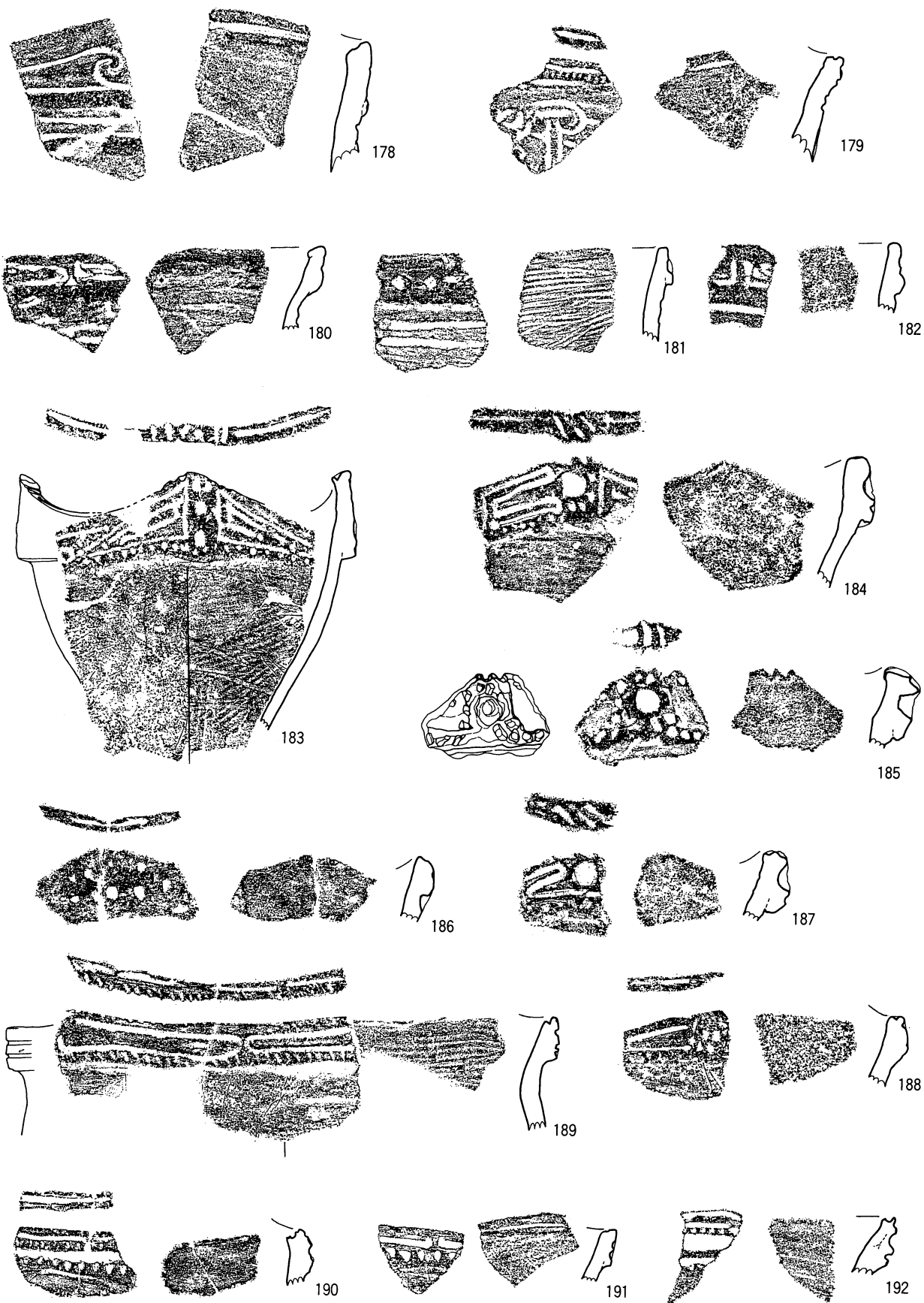


第30図 縄文土器実測図(20) (S=1/3)



0 10cm

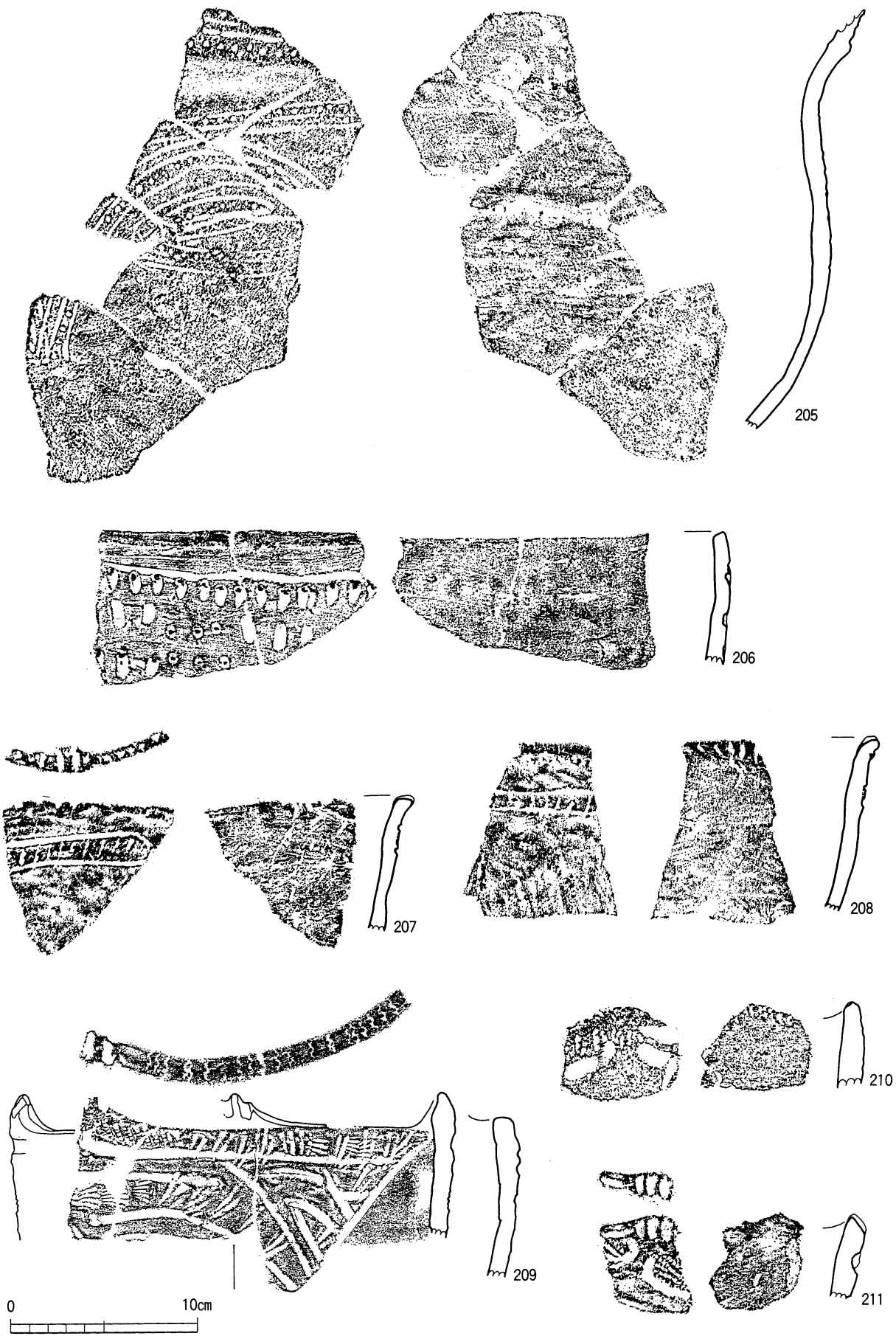
第31図 縄文土器実測図(21) (S=1/3)



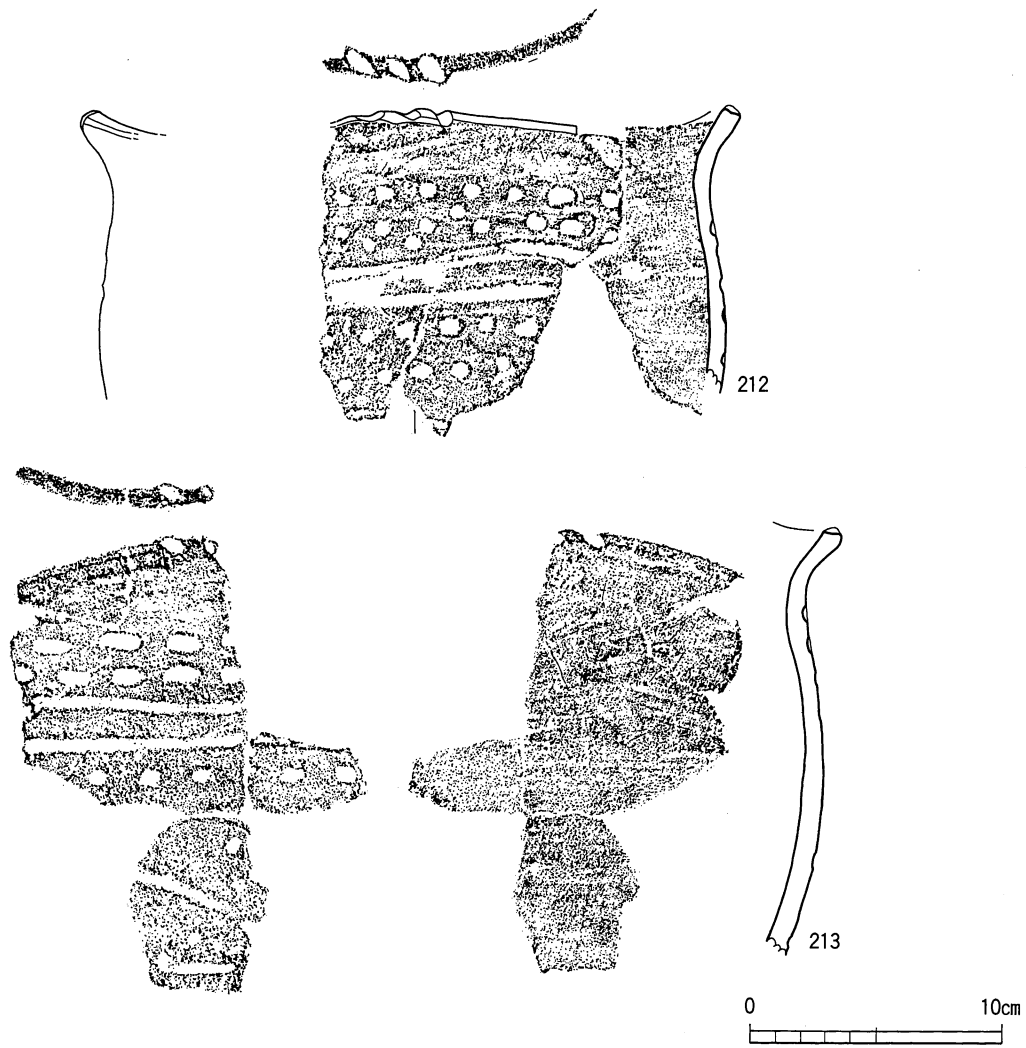
第32図 縄文土器実測図(22) (S=1/3)



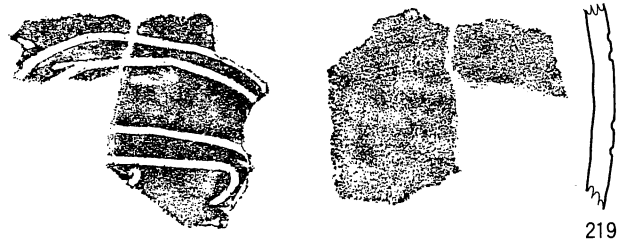
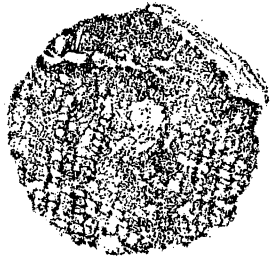
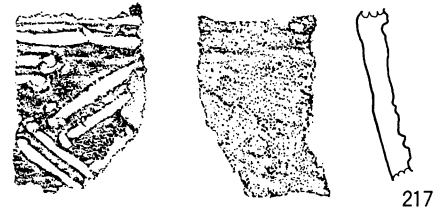
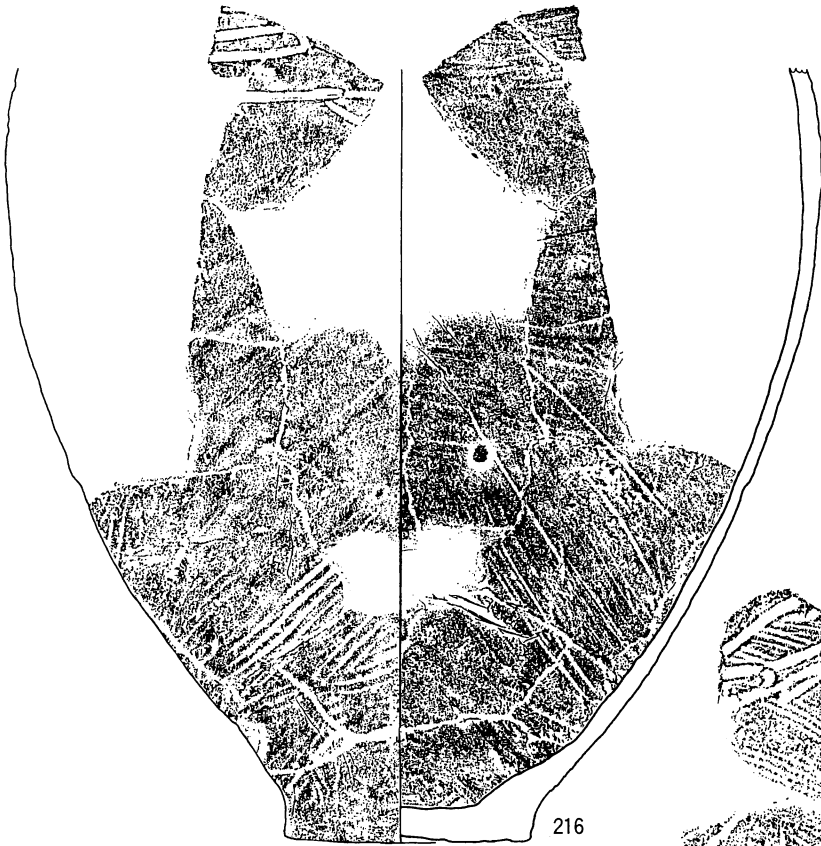
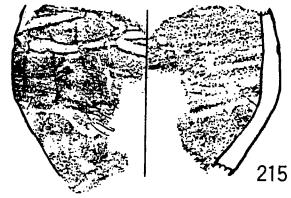
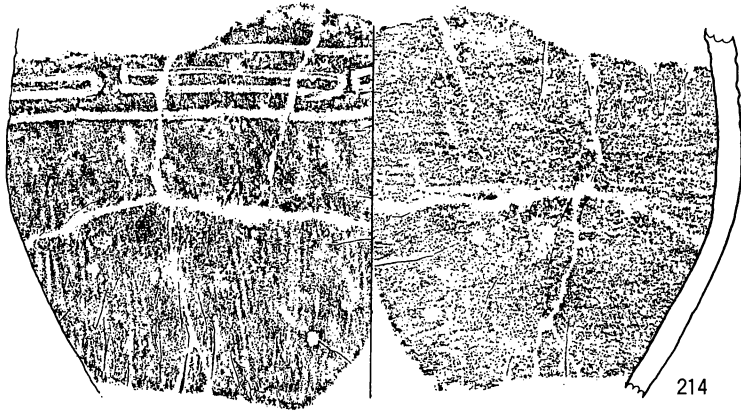
第33図 縄文土器実測図(23) (S=1/3)



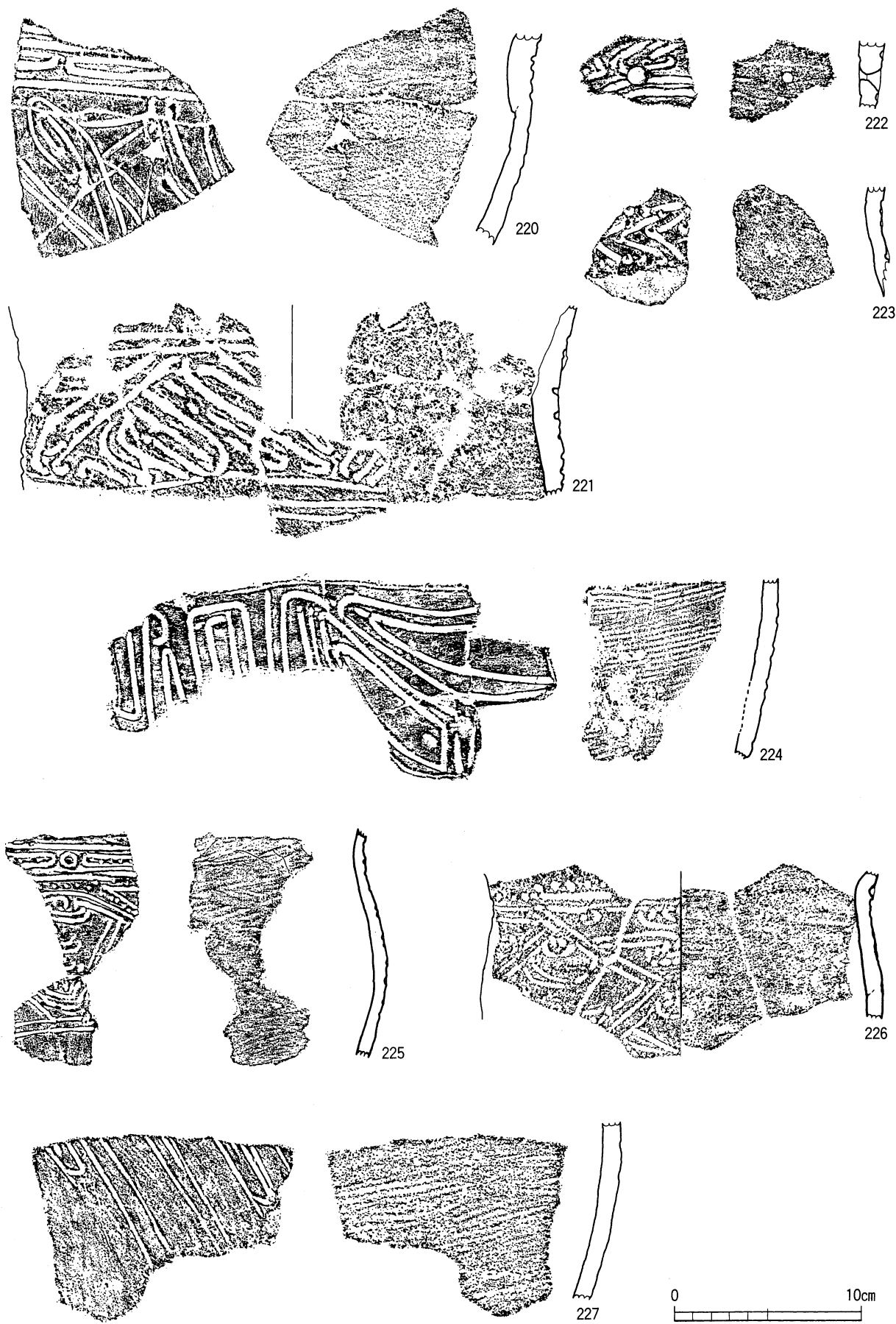
第34図 縄文土器実測図(24) (S=1/3)



第35図 縄文土器実測図(25) (S=1/3)



第36図 縄文土器実測図(26) (S=1/3)



第37図 縄文土器実測図(27) (S=1/3)

後者は胴部が膨らみ、口縁部がやや外反する器形をもつ深鉢で、口縁形態は平口縁と波状口縁とが認められる。波状口縁のものは口唇波頂部に押圧刻みを施すもの（152・153・155）や波頂部を肥厚させ短い凹線を施し、左右に押圧刻みを施すもの（154）がみられる。また波頂間の口唇部には沈線文を巡らせるもの（154・155）も認められ、平口縁のもの（156～158）にも口唇部に沈線文を巡らしている。154・157・158には口縁端部にも連続刺突文を巡らし、そのうち154には縦位に施されている。大半のものが刺突文の下位に沈線文による文様を描くが、156のように上位にくるものがある。また154は沈線間に横位の貝殻腹縁による刺突によって充填させている。

VIIc類（10・164～197）は口縁部を肥厚させ、その上に沈線文や凹点文、連続刺突文を施す一群で、口縁形態は平口縁と波状口縁とが認められる。口縁部片が多く、不明なものも多いが口縁部から胴部にかけて文様がみられるもの（10・164～182）と口縁部のみ文様がみられるもの（183、184）がみられる。波状口縁のものは波頂部に円形の凹点文（166～168・183・187）や凹点文と連続刺突を組み合わせた同心円文（184）または沈線による円文（169）等を施し、その両側に沈線文や沈線による区画文と連続刺突文を組み合わせたものが多くみられ、それらの中には波頂間に沈線による円文を配するもの（164・165）もみられる。それに対し、平口縁のものは沈線文と連続刺突文の組み合わせたものが多く認められる。また口唇部には沈線文を巡らせるもの（10・164～193）がみられ、その中には押圧刻みとを組み合わせるもの（10・166～169・183～185・187）も認められる。

VIIId類（199～205・207・208）は沈線間に連続刺突文を施すもので、器形は胴部が張らず直口もしくはやや外反する深鉢や口縁部を肥厚させる深鉢（VIIc類）が認められる。口唇部には押圧刻みを施すもの（200～201）や押圧刻みと連続刺突文を組み合わせたもの（207・208）等がみられる。連続刺突文には竹管状工具（199～200、202・203）や貝殻（200・207・208、そのうち207・208は貝殻腹縁）により施文されている。

VIIe類（206・209～213）は上記以外でVII類に関連のあると考えられるものを一括した。209～211は貝殻刺突文と沈線文を組み合わせたものである。209は胴部があまり張らず、口縁部に向かってそのまま直口する器形をもつ深鉢である。沈線は2平行化しておらず、口唇部や口縁部、その下位の沈線間に貝殻復縁による連続刺突文や貝殻殻頂による押圧文を充填させている。210は口縁部内外面に、211は口縁部に貝殻腹縁刺突文を細かく施している。206は沈線文の下に3段以上の竹管状工具による連続刺突文を施している。212・213は2～3段の連続刺突文と2平行沈線文を組み合わせたものである。刺突文は粗く施され、刺突の大きさがまちまちである。

VIIIf類（11・214～227）は胴部片を一括した。文様は胴部上半に施文されるもの（214～216・221）と胴部下半にまで及ぶもの（220・224～227）とがある。

IX類土器（第38図～第39図238）

口唇部および口縁部の内面上部や上面に文様を施す一群で、11個体図化した。B区C23、D24、E23、F22・23グリットでⅡ層～Ⅲ層中より出土している。施文部位によって以下のように細分できる。

IXa類（228・229）は口唇部に文様を巡らすもので、228は胴部が緩く張り出し、肥厚する口縁部に向かって内湾する器形を呈し、幅広の口唇部に9～11本単位で斜位の貝殻腹縁による連続刺突を施している。229は口唇部の両側が張り出し、やや外傾する断面T字形の口縁形態を呈し、その口唇部に斜位の短沈線や貝殻腹縁による刺突を施す。

IXb類 (232・236・237) は口縁部の内面上部や上面に文様を巡らすもので、器形は主に頸部で強く外反し、内面に稜を作り出し断面形が逆L字形を呈する。口縁部形態は平口縁と波状口縁とが認められる。文様は232や237のように沈線によって構成されるものと236のように2条の沈線間に貝殻腹縁による連続刺突を充填させているもの等がみられる。

IXc類 (230～231・233～235) 口縁部内面上部や上面及び口唇部外面に文様を巡らすもので、器形は頸部で強く外反するものやIXb類と同様に断面形が逆L字形を呈するものがみられ、口縁形態は平口縁と波状口縁とがある。前者のものは1点のみの出土で230のように内面上部に4条の沈線と口唇部に1条の沈線を施し、頸部外面には連続の刺突文がみられる。後者のものは沈線文と貝殻腹縁による連続刺突文や竹管状工具による連続刺突文との組み合わせが多く、231、233、235のように2条の沈線文の両側を連続刺突文で区切るものやその沈線間に連続刺突文を施すものがみられ、口唇部には貝殻腹縁による連続刺突文が施されている。また234や235のように波頂部の内面に凹点文と刺突文を組み合わせた同心円文や連続刺突文で充填する例もみられる。

IXd類 (238) 口唇部に粘土紐を貼付けるもので238の1点のみ出土している。

X類土器 (第39図239～第41図)

上記以外の後期と思われる土器で少量出土のものを特徴別に7類に細分した。

Xa類 (239～241) は貝殻腹縁による連続刺突に巡らす一群で丸尾式土器と呼ばれるもので、B区F21・24、G23グリットでⅢ層中より出土している。239は波状口縁で頸部が若干くびれ、口縁部が外反するもので、口縁部を若干肥厚させて弱い稜を作り出し、稜の上下に斜位の貝殻腹縁による連続刺突を施している。

Xb類土器 (255～264) はIXa類土器以外の貝殻腹縁による連続刺突を施すものを一括した。B区D20・21・22、E26、F25、G23・25グリットでⅢ層中より出土している。255は胴部があまり張らず口縁部が直口する器形で、口縁部の大半が欠損しているが残存する部分に突起を有し、突起の下と突起の縁に沿って貝殻腹縁による連続刺突を施している。器面は貝殻条痕とナデ調整を併用している。256～258は縦位や横位に貝殻腹縁による連続刺突文を2段巡らせている。口縁形態は波状口縁を呈し、256・257の口唇部には同工具による押圧刻みを施す。259は口縁部に斜位の貝殻腹縁による連続刺突文を交差させ、格子目状に描き出している。261・262は口唇部に粘土を貼付け、口縁端部を外方に張り出させている。261の口唇部には3本の短沈線文とその両側に竹管状工具による連続刺突文が施され、262は口縁端部に貝殻腹縁による連続の押圧刻みが施されている。両方とも口縁部には縦位の貝殻腹縁による連続刺突を巡らせている。

Xc類 (242～248) は口縁部をやや肥厚させ、その部分に文様を施す一群である。B区C23・E23・F22・23グリットでⅢ層中より出土している。口縁部の断面形は247のように切出刃状を呈するものや外面の口縁端部が丸みを帯び、ノミ刃状を呈する。文様は2条の沈線文が巡るもの (242・243・247) や貝殻腹縁による連続刺突文が斜位 (244) もしくは横位に2段 (245)、ヘラ状工具による押圧刻み (248) がみられる。246は無文だが口縁部の形態によりこの類に含めた。なお247は口縁部に穿孔途中の凹みが見られる。これら大半のものは納曾遺跡 (鹿児島県西之表市) で出土している土器に類似する。しかし244のような斜位に貝殻刺突を連続に施すものはみられず、前迫亮一氏の言う納屋向タイプに含まれる可

能性がある。これらは上ノ原第2遺跡（清武町）の住居跡より辛川Ⅱ式土器と一括で出土していて、注目される。

X d類（249、250）は胴部が張り出し口縁部に向かって内湾するキャリパー状の器形を呈する。口縁形態は平口縁と波状口縁とが認められ、文様は斜位の沈線文を連続で施している。これらの土器は可愛遺跡（北川町）や門川南町遺跡（門川町）でも出土している。B区E23・F22グリットでⅢ層中より出土している。

X e類（251、252、254）はX d類土器以外の沈線文を施すものをまとめた。B区E23グリットでⅢ層中より出土している。251・252は同一個体の可能性がある。胴部があまり張らず、口縁部が直口する器形で口唇部と外面に沈線文が巡る。どちらも風化が著しいため外面の文様についてはっきりしないが252では沈線の下に逆「ハ」字状の沈線が施されていると思われる。254は波状口縁で頸部で若干くびれ、口縁部が外反する深鉢で波頂部に「V」状の抉りを入れ、その中に粘土紐を貼付け充填している。文様は沈線や短沈線を斜位に粗く施し、格子目状に文様を描く。

X f類（253）土器は磨消縄文土器でやや内湾する器形に太めの沈線文間に縄文が施されている。縄文帯は比較的幅広い。

X g類（265～268）は浅鉢または脚台付き浅鉢になると思われるものを一括した。B区C22、D21、E23グリットでⅢ層中より出土している。全体形がわかるものが出土していないため、該当しないものも含まれている可能性もある。267は波状口縁を呈し、波頂部の下に突帯を貼付け、波頂部と突帯の間および口唇部、口縁部内面に竹管状工具による連続刺突文を施す。268は脚部である。

XI類土器（第42図）

口唇部に押圧刻みを施すものをまとめ、器形と施文範囲により2類に細分した。A・B区C22、D21、E21・23、F21、H19グリットでⅢ層中より出土している。

XI a類土器（269～273・276）は胴部があまり張らず、口縁部が外反する器形で口縁形態は平口縁のみ確認されている。269～271は外面にナデ調整を施し、272・276は貝殻条痕とナデ調整を併用している。口唇部を巡るの押圧刻みは貝殻腹縁（269・272・276）や棒状工具（270・271）で施されている。

XI b類土器（274・275・277）は内湾ぎみに立ち上がる器形で、口縁形態は平口縁と波状口縁がみられる。大半は器面にナデ調整を施す。口唇部を巡る押圧刻みは貝殻腹縁（274・275）や棒状工具（274・277）により、細かく施されている。

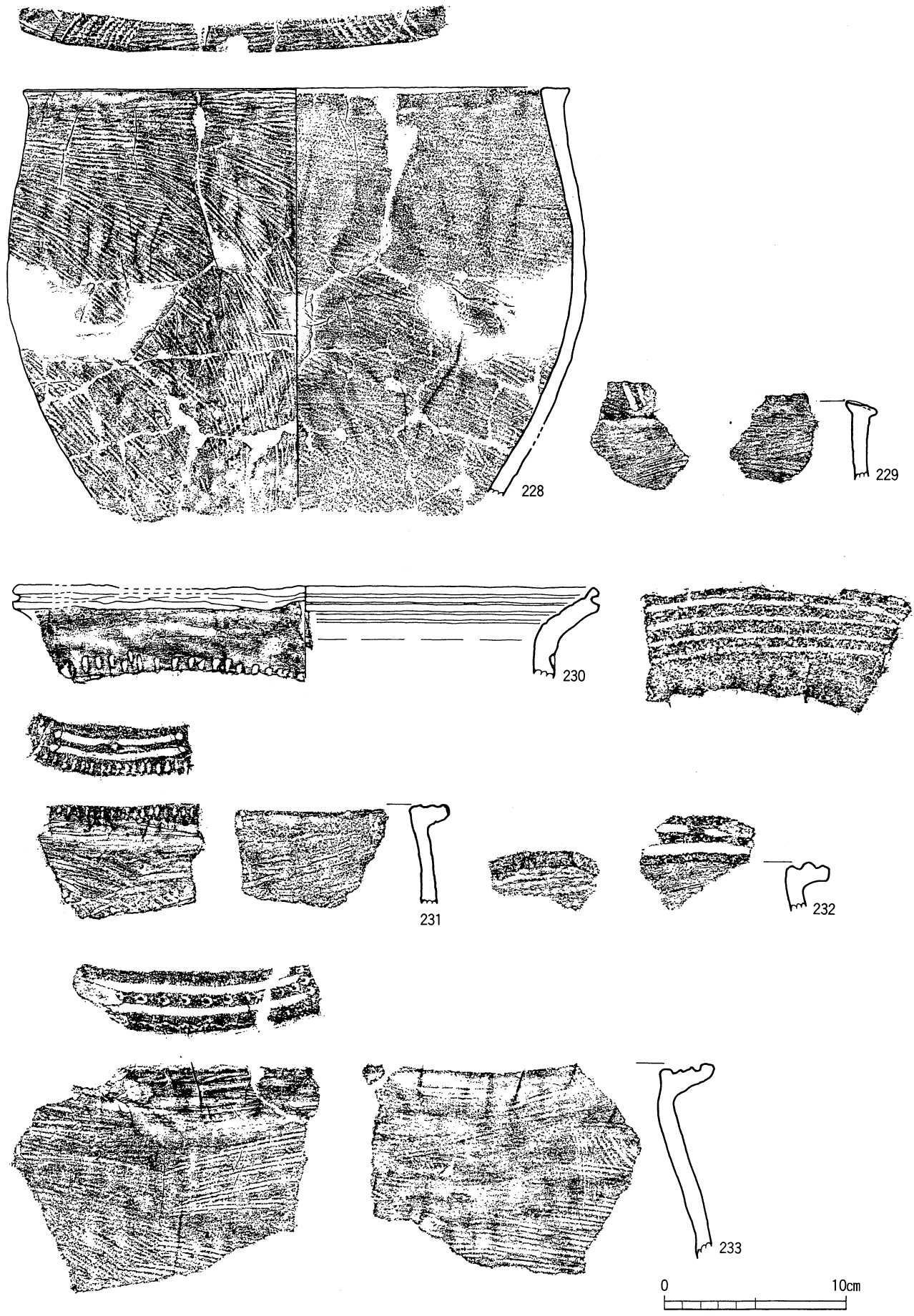
XI c類土器（278）は内傾する口唇部に粘土を貼付け、粗い押圧刻みを施している。

XII類土器（第43図～第45図）

後期の無文土器を一括し、器形により5類に細分した。出土量も多く、ここでは細分したうち、代表的なものを図化した。また、特徴が乏しいため他の時期のものを含んでいる可能性もある。B区C21・23、D22・23、E23・25・26、F21・23・24・26・27、G23グリットでⅢ層中より出土している。

XII a類（279～283）は胴部があまり張らず、口縁部がやや外反する一群である。印象として図化を行った281や283、284のように口縁部のつくりが雑で、歪になるものが多くみられる。281は内面上部に重弧文状の線刻がみられる。285は口唇部を平坦にし、口縁端部を外方に尖らせている。

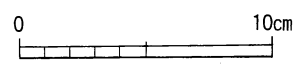
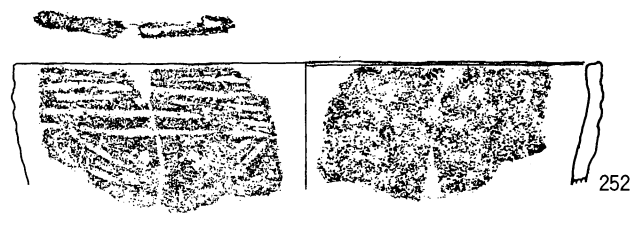
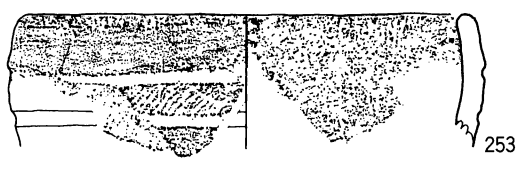
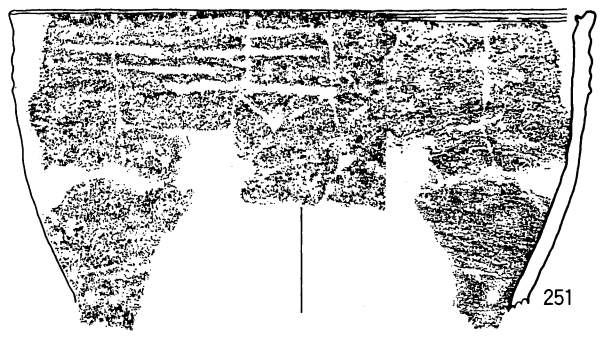
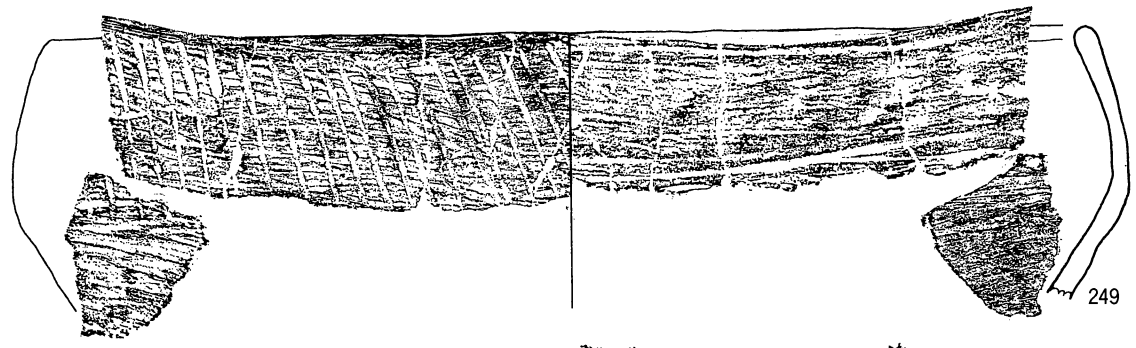
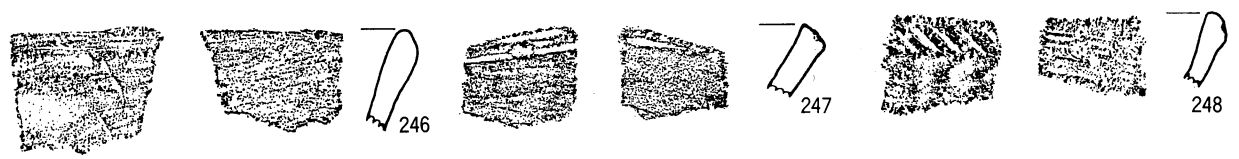
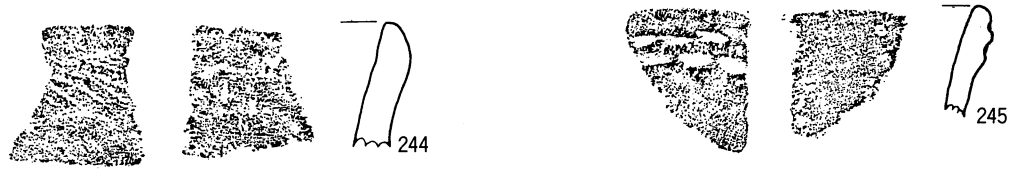
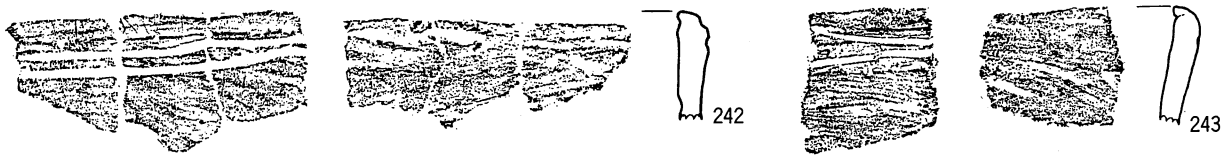
XII b類（284～294）は胴部があまり張らず、口縁部が直口する器形をもつ一群である。大半は深鉢と



第38図 縄文土器実測図(28) (S=1/3)



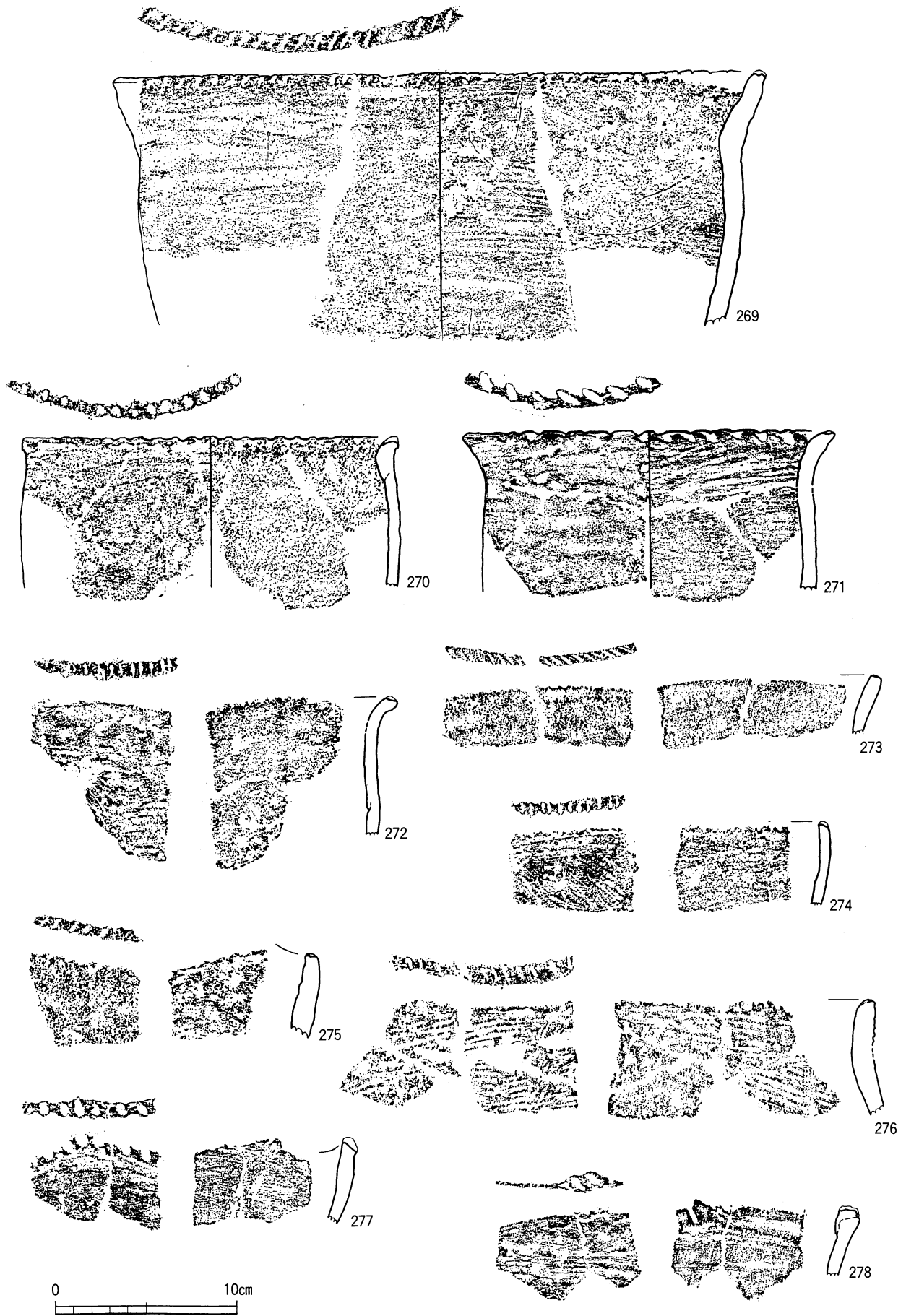
第39図 縄文土器実測図(29) (S=1/3)



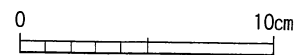
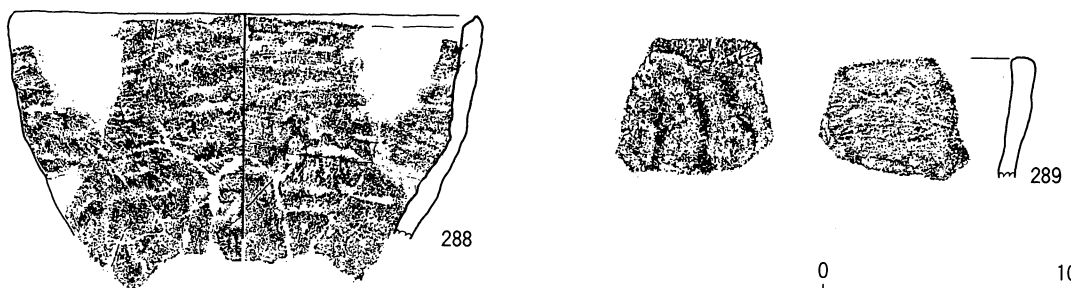
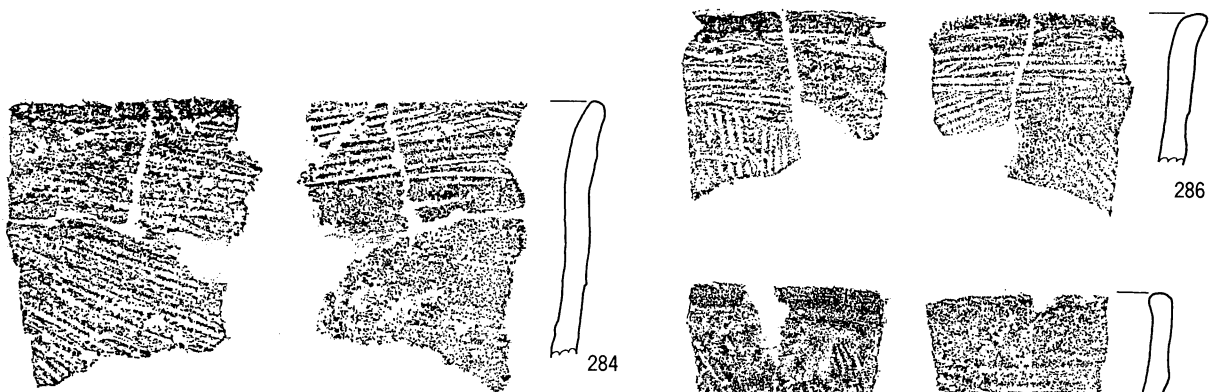
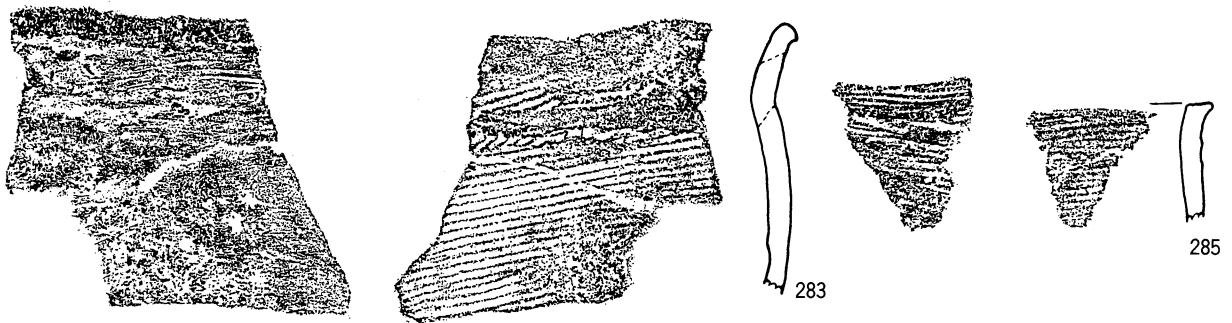
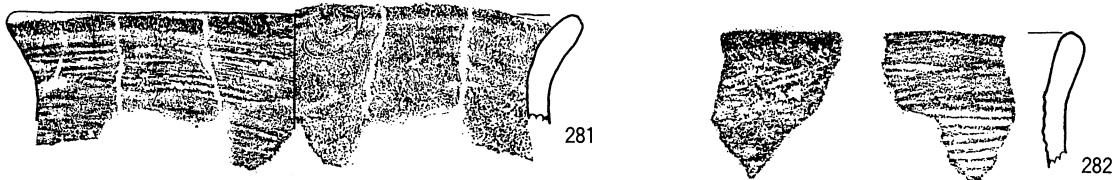
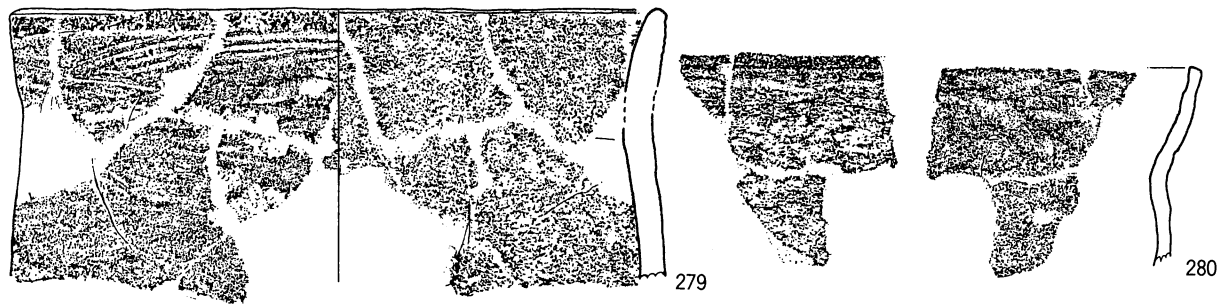
第40図 縄文土器実測図(30) (S=1/3)



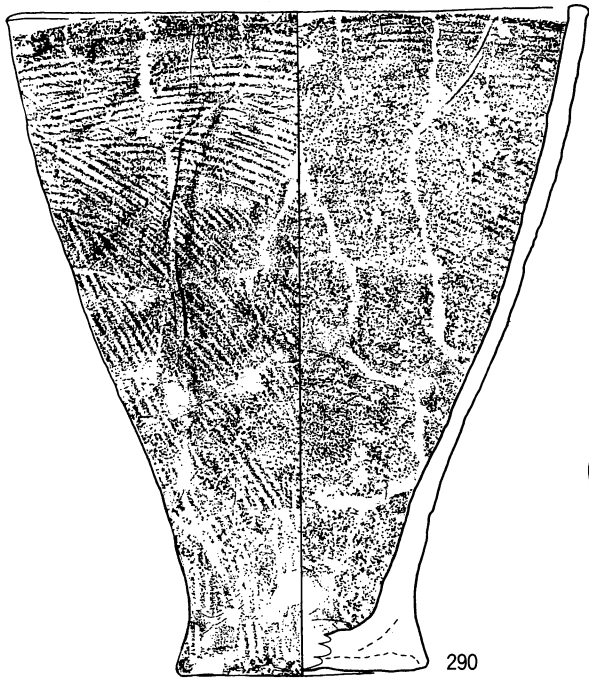
第41図 縄文土器実測図(31) (S=1/3)



第42図 縄文土器実測図(32) (S=1/3)



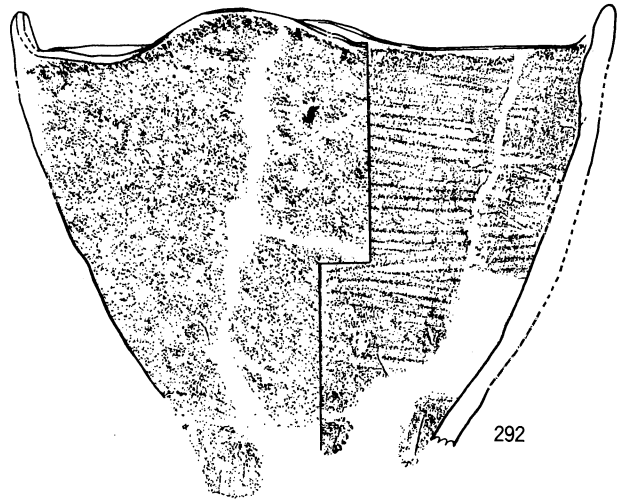
第43図 縄文土器実測図(33) (S=1/3)



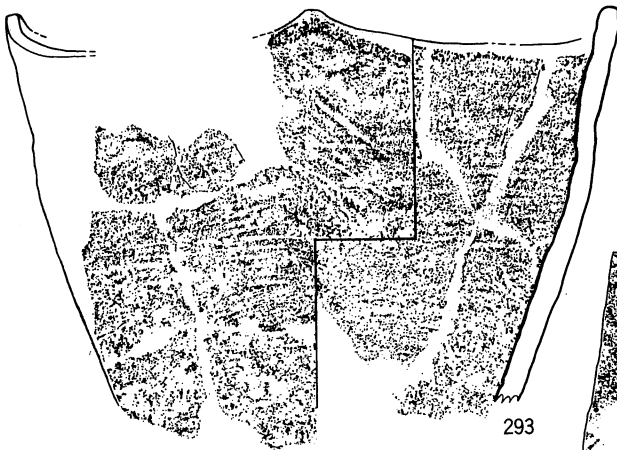
290



291



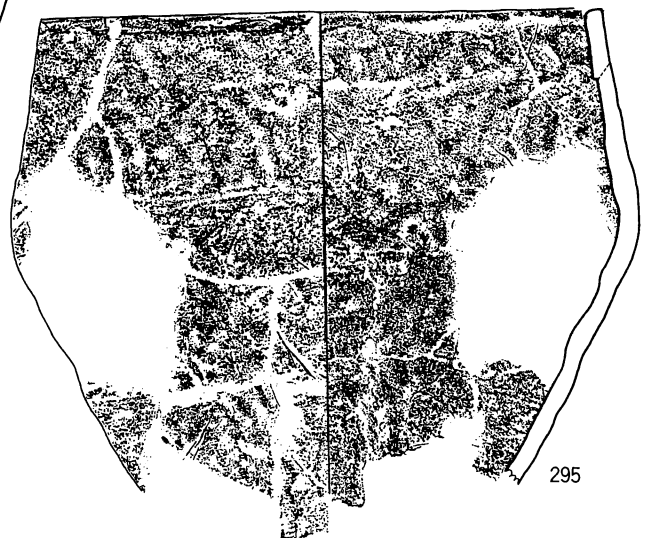
292



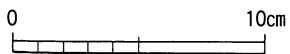
293



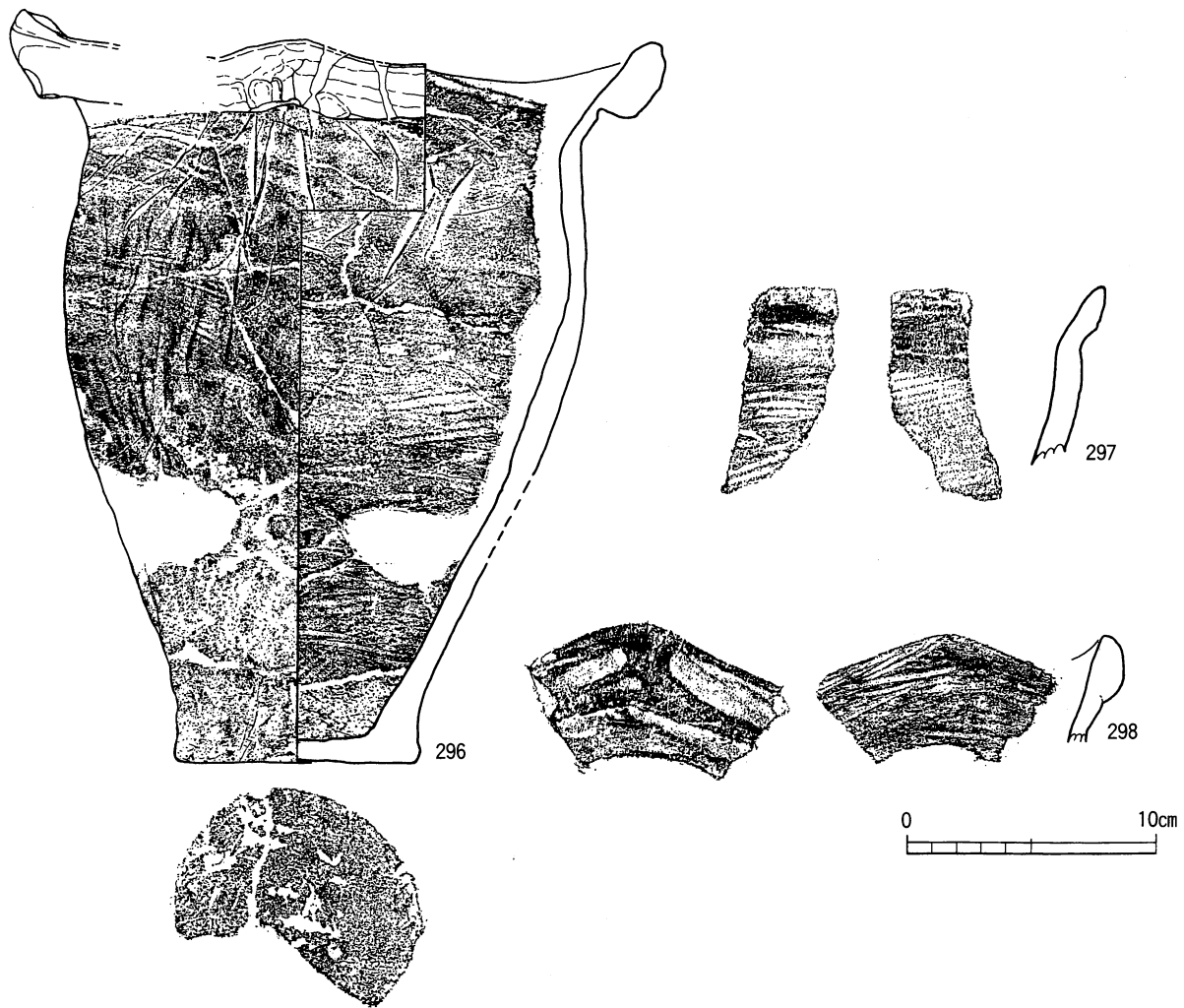
294



295



第44図 縄文土器実測図(34) (S=1/3)



第45図 縄文土器実測図(35) (S=1/3)

思われるが口縁部のみ資料が多いため鉢状のものも含まれる可能性がある。器面調整は大半が貝殻条痕で行われるが、288・289のようにナデ調整のものもみられる。290はほぼ器形が復元出来る資料で、底部は両端が張出し、厚みもあって安定感があるのに対し、底部から上は胴部が張らないためか華奢な印象を受ける。底部にはアジロ編み圧痕（1本越え1本潜り1本送り）がみられる。

XIIc類（292～294）は波状口縁のものを一括した。292や293は胴部があまり張らず、直口する器形をもつ深鉢である。ともに器面調整は貝殻上条痕とナデを併用しているが、292の外表面は風化が著しく一部で確認出来るのみである。294は内面が屈曲し稜を形成する。

XIId類（295）は胴部が張り、内傾しながら立ち上がるもので1点のみ出土している。胴部には一部、沈線がみられるが文様として施されたものなのか不明である。器面は主にナデ調整が施されているが口縁部から胴部にかけては調整が粗く、調整の際に付いた指頭痕が目立つ。

XIIe類（296～298）は外反する口縁部に粘土帯を貼付け、幅広く肥厚させた一群である。口縁形態は波状口縁で、波頂部はさらに肥厚が増し、ナデ調整が施されている。また肥厚させた口縁部と頸部の境には段が形成されている。図化した3点のうち、296はほぼ完形に近い状態で出土しており、器形は胴部がやや張りながら頸部で若干くびれ、口縁部が外反するもので他の2点も同様の器形を呈すると思われる。

XIII 類土器（第46図～第49図）

底部を一括し、器形や底部圧痕の有無等により7類に細分した。

XIIIa類（299・303・306～308・310）は底部から直線的に開くか、もしくは外反しながら開く一群である。なお、端部がやや張出すものも含めた。303は底部がやや直立ぎみに立ち上がった後に直線的に開いている。また310は下端が丸くなり稜が認められない。

XIIIa'類土器（6・7・313・315～321・325・328～332・335・337・338・340～346・349・350）はXIIIa類土器の器形をもち、底面に底部圧痕がみられる一群である。大半はアジロ編み圧痕（313・314～321・325・328～332・335）がみられ、また少量ではあるがアジロ編みとモジリ編みとを組み合わせたもの（340・343）やモジリ編み圧痕（338・341・342・344～346）、木葉痕（349・350）もみられる。

XIIIb類（300～302・304・305）底部下端が張出し、外反しながら開く一群である。底面はナデ調整が多くみられるが、300のように貝殻条痕を施すものも一部でみられる。

XIIIb'類（314・322～324・326・327・333・334・336・339）はXIIIb類土器の器形をもち、底面に編物圧痕がみられる一群である。大半はアジロ編み圧痕（314・322・323・324・326・327・333・334・336）で、少数であるがモジリ編み圧痕（339）がみられる。

XIIIc類（309）底部から内湾しながら大きく開くもので1点のみ出土している。

XIII d類（311）は上げ底のものである。

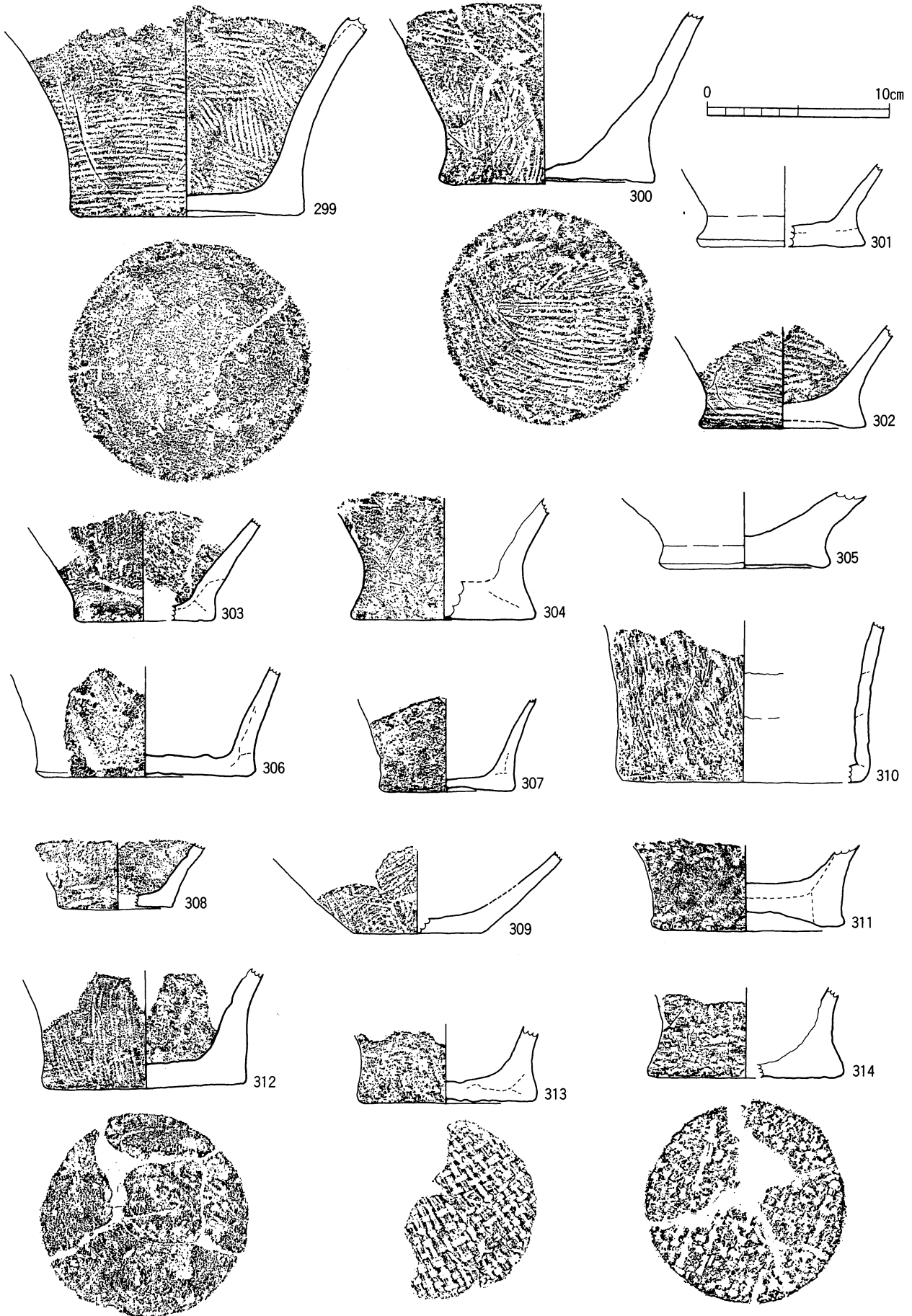
XIII d'類（347・348）はXIII d類土器の器形をもち、底面に編物圧痕がみられる一群である。2点ともアジロ編み圧痕だが編みの詳細は不明である。

底部に圧痕が認められるものについては上記で述べたようにアジロ編みとモジリ編みの編物圧痕や木葉痕がみられる。そのうち編物圧痕については228点確認された。編み方により11類に細分し、それぞれの数量を示す。

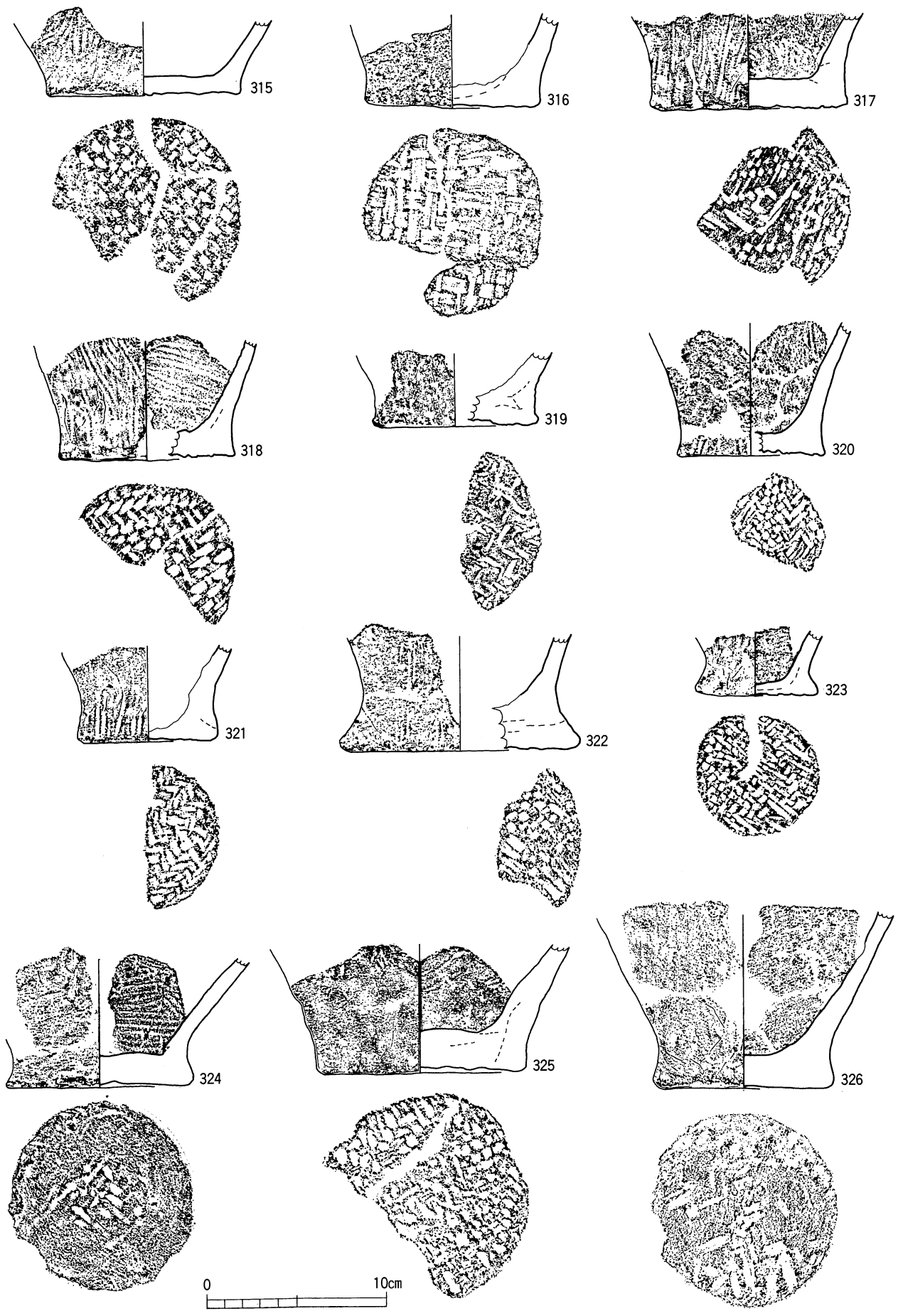
- | | |
|--|------|
| 1. アジロ編みで1本越え1本潜り1本送りの編み方のもの（1-1-1） | 50点 |
| 2. アジロ編みで1本越え1本潜り1本送り以外の連続した規則的な編み方のもの | 11点 |
| 3. アジロ編みで連続的ではない複雑な編み方のもの（複雑） | 39点 |
| 4. アジロ編みで2つ以上の編み方で構成されるもの（複合） | 11点 |
| 5. アジロ編みで編みの詳細が不明なもの | 117点 |
| 6. モジリ編みで緯材（からむ材）がつまっているもの（密） | 3点 |
| 7. モジリ編みで緯材が疎いているもの（疎） | 9点 |
| 8. モジリ編みで緯材がつまったり疎いたりするもの（密疎） | 1点 |
| 9. モジリ編みで編みの詳細が不明なもの | 2点 |
| 10. アジロ編みとモジリ編みが混在するもの | 3点 |
| 11. 編みの詳細がわからないもの | 27点 |

また木葉痕については3点出土し、すべて網状脈がみられる。

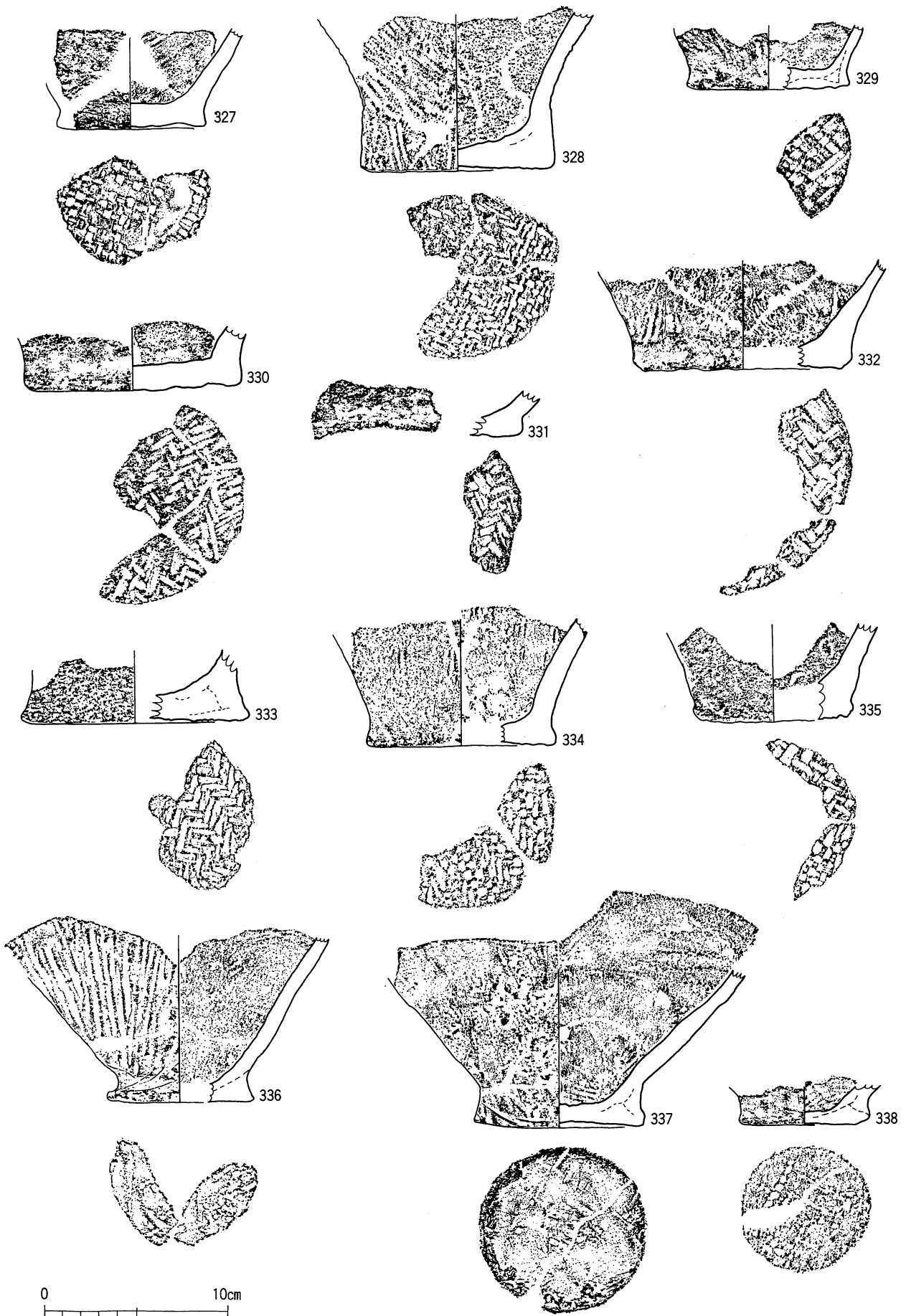
なお、図示しているものについては観察表に編み方の種類を記載しているので参照していただきたい。



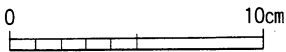
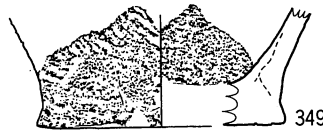
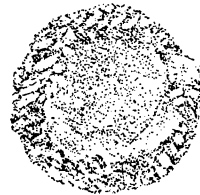
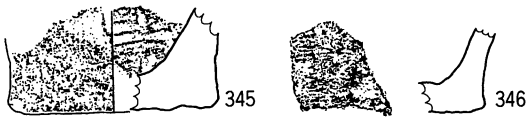
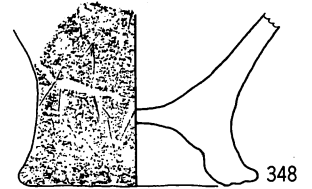
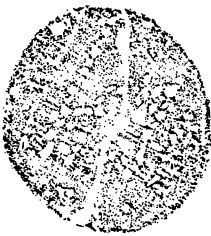
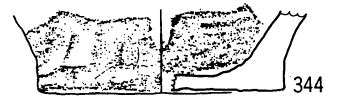
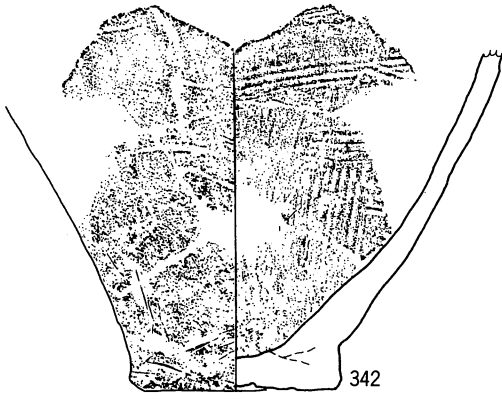
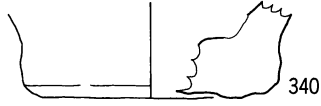
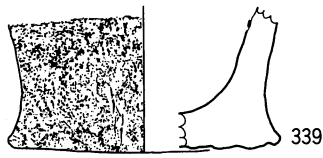
第46図 縄文土器実測図(36) (S=1/3)



第47図 縄文土器実測図(37) (S=1/3)



第48図 縄文土器実測図(38) (S=1/3)



第49図 縄文土器実測図(39) (S=1/3)

XIV類土器（第50図～第51図）

晩期の深鉢と思われるものを一括し、3類に細分した。B区C21、E23・26、F23・25グリットでⅡ～Ⅲ層上面より出土している。

XIVa類（351・352・354・356）は口縁部がゆるやかに外反するものをまとめた。351・352・354は胴部があまり張らずにそのまま緩やかに外反する器形で口縁部に最大径をもつが、356は胴部が膨らみ、最大径をもつ。器面調整は貝殻条痕やナデ調整が認められる。

XIVb類（353・355・357・358）は口縁部が外反もしくは直線的に立ち上がるものをまとめた。口縁部の資料が多く、器形全体の形状を知り得るものがほとんどないが、それらの形状より、頸部や胴部が屈曲する器形になるものと考えられる。器面はナデ調整を施している。

XIVc類（359～361）は胴部があまり張らずやや内湾する一群である。359・361は外面調整を貝殻条痕とナデで行い、内面調整は貝殻条痕で行っている。

XV類土器（第52図）

内外面ともミガキによる調整を施した精製浅鉢を一括し、器形により7類に細分した。ただし、風化が著しく器面調整の分からないものも一部あり、それらについては器形によりこの類に含めたものもある。B区D24、E24・25、F15・21～24、G22グリットでⅡ～Ⅲ層中より出土している。

XVa類土器（362～368）は胴部が丸く張るか、もしくは偏球状になり口縁部が短く外反する一群である。口縁部は玉縁状を呈し、基本的に内外面に沈線を巡らせるが、沈線が不明瞭で段を形成するものもみられる。362は胴部中段に最大径をもつのにに対し、363～365は胴部上半に最大径をもつ。366～368は口縁部から頸部にかけての資料で胴部形態は不明だが、口縁部から頸部の形態により、この類に含めた。

XVb類（369・370）は口縁部がXVa類よりも短く、口縁部内面に段をもつものである。370は外面の風化が著しく、調整が不明だがこの類に含めた。

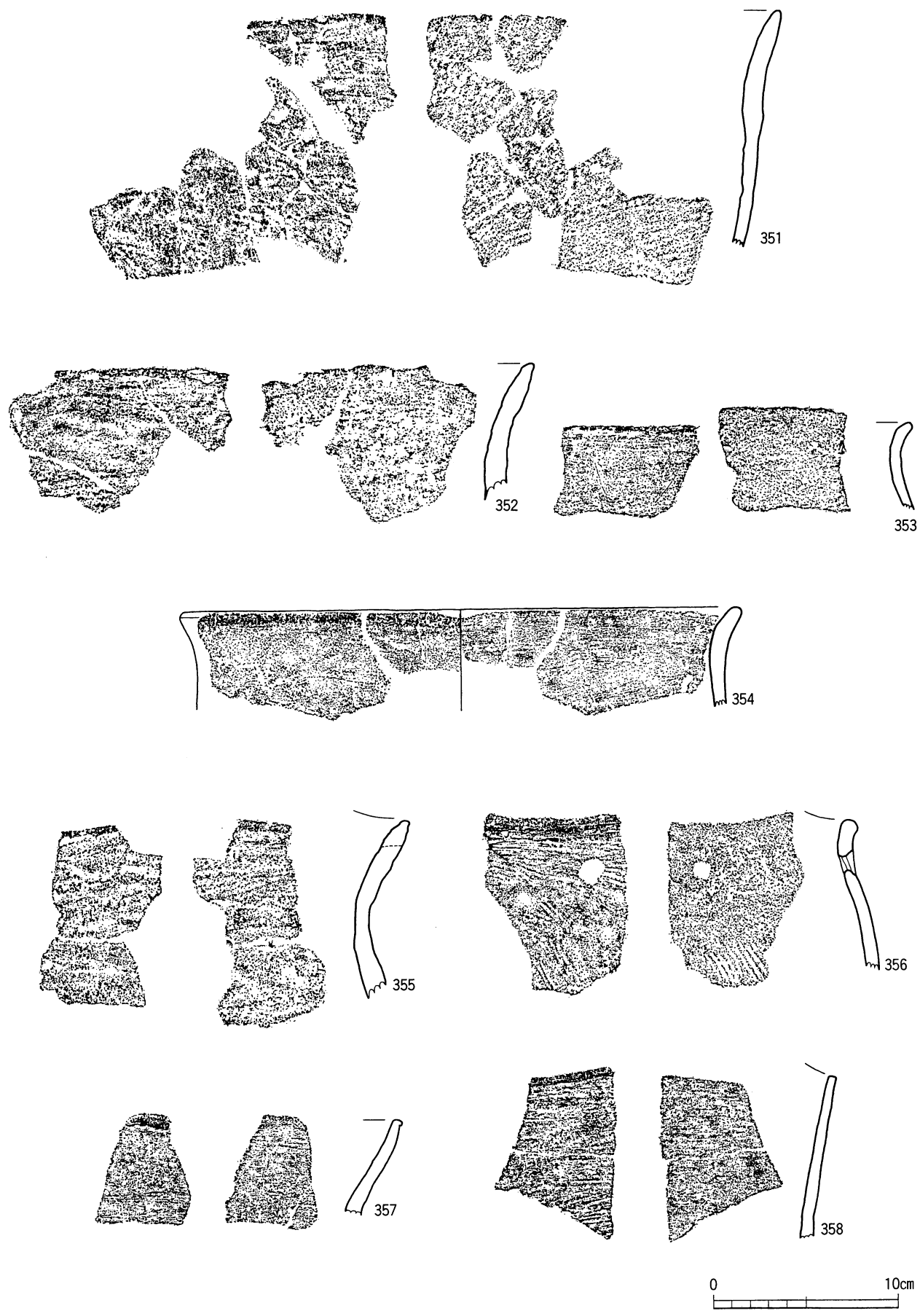
XVc類（371～373・380）は胴部が屈曲し、口縁部に向かって外反するものである。371・372は同一個体で外面は風化しているが部分的に丹塗りが残る。口縁部のほとんどが欠損し、残存する部分も風化や剥落が激しいため口縁部の形態が不明瞭だが、部分的に口縁下に沈線が残されていることから380のように内外面に沈線を巡らし、玉縁状の口縁を呈するものと思われる。

XVd類（374）は胴部が屈曲し、口縁部に向かって直口ぎみにやや外反するものである。波状口縁で口縁部内外面に沈線を巡らせ、屈曲部のやや上方に凹線を施している。

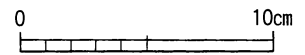
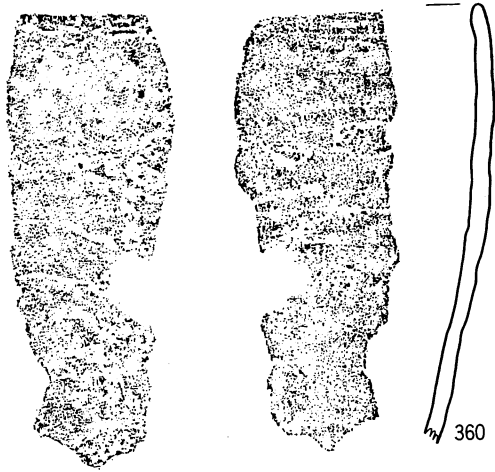
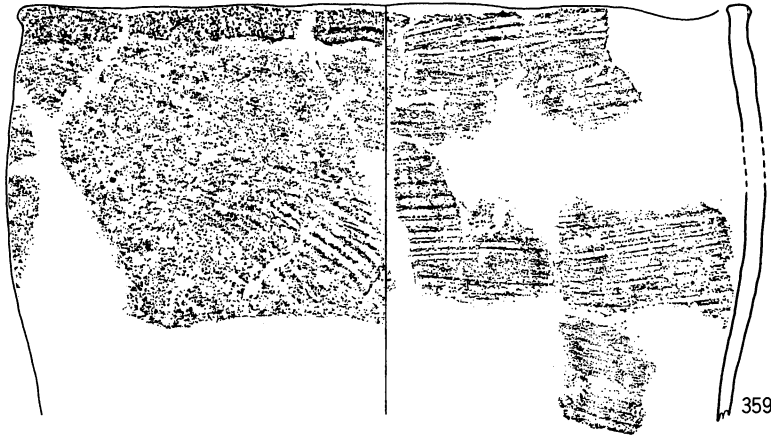
XVe類（375～378）は内湾しながら立ち上がるマリ状の器形を呈する一群で、ほとんどが口縁部を肥厚させ、外面に段をもつ。383の口縁部に突起をみられ、突起の左部分が欠損している。377・378は口縁部の一端の厚みが増すために383同様、口縁部に突起を有するものと思われる。373には部分的に丹塗りが残る。

XVf類（379・381）は口縁部が大きく外反するもので、口縁部内面には沈線文が巡らせている。379には外面に段をもつ。

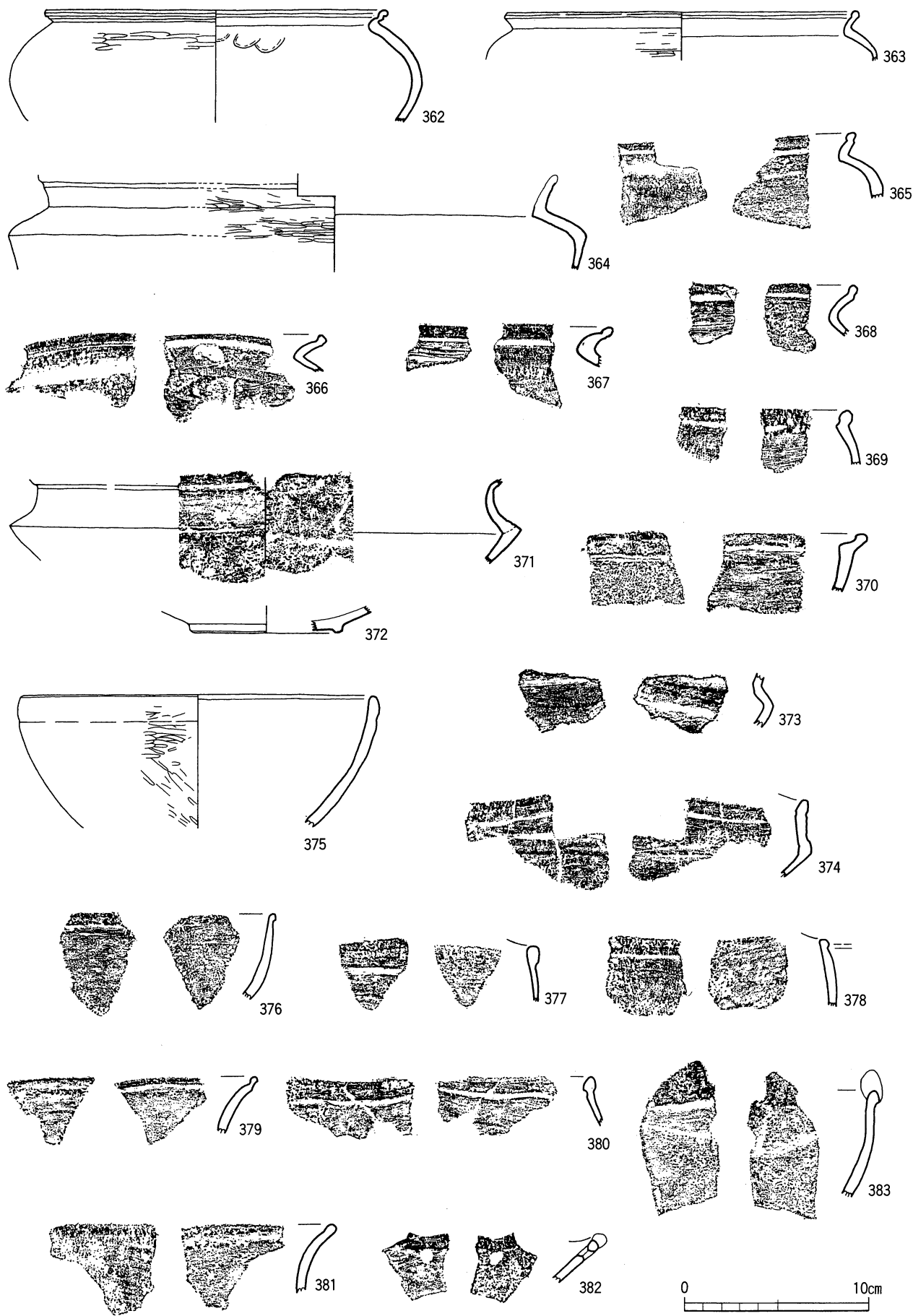
XVg類（382）は皿状の器形を呈する。口縁部にリボン状の突起がみられ、その下に内外面より穿孔が施されている。



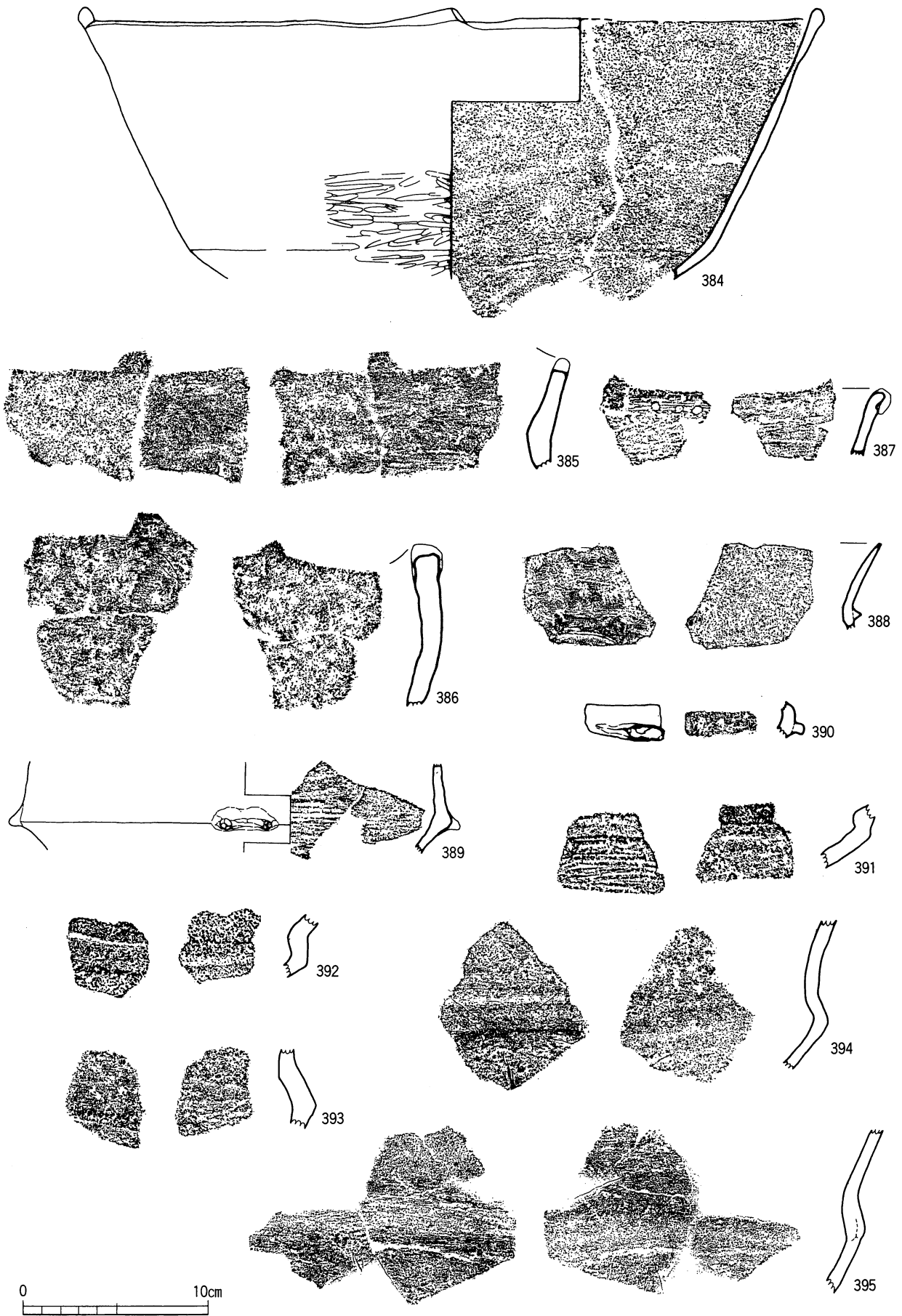
第50図 縄文土器実測図(40) (S=1/3)



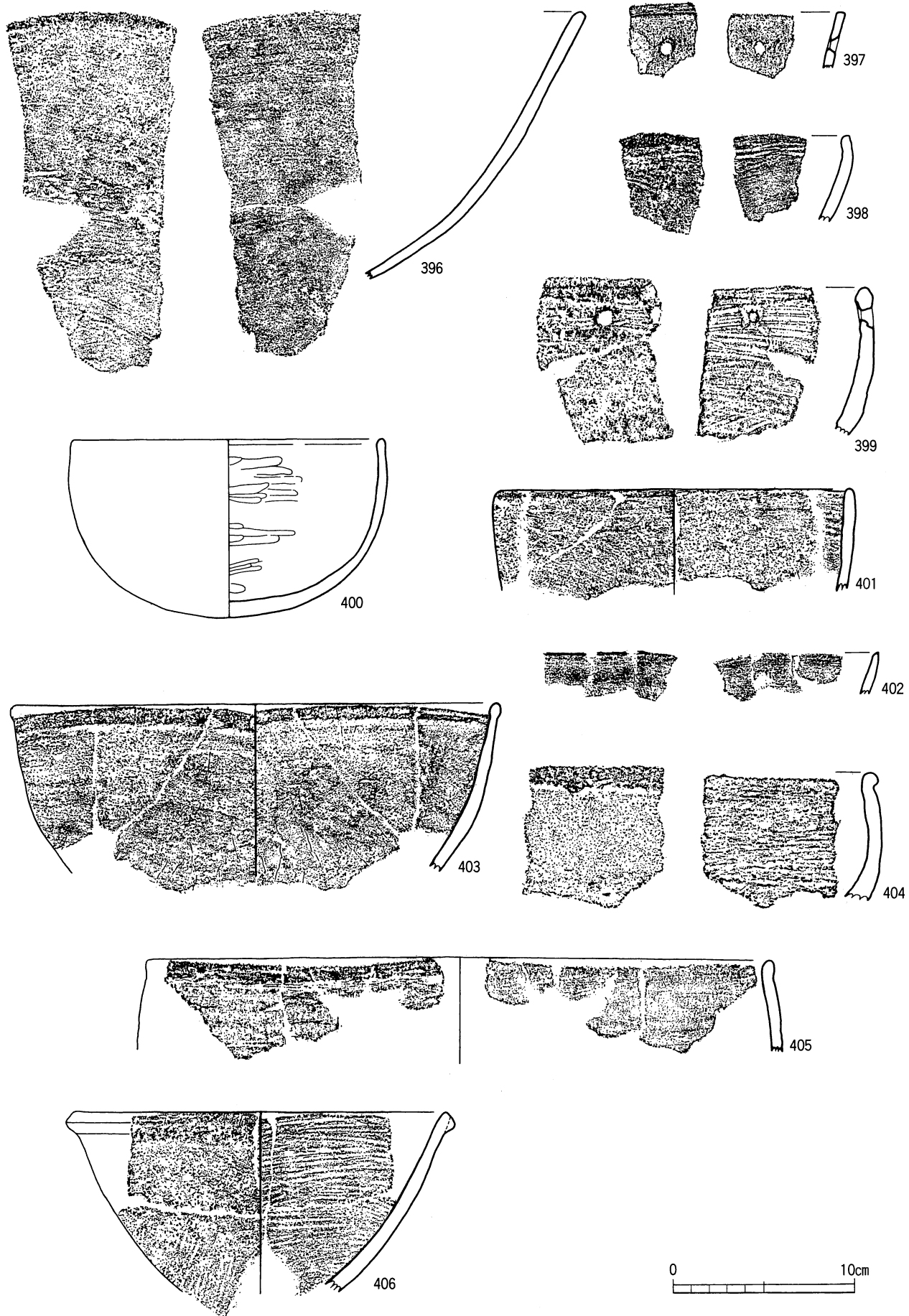
第51図 縄文土器実測図(41) (S=1/3)



第52図 縄文土器実測図(42) (S=1/3)



第53図 縄文土器実測図(43) (S=1/3)



第54図 縄文土器実測図(44) (S=1/3)

XVI類土器（第53図～第54図405、第55図407～409）

粗製の浅鉢を一括した。器形により4類に細分した。B区C21、D21・23・24、E22・24・25、F22～24、G23・24グリットでⅡ層～Ⅲ層中より出土している。

XVIa類（385・388～395）は胴部が屈曲し、外反しながら口縁部が大きく開く浅鉢になると思われる。385は口縁部に突起を有する。突起が欠損しているため形状は不明である。388は頸部に、389・390は胴部屈曲部に蝶ネクタイ状の突起を有する。

XVIb類（384・387・396・397）は内湾しながら口縁部が大きく開く浅鉢である。384の口縁部にはヒレ状の突起を有する。387は口縁部にヒレ突起を有し、口縁下には凹線が巡らせ、その凹線内に刺突が施されていて、XVIII類に含まれる可能性がある。397は内外面より穿孔が施されている。

XVIc類（386・398～405）は内湾しながら立ち上がるマリ状の器形を呈する浅鉢である。386は口縁部にヒレ状突起がみられる。398は内外面を貝殻条痕とナデで調整し、2ヶ所に穿孔が施している。400と401は内面を丁寧に研磨している。403・404・405は口縁部を肥厚させ、口縁端部を丸くさせている。なお、405は深鉢になる可能性もある。

XVI d類（407～409）は底部付近で屈曲し、口縁部に向かって開きぎみ立ち上がる器形を呈する浅鉢である。

器面はナデ調整や貝殻条痕による調整が施されている。

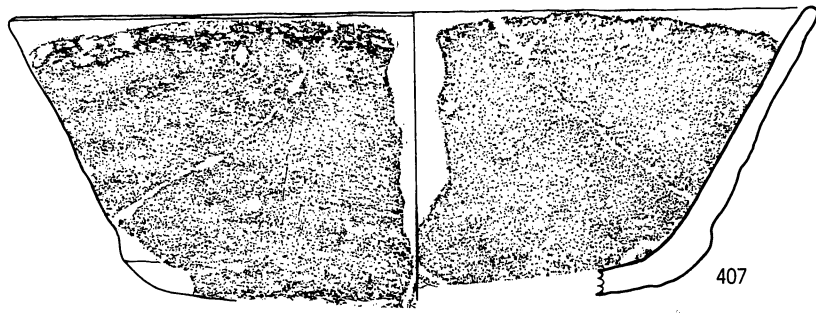
XVII類土器（第56図～第58図）

組織圧痕がみられる浅鉢である。B区E21～23、F21～24、G22グリットでⅡ層中より出土している。器形は底部付近で屈曲し、口縁部に向かって開きぎみに立ち上がるもの（XVd類）や内湾しながら直立または開きぎみに立ち上がるもの（XVc類）で底部が丸底もしくは丸底ぎみになる。圧痕は屈曲下や胴下半にみられ、網目圧痕（415・417～428・433・434）や編布圧痕（411・413・429・430）、網目圧痕と編布圧痕との組み合わせ（431・432）等がみられる。なお、412と413、414と415、416と417はそれぞれ同一個体の可能性がある。

XVIII類土器（第59図～第62図）

口縁部外面に貫通または未貫通の連続刺突を施す一群で孔列土器と呼ばれるものである。B区D22・24、E21～24、F21～25、G22・23グリットでⅢ層中より出土している。孔列文土器がまとまって出土した例は少ないため可能な限り図化を行った。全体的に刺突が貫通するものは少なく、大半が未貫通のもので、そのほとんどが竹管状工具によって刺突が施されている。また未貫通のものには口縁部内面にコブ状の突出がみられる。突帯の有無や器形により6類に分類した。

XVIIIa類（436～447）は口縁部を肥厚もしくは幅広の突帯が有するもので、器形は胴部が屈曲し口縁部に向かって外反するもの（436～438）や内湾しながら立ち上がる器形のもの（441～447）等、深鉢や鉢・浅鉢が認められる。436～440のように肥厚もしくは幅広の粘土帯を貼付け、断面が台形状に近い形に整形した肥厚帯下や441～443・446のように肥厚させた口縁下に凹線を巡らせることによって肥厚帯を作り出し、その凹線部分に連続刺突を施している。また445は口縁部の下を強い条痕調整と粗いナデ調整を行うことによって、肥厚帯を作り出し、肥厚帯内に連続刺突を施している。



407



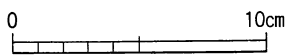
408



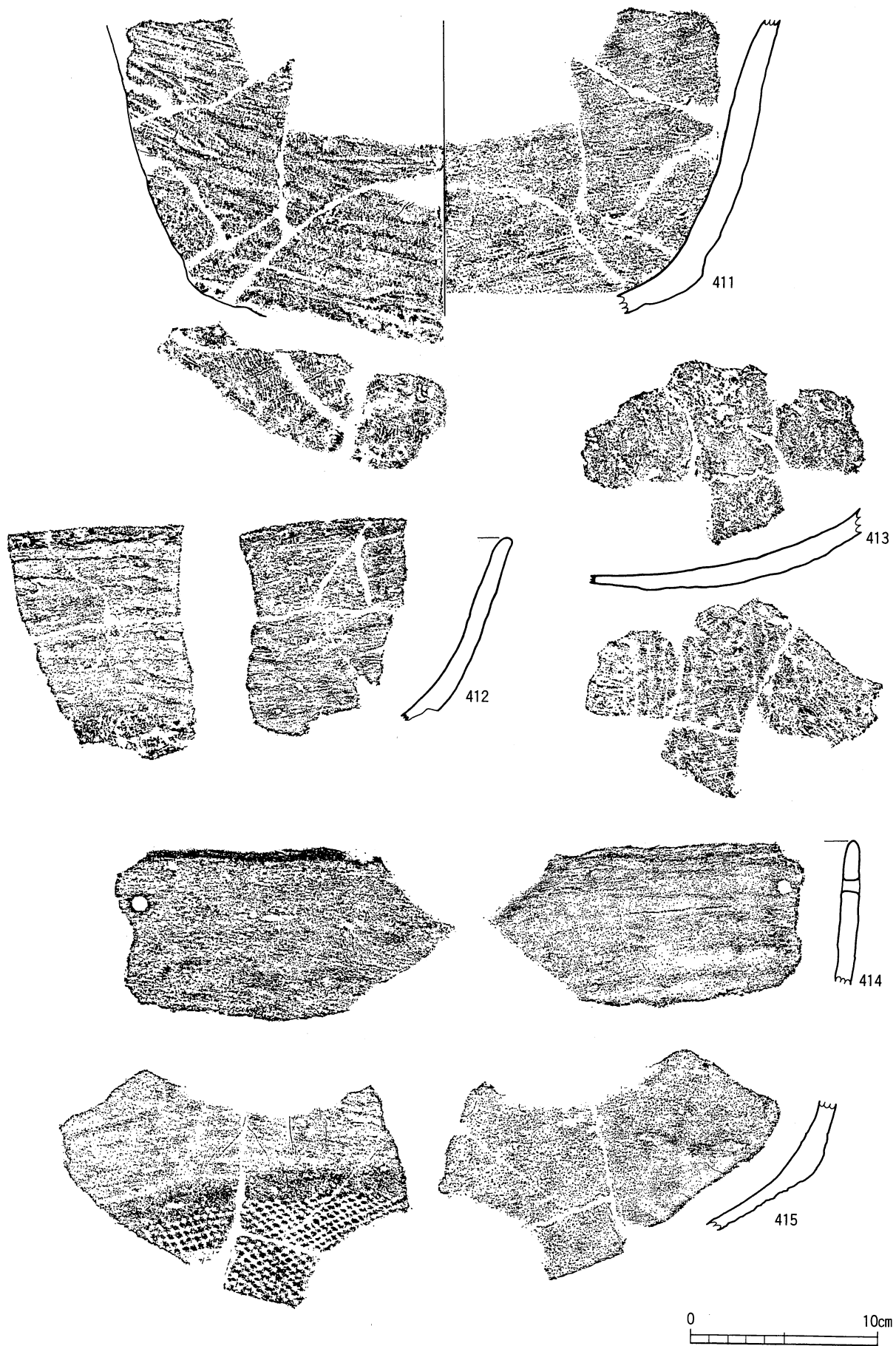
409



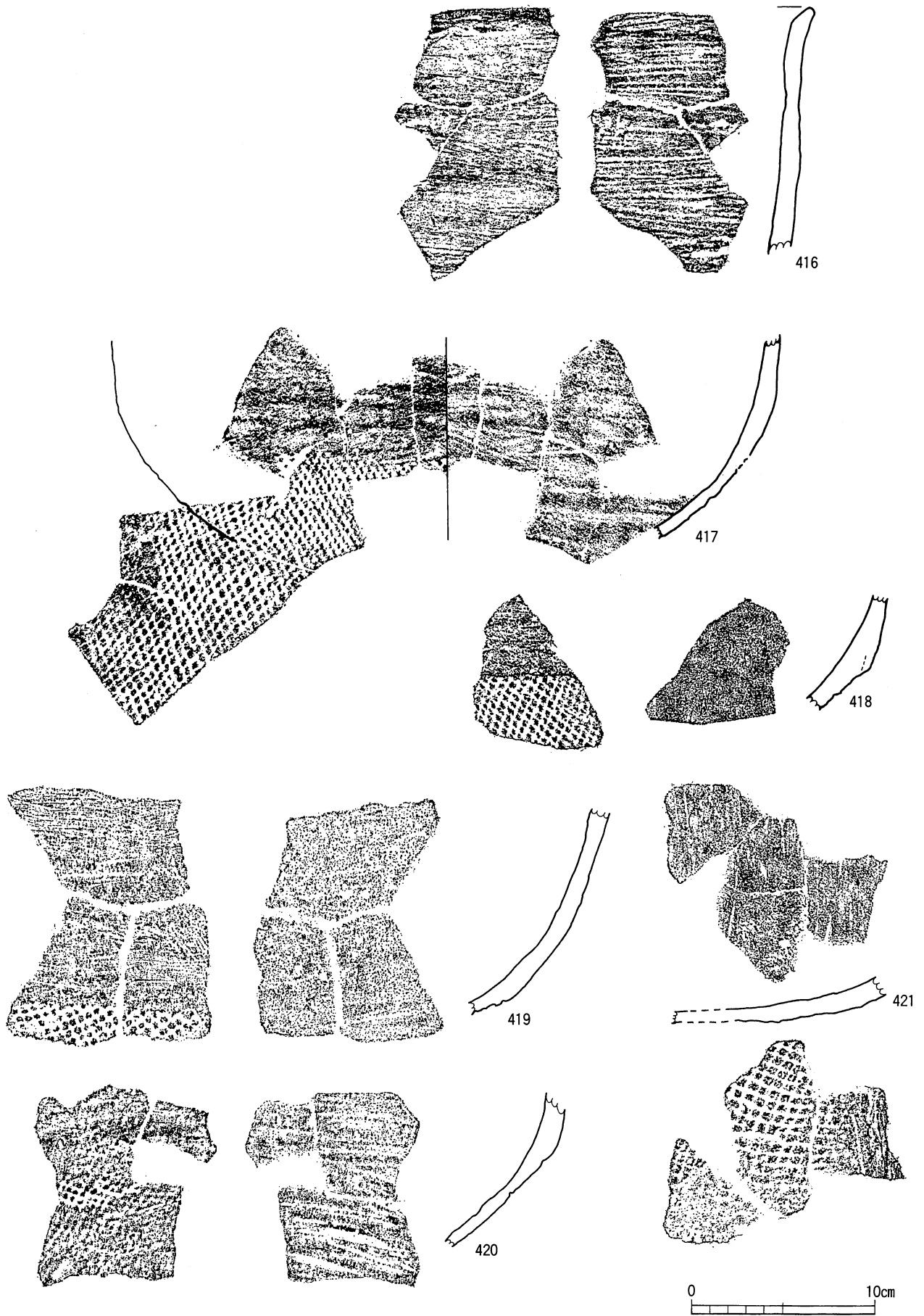
410



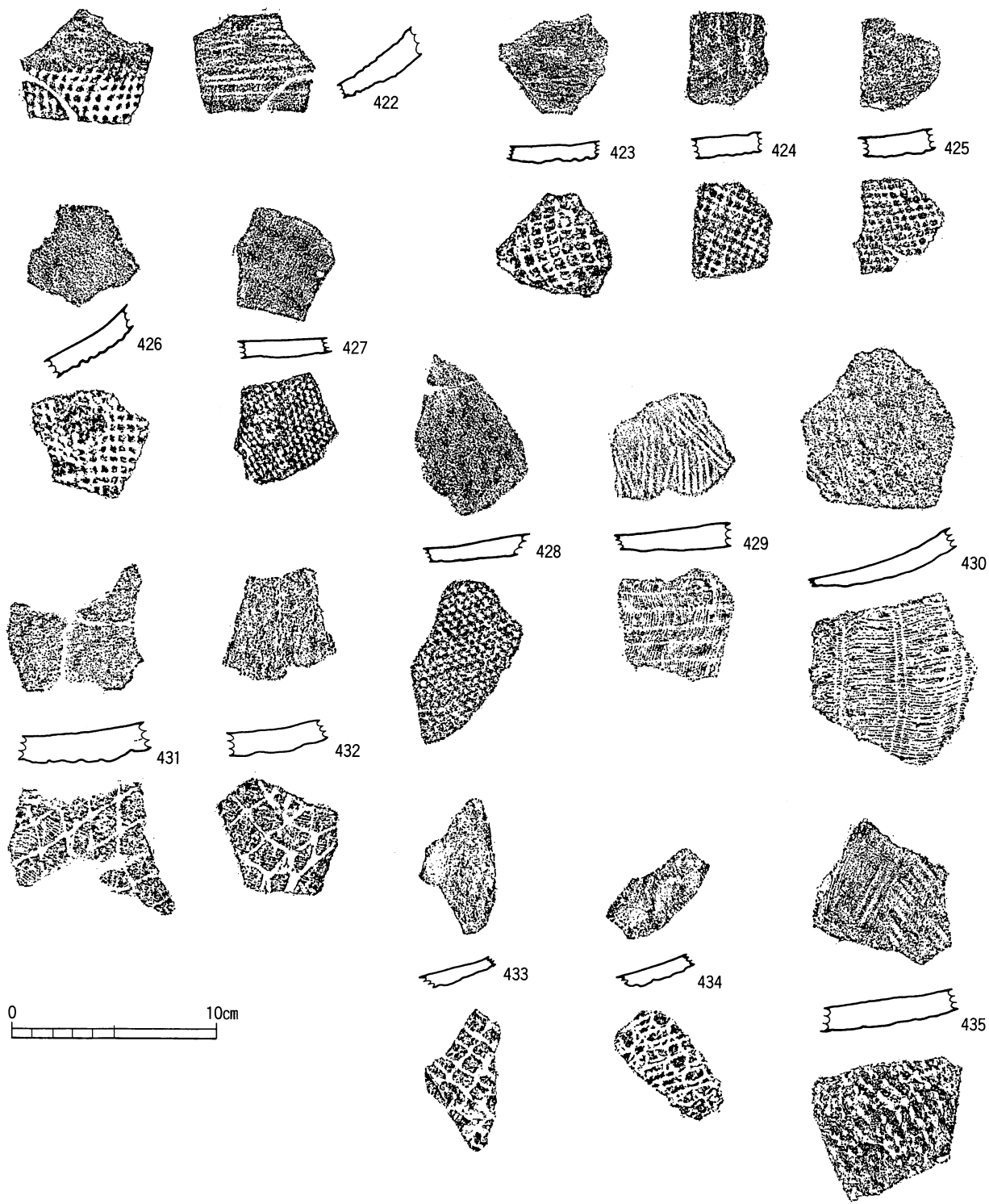
第55図 縄文土器実測図(45) (S=1/3)



第56図 縄文土器(46) (S=1/3)



第57図 縄文土器実測図(47) (S=1/3)



第58図 縄文土器実測図(48) (S=1/3)

VIIIb類 (448~450) は断面が三角形に近い形状で幅の狭い突帯を有するもので、口縁部の資料で器形全体の形状がつかめないが、おおよそ器形は胴部が屈曲する深鉢になるものと考えられる。連続刺突は突帯のすぐ下に巡らされている。なお、448は口縁端部とやや下がった位置に突帯を2条巡らしている。

VIIIc類 (451~454) は口縁部もしくは胴部に刻目を有する突帯をもつもので器形はおおよそ454のように胴部で屈曲し、外反しながら口縁部が開く深鉢になるものと思われる。刻目突帯は451~452のように口縁部からやや下方に張り付けているものや453・454のように直接刻みを施すものや胴屈曲部に張り付けるものが認められる。また453・454には口縁部に肥厚帯をもつ。連続刺突はVIIa・b類同様、突帯(451・452)や肥厚帯のすぐ下(453・454)に巡らされている。

VIIId類 (455~460) は胴部で屈曲し、外反しながら口縁部が開く器形のをまとめた。器面調整は大半のものが貝殻条痕やナデ調整を施すが、455は内面を丁寧なミガキ調整を行っている。

VIIIe類 (461~466) は口縁部がやや外反しながら開くもので、深鉢または鉢になると思われる。器面調整は貝殻条痕やナデ調整がみられる。466は半裁竹管で連続刺突を施している。

VIIIf類 (567~472) は内湾しながら立ち上がるマリ状の器形を呈する鉢または浅鉢である。470は胴部下半に段をもつ。器面調整は外面に条痕を、内面に丁寧なミガキを行っている。

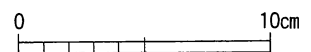
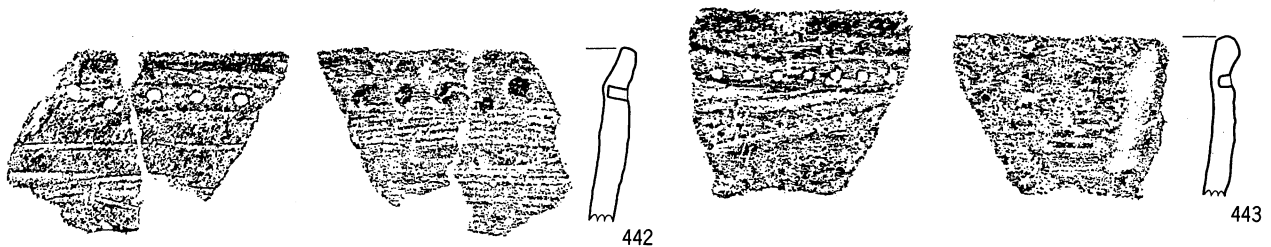
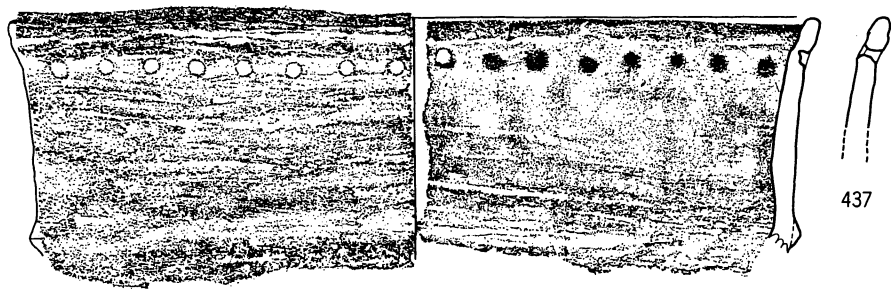
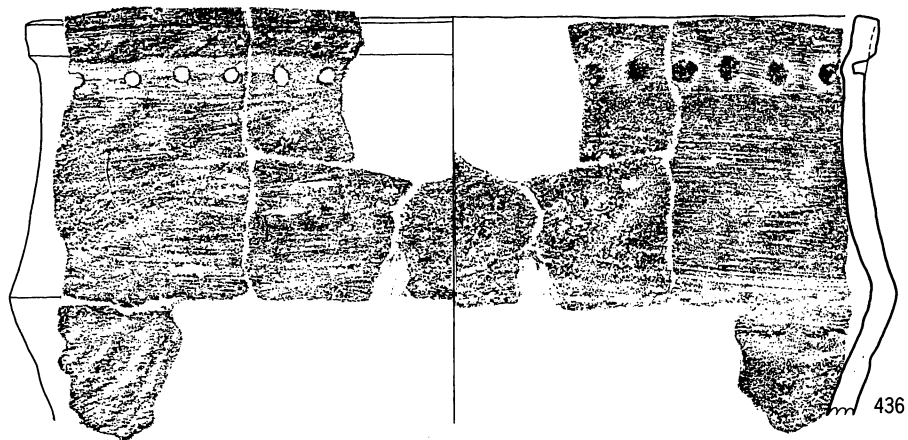
XIX類土器 (第54図406・第55図410・第63図~第65図)

突帯が巡る一群を一括した。A・B区C23、D21・23・24、E23~26、F21~25、G21・23、H24グリットで主にⅡ層中より出土している。器形と突帯の位置等により3類に細分した。

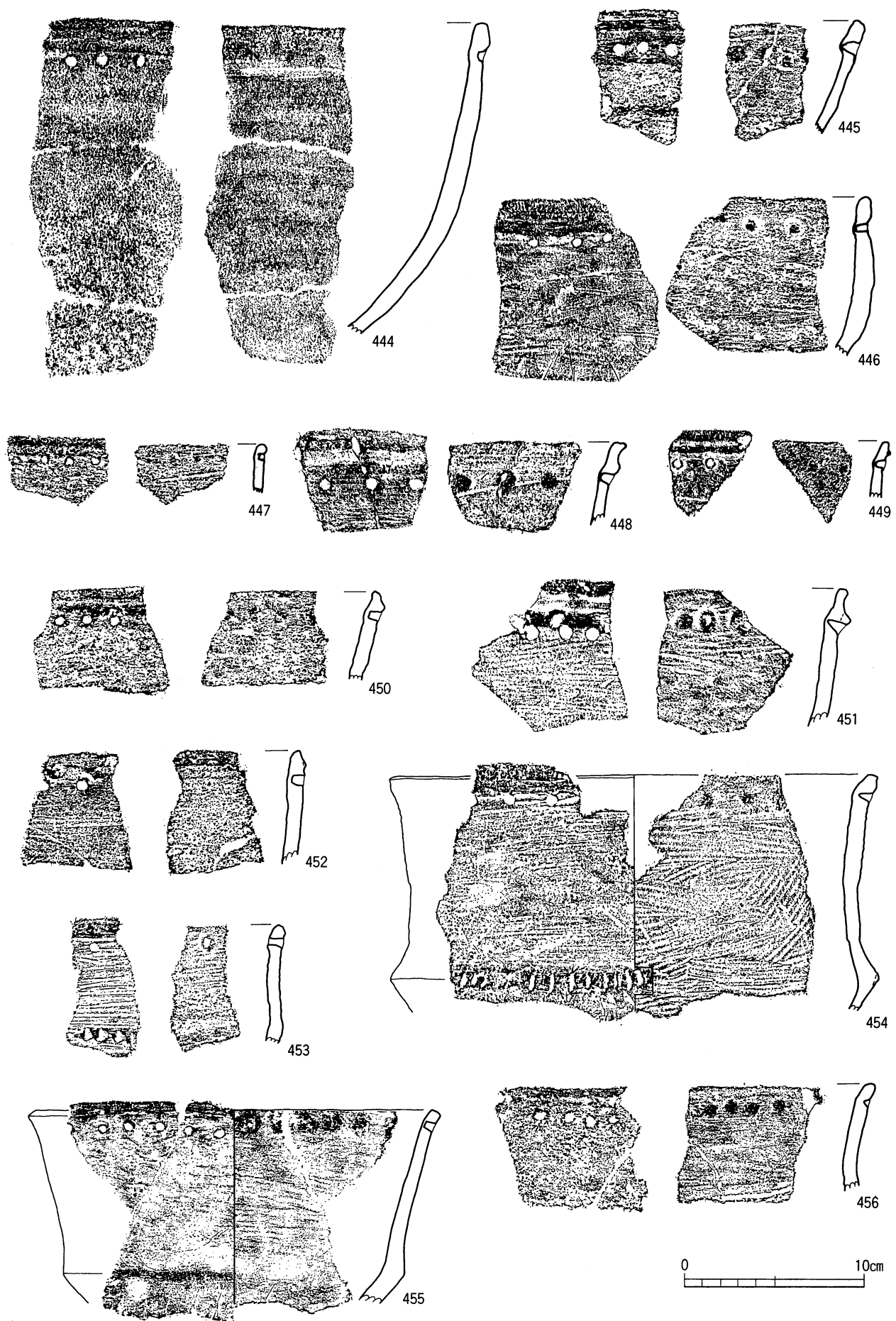
XIXa類 (410・473~480・482~485・493) は口縁部に幅広の粘土帯を貼付けた一群で、断面は台形もしくは鈍角三角形に近い形状になる。深鉢のものはVIIa類のように胴部が屈曲し、口縁部に向かって外反するものや内湾しながら立ち上がる器形等になると考えられる。また浅鉢については410のように底部付近で屈曲し、口縁部に向かって開きぎみ立ち上がる浅鉢も認められる。

XIXb類 (406・481・486~492・494・495) は断面が正三角形やカマボコ状の突帯を有するものである。器形は胴部が屈曲し、やや内傾する器形をもつ深鉢(494・495)や、内湾しながら口縁部が開く浅鉢や鉢(406)になるもの等がみられる。口縁部に貼付けられる突帯の位置は口縁端部に接するように貼付けられているもの(406・481・494・495)や口縁部からやや下方に張り付けられるもの(486~492)が認められる。406・494等は突帯を貼付け後、ヨコナデ調整を行っているのに対し、495のように突帯に指頭痕が残るものもみられる。490・491は厚みのあるカマボコ状の断面を有する突帯で他のものと胎土や焼成が異なり、晩期のものではない可能性もある。

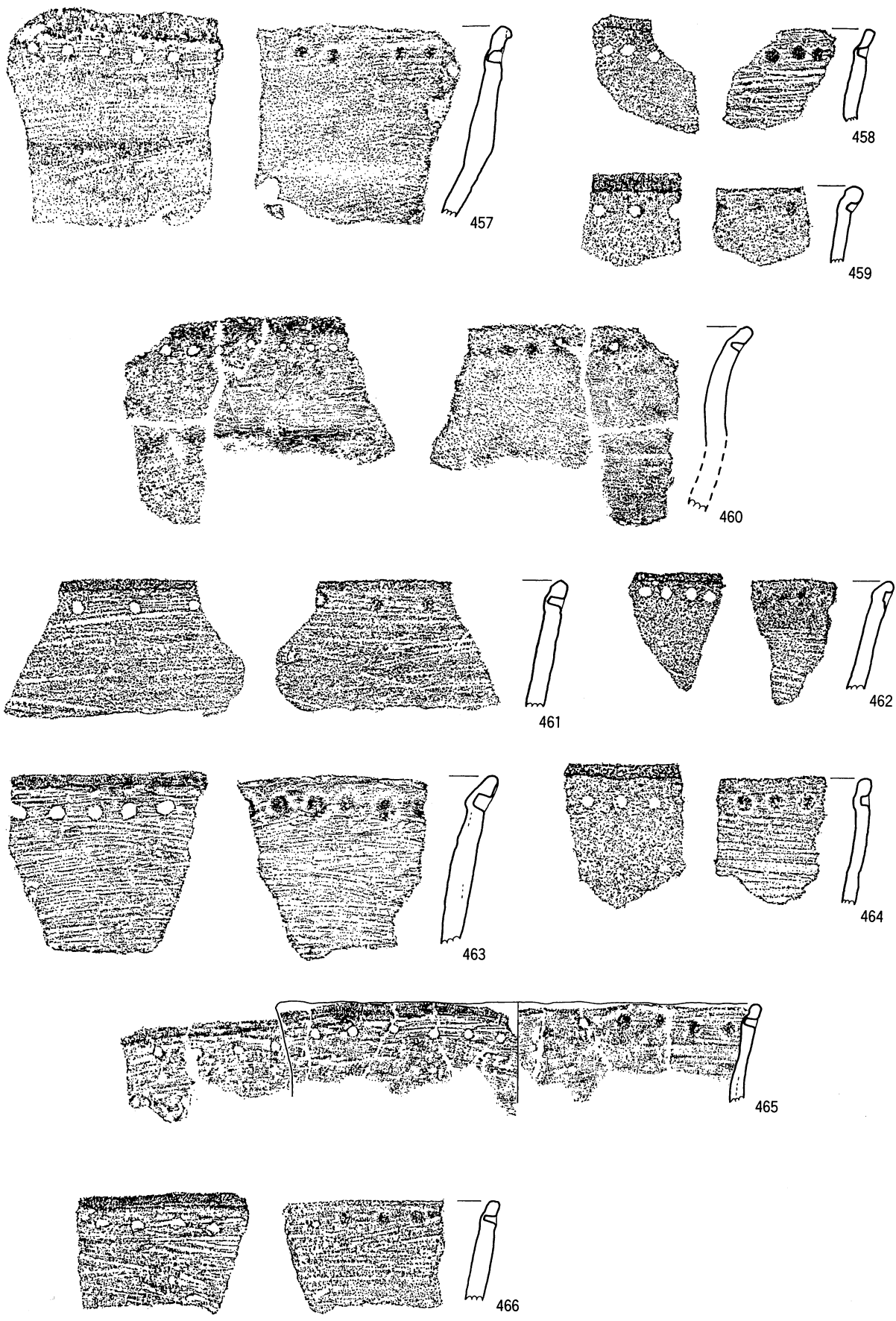
XIXc類土器 (496~515) は突帯に刻目をもつ一群である。口縁部の資料が多いため、器形の全容がわかるものが少ないが、胴部が屈曲し、口縁部が内傾するもの(496・500・501)や直口するもの(502・511・514)、口縁部が大きく外反しながら開くもの(504・505)がみられる。突帯は口縁部と胴部に巡る二条突帯のもの(500・501・511)や口縁部のみ巡るもの(502・504・505)、口縁部の突帯から曲線状の突帯を垂下させるもの(512・513)が認められる。口縁部に貼付けられる突帯の位置は口縁端部に接するように貼付けられている512以外は全て、口縁部からやや下方に張り付けられている。突帯に施される刻目には指頭によるもの(496~502・504)やヘラ状工具によるもの(500・501・506・512・513)、竹管状工具によるもの(509)、貝殻腹縁によるもの(508・510・515)等がみられるが、中には500・501のように口縁部突帯



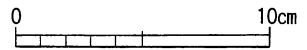
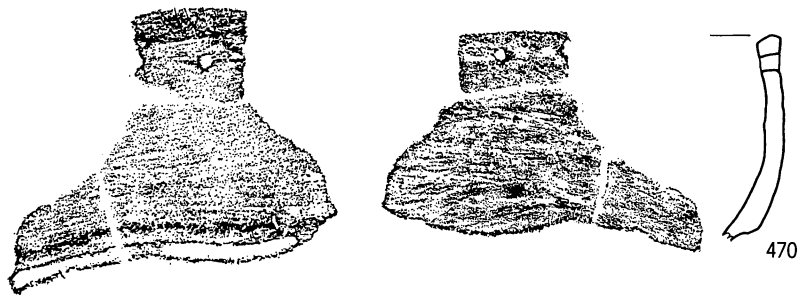
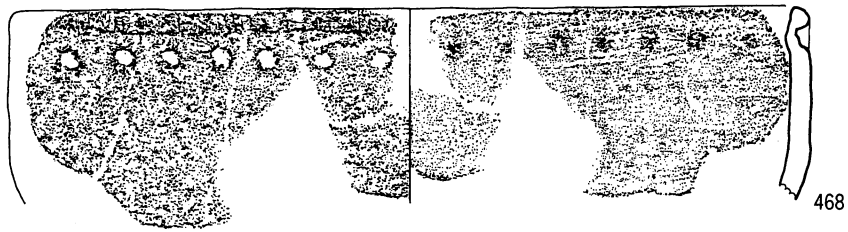
第59図 縄文土器実測図(49) (S=1/3)



第60図 縄文土器実測図(50) (S=1/3)



第61図 縄文土器実測図(51) (S=1/3)



第62図 縄文土器実測図(52) (S=1/3)

にはヘラ状工具、胴部突帯には指頭といったように工具を変えて刻みを施すものや511のように口縁部突帯のみヘラ状工具を施すものが認められる。器面は主に貝殻条痕やナデ調整だが、514のようにハケ目調整が施されているものも認められる。

XX類土器（第66図516～533）

胴部が屈曲する浅鉢を一括し、器形により2類に細分した。B区D22・25、E22・24、F22・24、G23グリットでⅡ層中より出土している。

XXa類（516～524・529～530・532・533）は口縁部に向かって直口もしくは外反しながら開く器形で、口縁部に段をもつもの（516・518・520・523・532）や口縁部や胴部屈曲部に沈線を巡らせるもの（519・521・522・523）が認められる。器面調整は両面ともミガキを施すものやミガキとナデ調整併用するものがみられる。516は内外面より穿孔が施されている。また518は左に向かって口縁部の段が広がることから波状口縁の可能性はある。

XXb類（525～528・531）は口縁部が内傾する器形で、XXa類と比べて立ち上がりが短くなるものである。口縁部に段をもつもの（526～528）や胴部屈曲部に沈線を巡らせるもの（527・528）がみられる。器面調整はミガキやナデ調整を併用するものが多くみられる。

XXI類土器（第67図534～538）

その他、少量出土のものを一括し、器種により2類に細分した。

XXIa類（534～537）は壺形土器である。B区D21、F22グリットでⅡ層中より出土している。535～537までは比較的薄手に対し、534は厚みがある。536は外面が風化しているが、内外面とも丹塗りが施され、内面のミガキ調整も丁寧に施されている。

XXIb類（538）は高坏形土器の裾部であろうか。外面は風化のため調整が不明だが、内面は比較的丁寧なナデ調整が施されている。

XXII類土器（第10図12・第67図539～552）

晩期の底部と思われるものを一括した。

XXIIa類（12・540～551）は底部から外反しながら立ち上がるものである。粘土盤を貼付けたもの（12・545～547・550）や低い高台状になるもの（543・544・548・551）等がみられる。545～551は浅鉢の底部と考えられる。549は内外面とも丁寧にミガキ調整が行われている。

XXIIb類（539）は深鉢の底部と考えられ、底部下端が張出し、台形状を呈し、若干上げ底ぎみである。

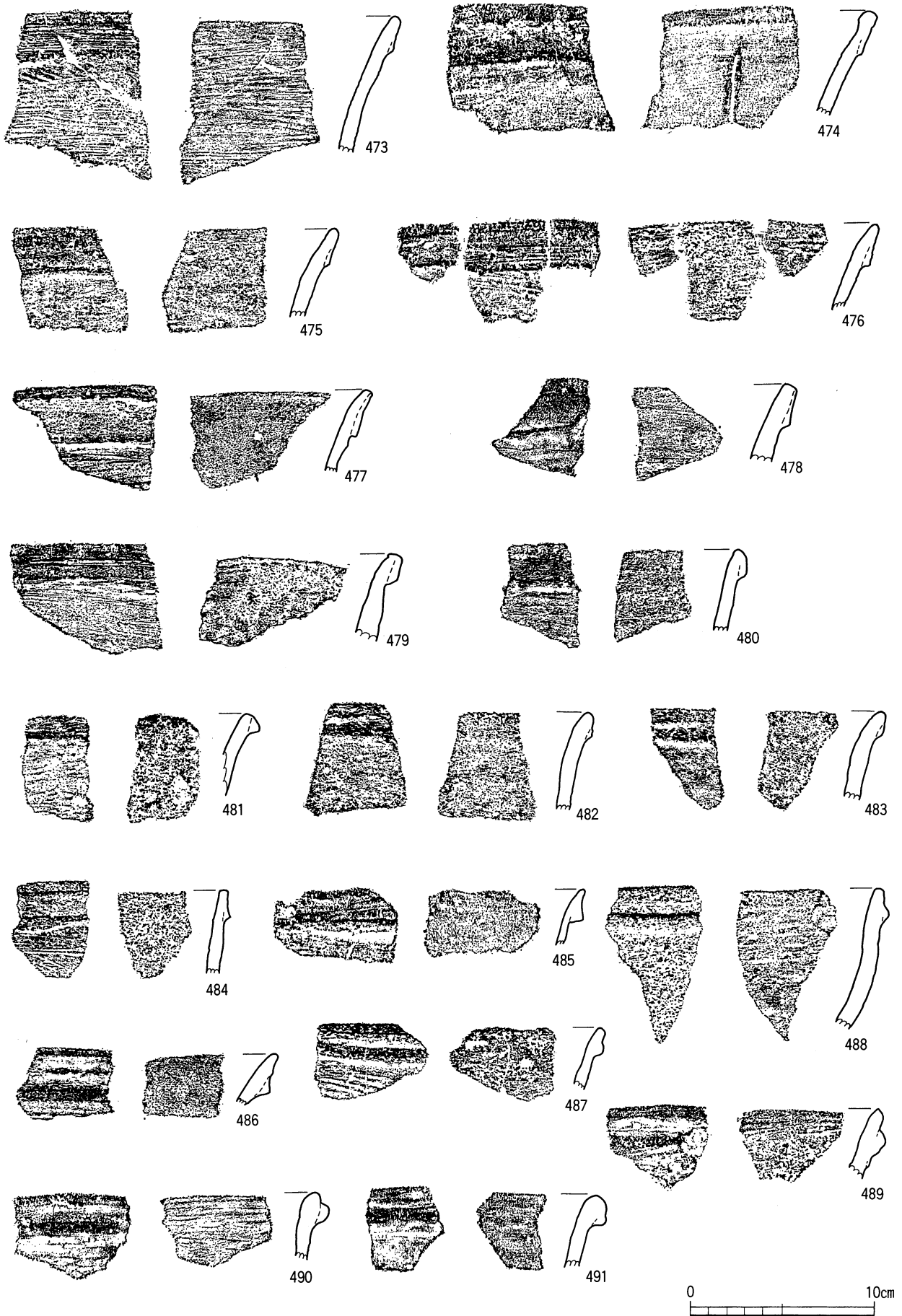
XXIIc類（552）は鉢または浅鉢の底部で高い高台状になるものである。

（4）土器片加工品

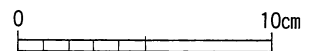
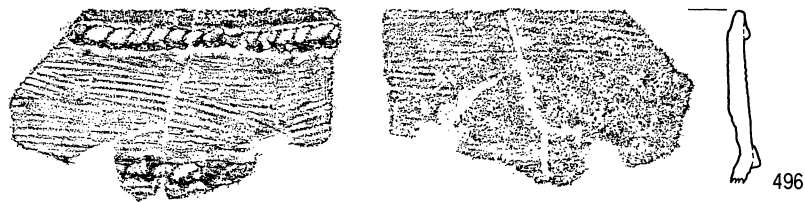
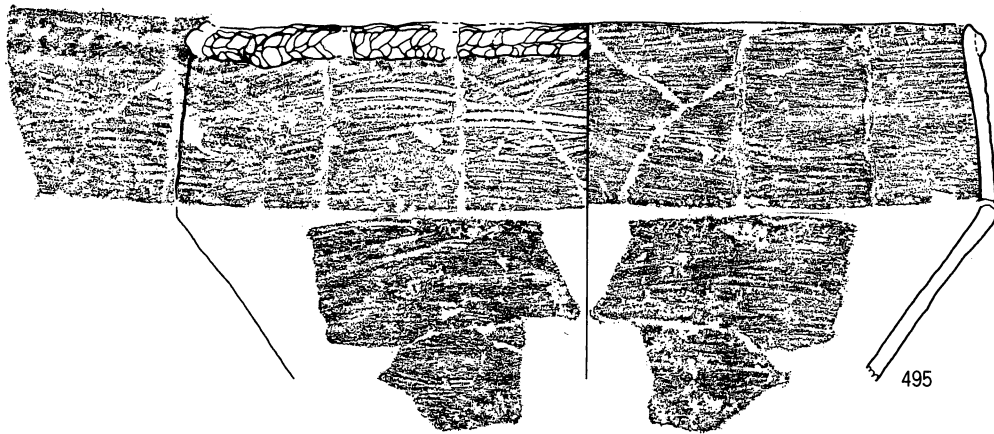
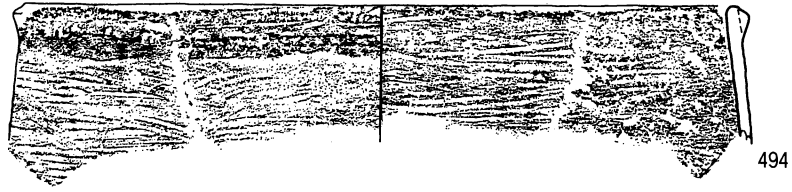
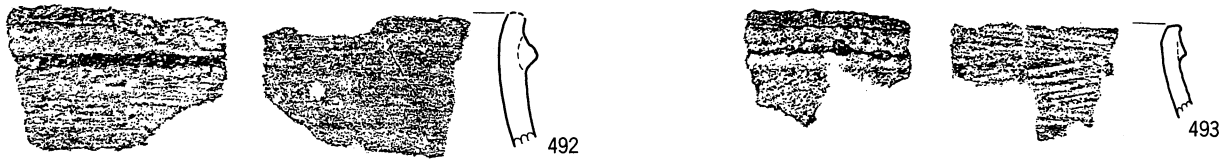
土器片加工品には、円盤・土器片錘の2種類が出土している。

円盤（第68～70図、第1・2グラフ）

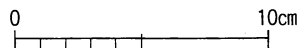
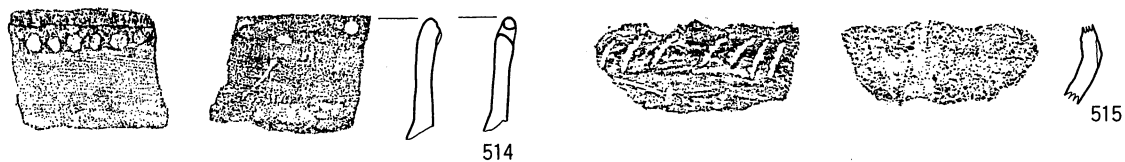
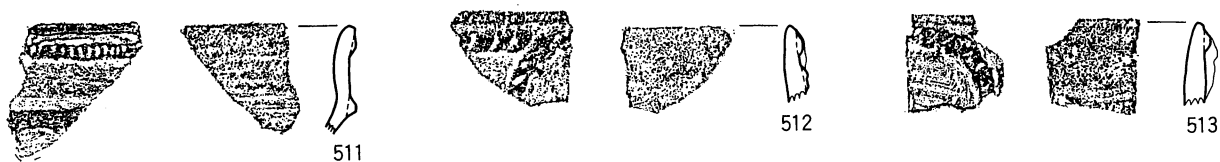
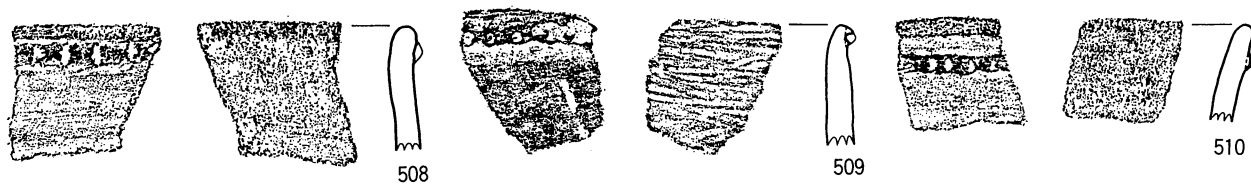
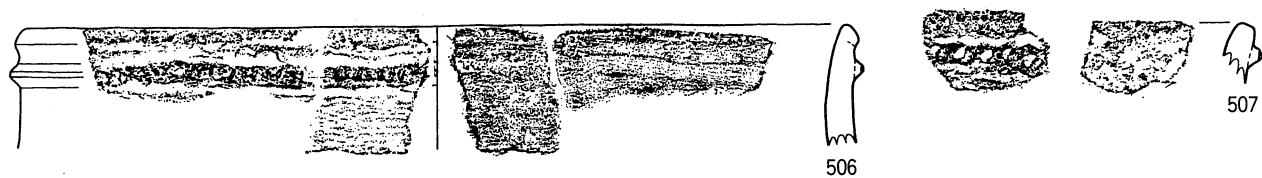
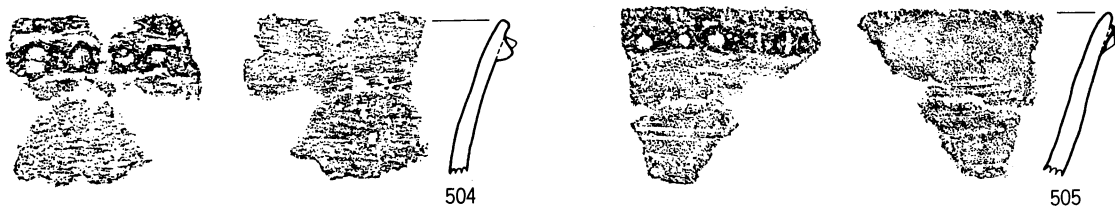
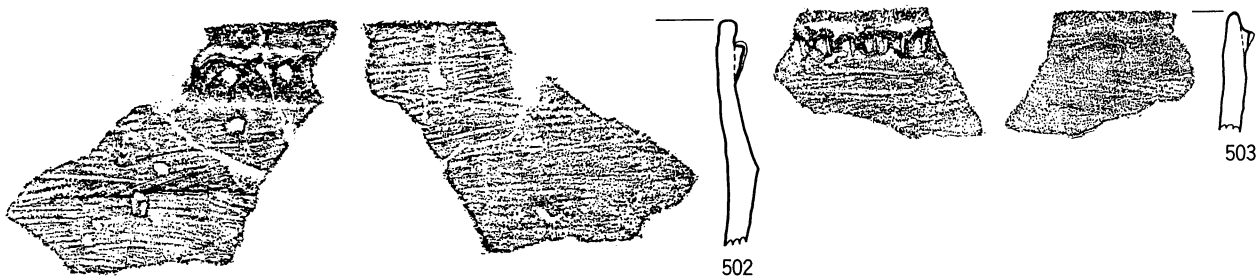
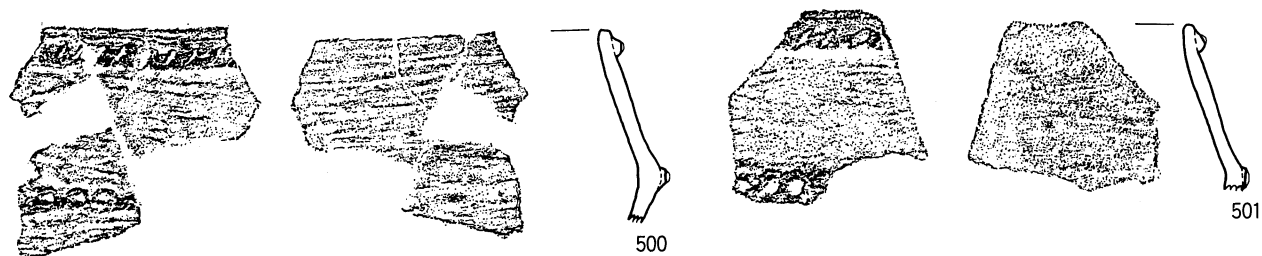
円盤はB区で137点出土していて、そのうち27点図化した。約1/4は弥生時代や古墳時代の住居等の埋土中出土である。いずれも土器片を利用しており、不整な円形もしくは楕円形を呈するものが多い。大



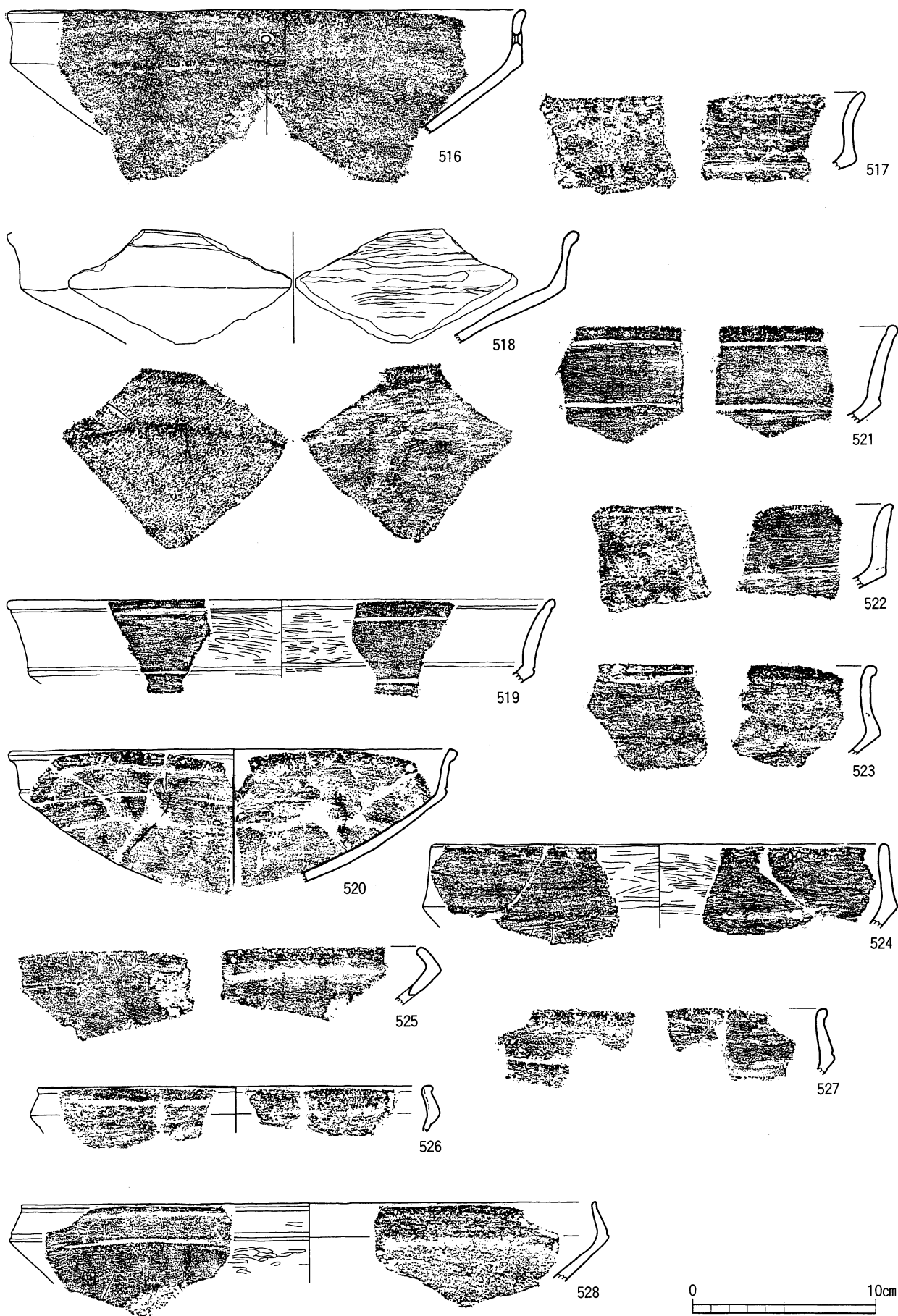
第63図 縄文土器実測図(53) (S=1/3)



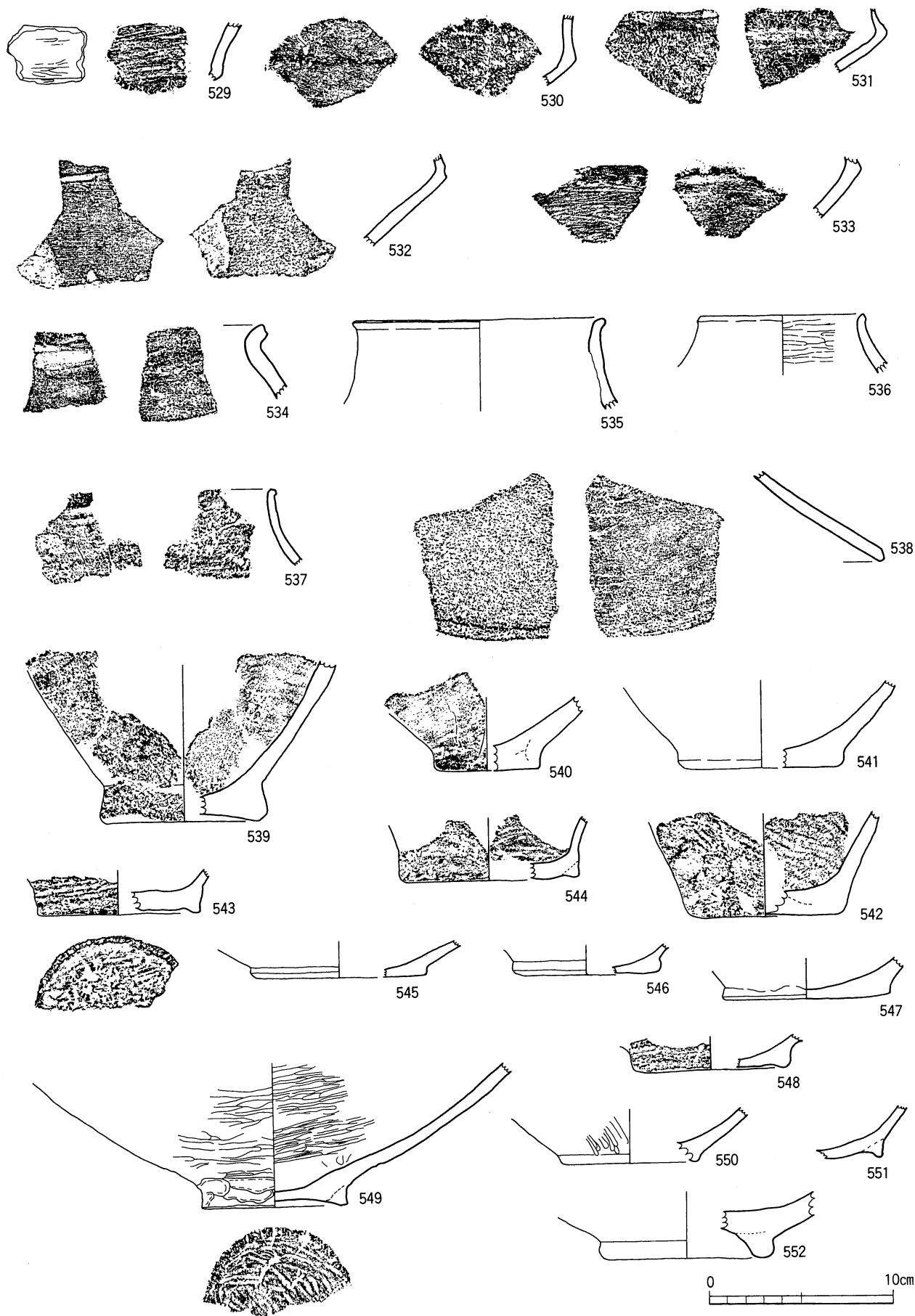
第64図 縄文土器実測図(54) (S=1/3)



第65図 縄文土器実測図(55) (S=1/3)



第66図 縄文土器実測図(56) (S=1/3)



第67図 縄文土器実測図(57) (S=1/3)

きく文様を有するもの（Ⅰ類）、無文のもの（Ⅱ類）に分類出来る。また側面の加工状態によって、打ち欠きにより縁周を整形するもの（a）、縁周を研磨により整形するもの（b）、打ち欠き・研磨により整形するもの（c）、外内面・縁周を研磨によって整形するもの（d）に分けることが出来る。なお、円盤としたものの中には土器片錘の未製品も含まれている可能性がある。

Ia類（554・555・557・559・560・561・562・563・565・566）は14点出土している。そのうち10点図化した。利用部位は口縁部9点、胴部5点である。平均値は長径6.15cm、短径5.75cm、厚さ1.80cm、重量41.47gを測る。口縁部利用のもの大半は口唇部にほとんど打ち欠きを行っていない。主にⅧ類土器を素材に打ち欠きを行っているが、Xd類土器（559）やⅥ類土器（566）を素材にしているものもみられる。打ち欠きは荒く打ち欠いたものがほとんどだが一部細かく打ち欠いたものがみられる。

Ib類（567・569）は4点出土している。そのうち2点図化した。利用部位はすべて胴部である。平均値は長径4.7cm、短径3.93cm、厚さ0.96cm、重量19.53gを測る。分類中で最も小型である。側面を丁寧に研磨を行っている。類土器を素材にしている。

Ic類（553・556・558・564・568・571）は18点出土している。そのうち6点図化した。利用部位は口縁部6点、胴部12点である。平均値は長径5.01cm、短径4.7cm、厚さ2.08cm、重量27.2gを測る。口縁部利用のものはIa類同様、口唇部にほとんど打ち欠きや研磨を行っていないものが多い。主にⅧ類土器を素材に整形を行っている。研磨の範囲も一部研磨のものが大半で、他に縁周の半分近くを研磨するものや縁周の2/3以上研磨するもの等みられる。

Id類（570）は1点のみの出土で図化を行った。利用部位は胴部である。欠損品で形態は不明だが、内外両面および縁周を丁寧に研磨している。また外面には沈線が2条みられることからⅧ類土器を使用しているものと思われる。

IIa類（573・575）は32点出土していて、そのうち2点図化した。利用部位は胴部で、傾向として貝殻条痕がみられる土器片を多く利用している。平均値は長径4.86cm、短径4.62cm、厚さ1.15cm、重量21.17gを測る。整形の特徴はIa類と同様である。

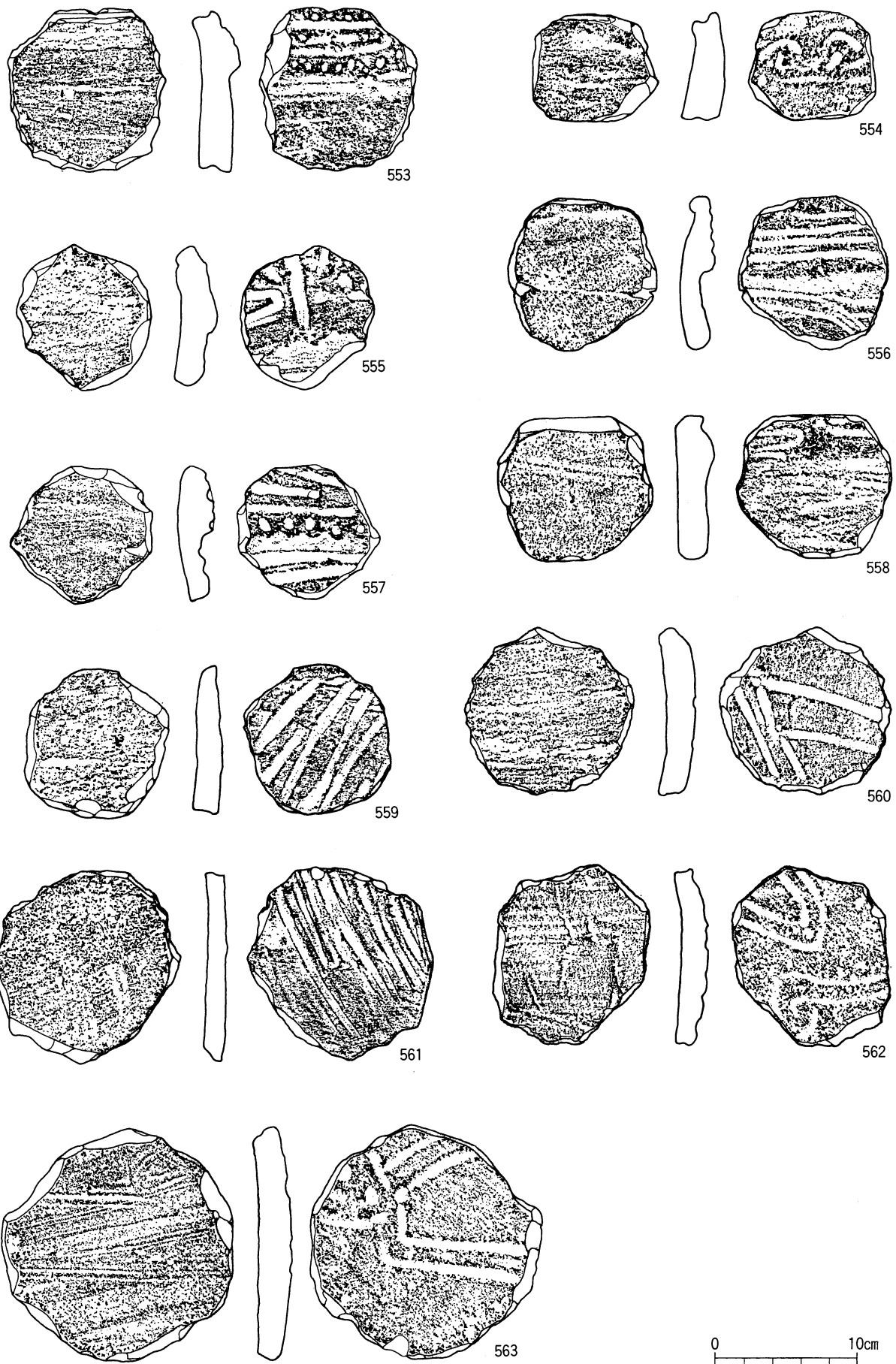
IIb類（574・577）は17点出土していて、そのうち2点図化した。利用部位は胴部である。平均値は長径4.52cm、短径4.22cm、厚さ1.40cm、重量19.04gを測る。整形の特徴はIb類と同様であるが、そのうち577には外面中央に小孔がみられる。小孔は直径4mm、深さ1.5mmで貫通していない。

IIc類（572・576）は42点出土していて、そのうち2点図化した。利用部位は胴部である。平均値は長径4.54cm、短径4.29cm、厚さ1.34cm、重量20.08gを測る。整形の特徴はIc類と同様で一部研磨のものが大半で、他に縁周の半分近くを研磨するものや縁周の2/3以上研磨するもの等みられる。

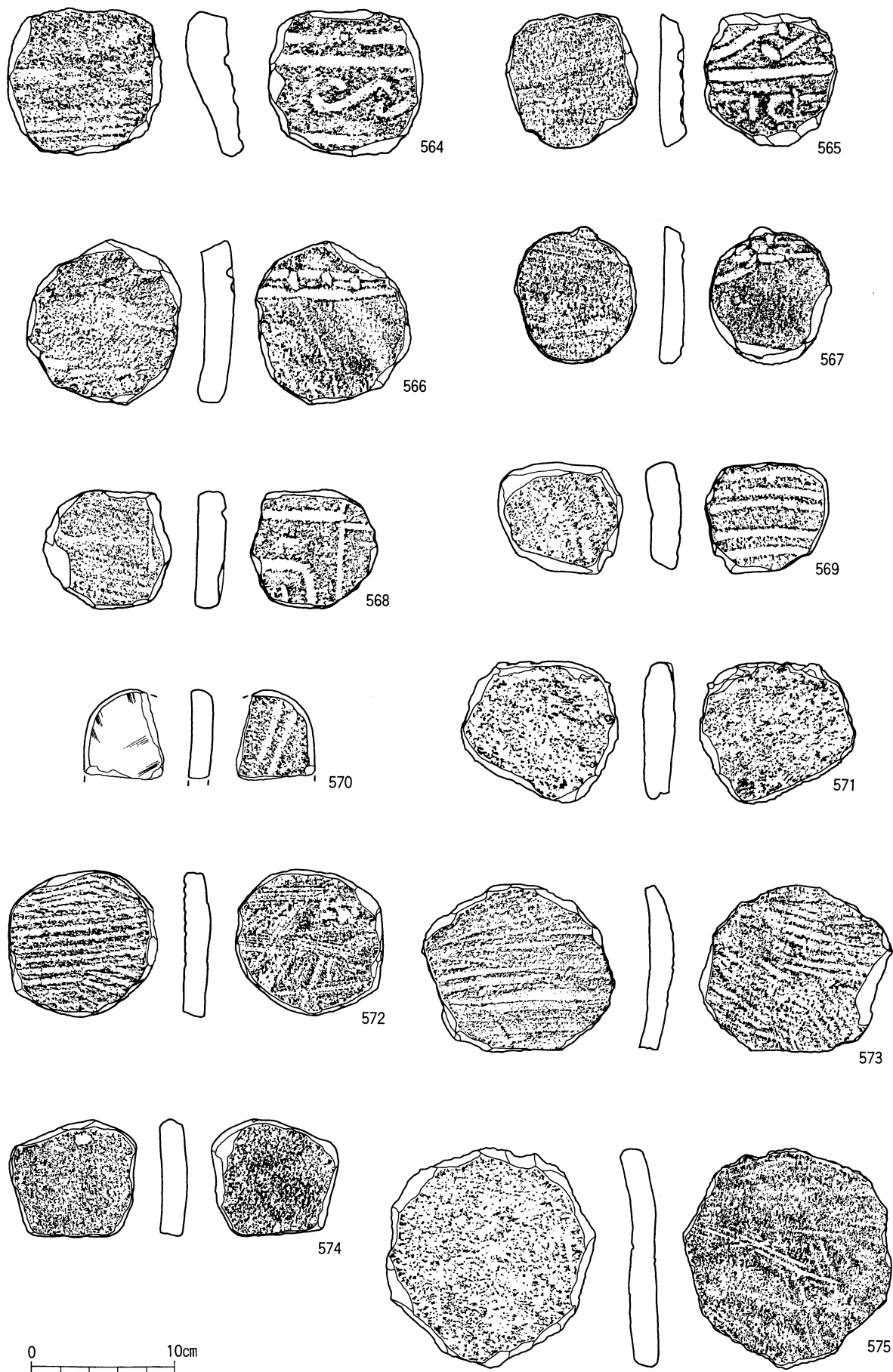
IId類（578・589）は9点出土していて、そのうち2点図化した。利用部位は胴部である。平均値は長径4.7cm、短径4.0cm、厚さ0.8cm、重量19.33gを測る。整形の特徴はId類と同様で、内外両面および縁周を丁寧に研磨している。

土器片錘（第70図580～582）

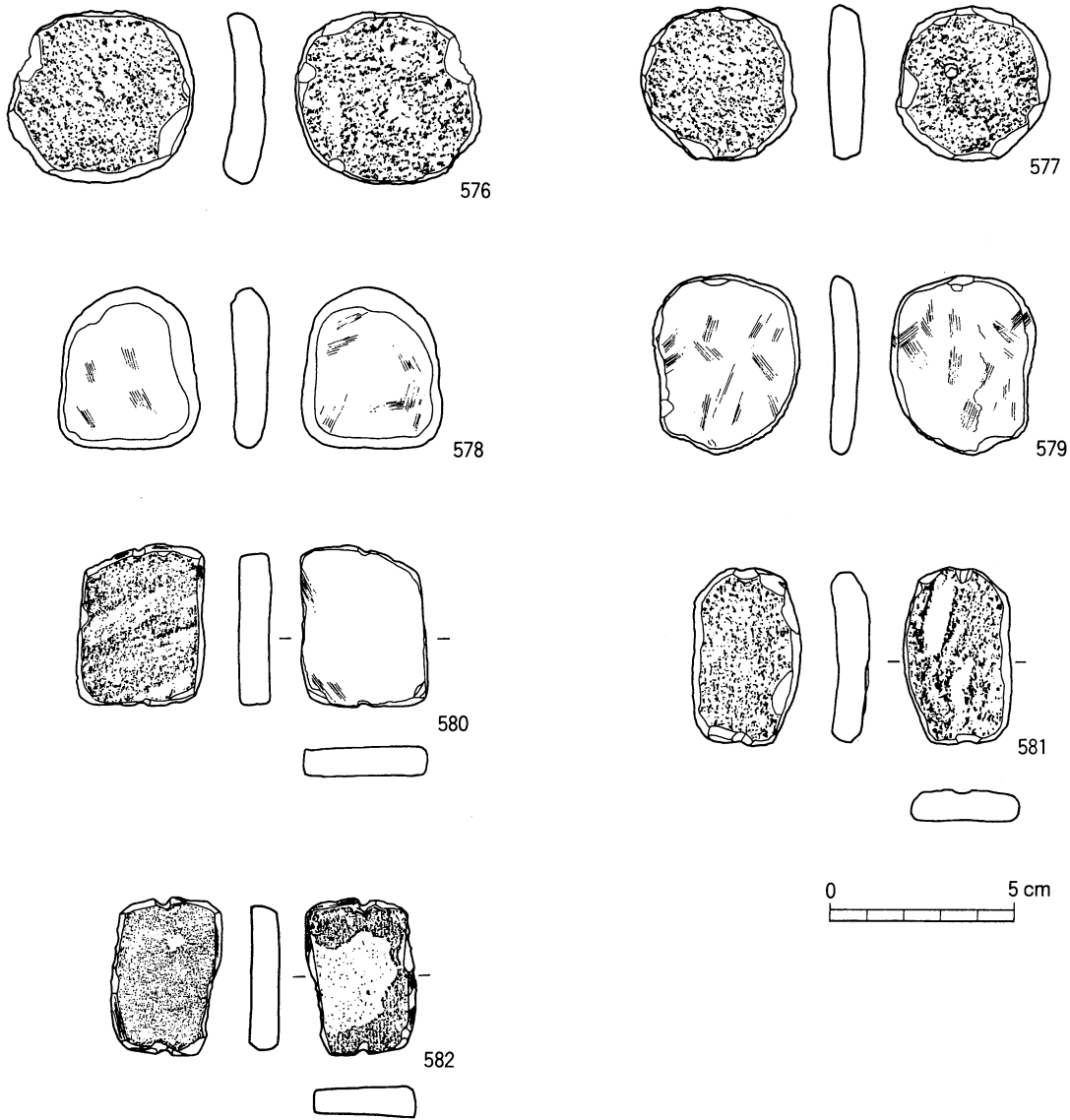
土器片錘はB区で5点出土し、そのうち3点を図化した。包含層出土のものは2点で、他は古墳時代の住居跡等埋土中の出土である。側面を研磨によって整形し、長方形もしくは楕円形状を呈する。上下端に切目を施している。そのうち580は外面にも一部研磨痕が観察される。581は土器分類のⅥ類にあたり、外面に凹線文が施されている。



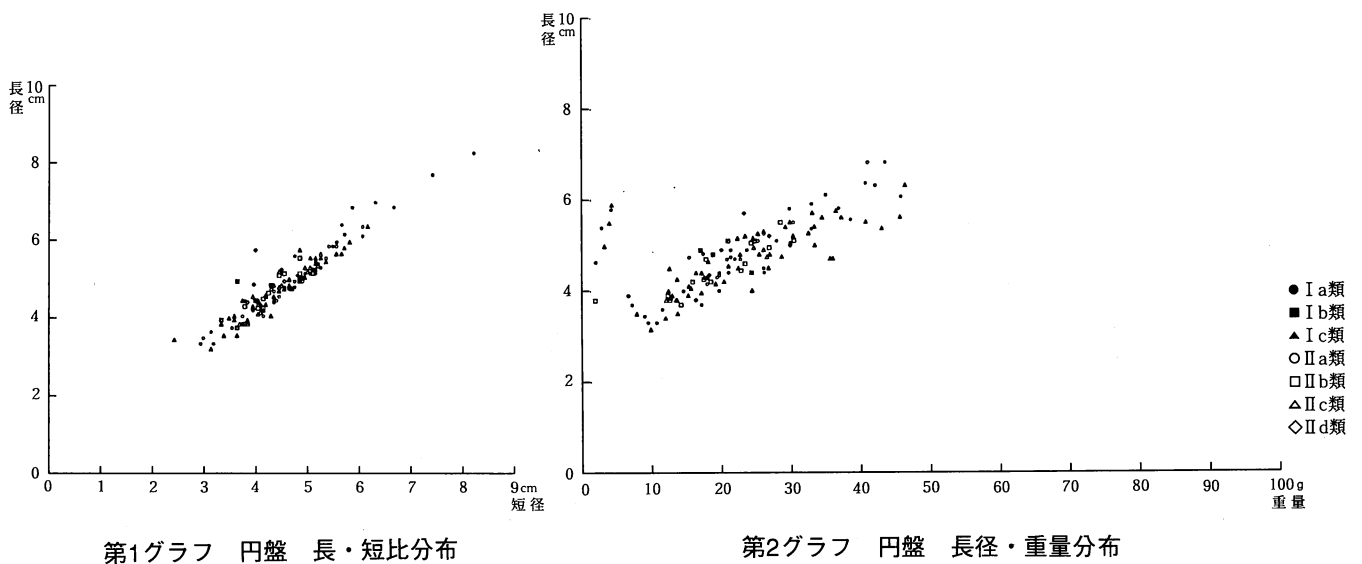
第68图 土器片加工品実測图(1) (S=1/2)



第69图 土器片加工品実測图(2) (S=1/2)



第70図 土器片加工品実測図(3) (S=1/2)



2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡 (SA)

SA 4 (第72図)

SA 4 は、B区の中央平坦部からやや北寄りに位置し、Ⅲ層下位で検出している。不注意により南側半分の床面下・またはそれ近くまで削平してしまったが、約5m規模の不整な方形プランを呈するものと思われる。検出面からの床面までの深さは、北西の壁面で約20cm、北東の壁面で約15cmを測る。床面積は約16.6m²である。埋土は1層で、細粒でやや粘性を帯びた、ややしまりのある暗褐色砂質土が堆積する。また、中央北西寄りの床面には、55cm×45cmの範囲で被熱を受け赤化した焼砂がみられる。柱穴については確認出来なかった。

遺物は、土器・石器合わせて約20点と少なく、大半が中央付近に分布し、床面より約5cm～20cm浮いた状態で出土している。そのうち、4個体分について図化している。また石器について今回図示していないが、石鏃や敲石・軽石製品の5点が出土している。

出土遺物は第72図に示している。583は大型甕の口縁部から胴部である。口縁部が外側に大きく開き、頸部内面に明瞭な稜をもつ。胴部上位に断面台形の貼り付け突帯をもつ。内外面ともハケ状工具の後ナデで、突帯下部にはススが付着している。584は甕の底部である。上げ底で裾が外に開くものと思われる。585は甕である。口縁部は外側に大きく開き、胴部にやや膨らみをもち底部へとすぼまっていく。やや上げ底で、外面は縦・斜方向のハケ目、内面はナデである。外面の胴部中位から口縁部にはススの付着と赤変がみられる。586～588は甕で同一個体と思われる。外反する口縁部から胴部にやや膨らみをもち底部へとすぼまる。上げ底で裾部はやや外側に開く。頸部くびれ部下に貼り付け刻目突帯をもつ。内外面ともハケ目がみられる。

SA 7 (第73図)

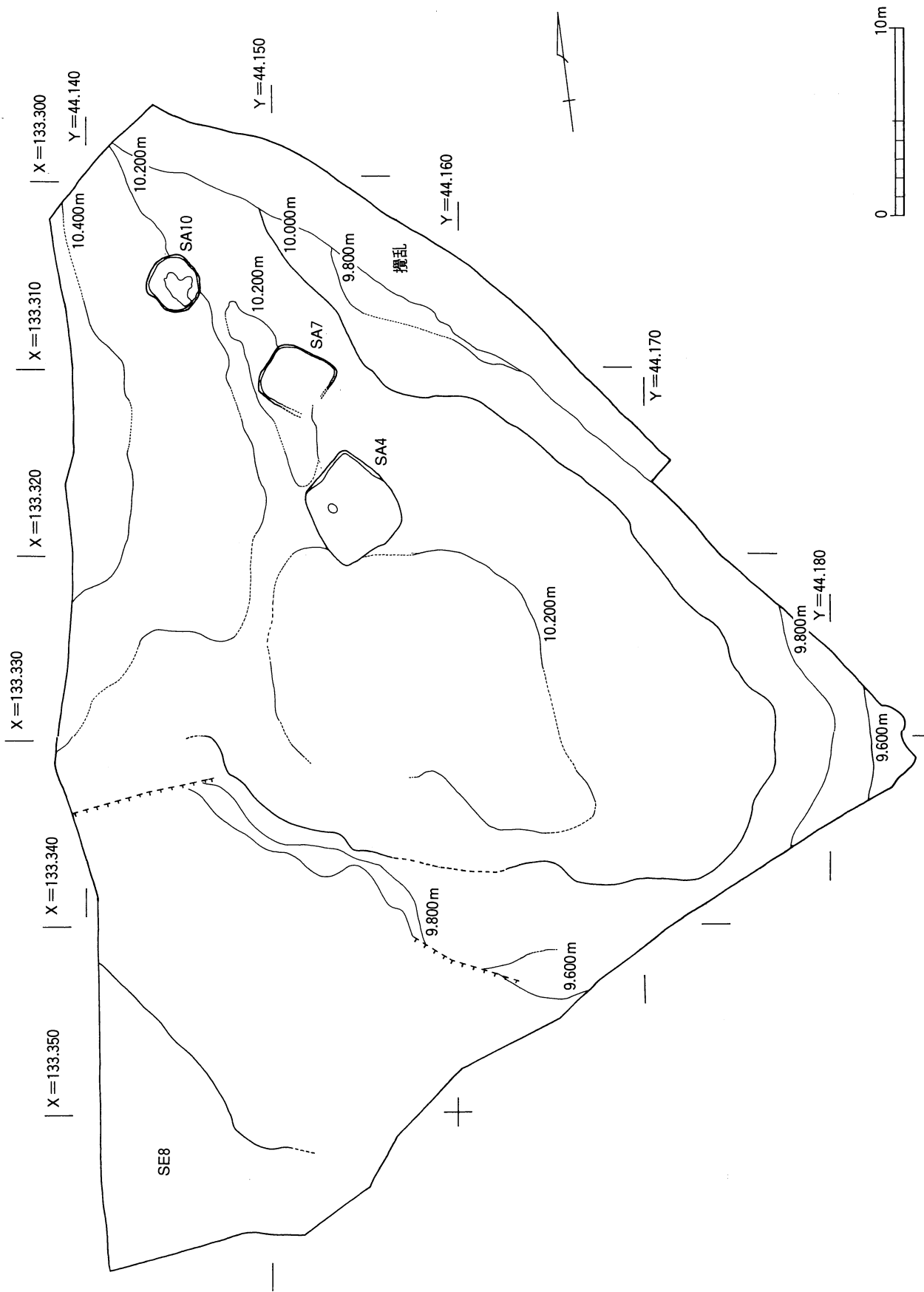
SA 7 は、B区の中央からやや北寄りに位置し、南に位置するSA 4 と約3m離れている。Ⅲ層下位からⅣ層上面で検出している。SE 3 により南側隅部を失っているが、長軸約3.5×短軸約3.2mの不整な隅丸方形プランを呈し、検出面からの床面までの深さは、約15cmを測る。床面積は約9m²である。埋土は1層で、やや細粒でしまりのある暗褐色砂質土が堆積する。なお、遺構に伴う柱穴等については確認出来なかった。

遺物は、土器・石器合わせて約100点出土し、住居内全体にまんべんなく分布している。そのうち9個体分について図化を行っている。なお、出土土器の約半数が縄文土器片である。

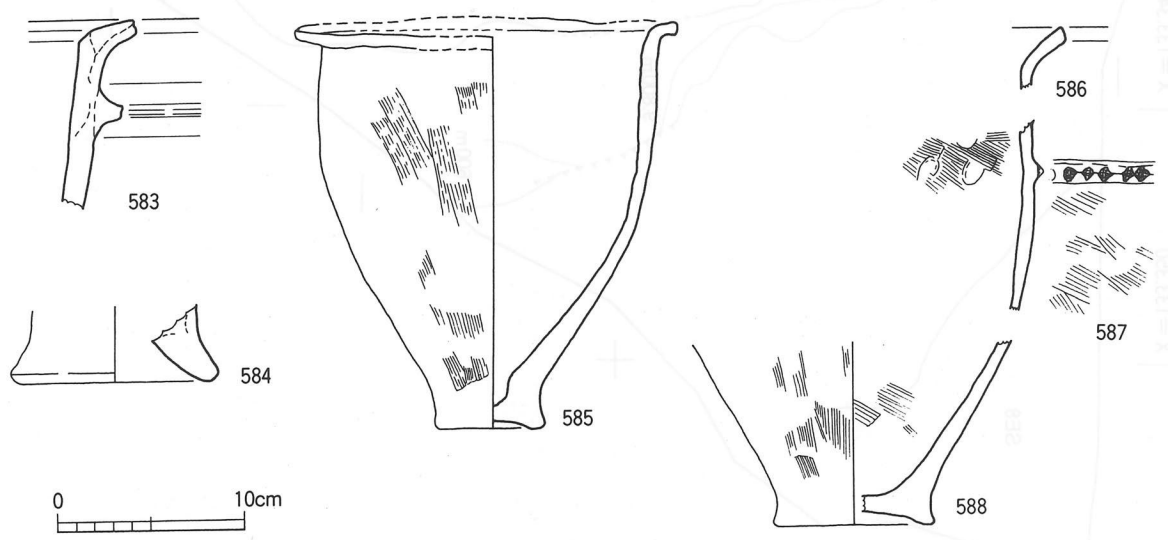
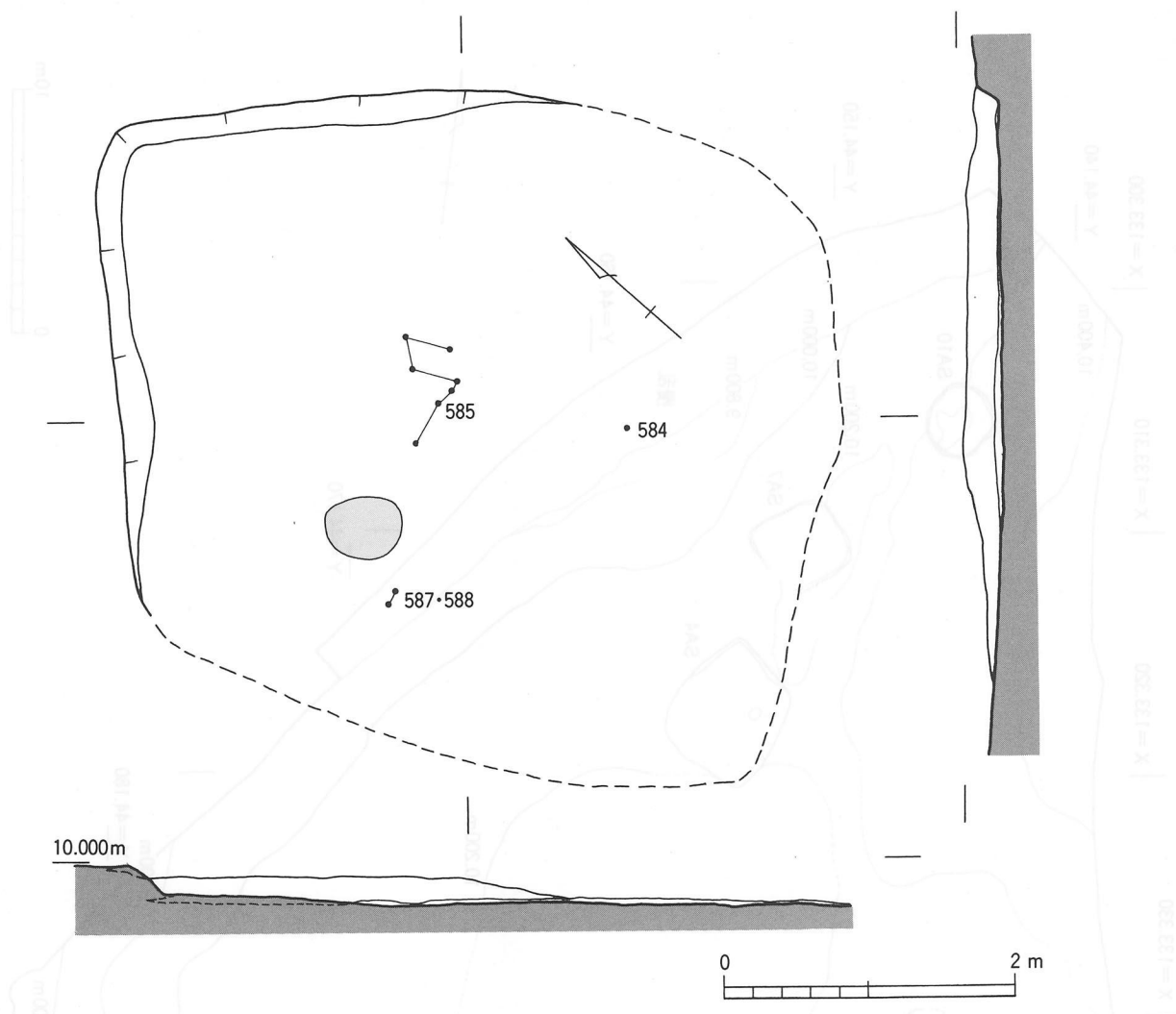
591・595～597は、東側隅に約5～15cm浮いた状態でまとまって出土している。また589～593については、中央のやや北寄り部分で約15cm浮いた状態でまとまって出土している。

石器は22点出土しており、内訳は、スクレイパー5点・敲石1点・砥石2点・凹石6点・石錘7点・台石片1点である。そのうち、凹石(948)、砥石(960)、石錘(990)について図化を行っている。

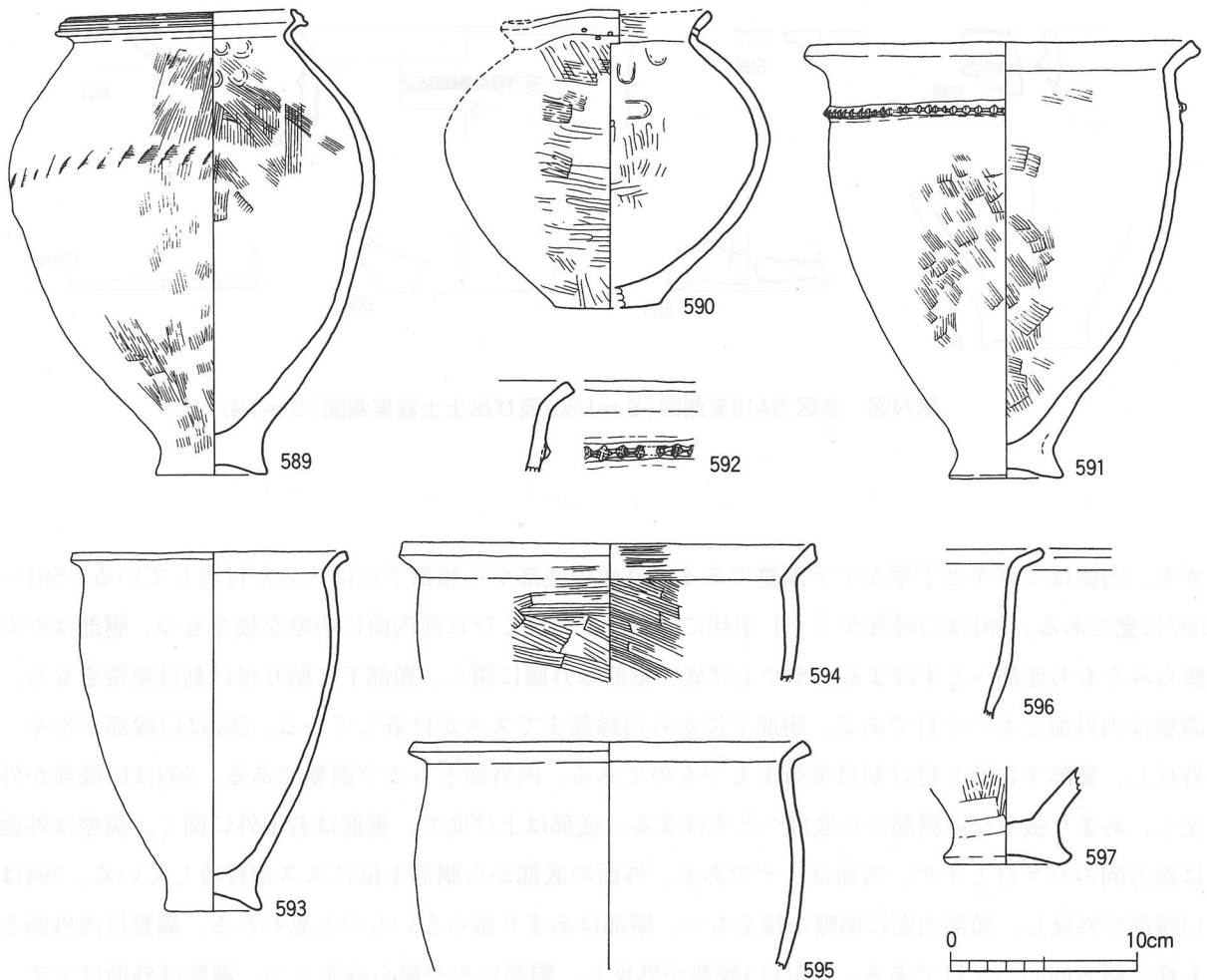
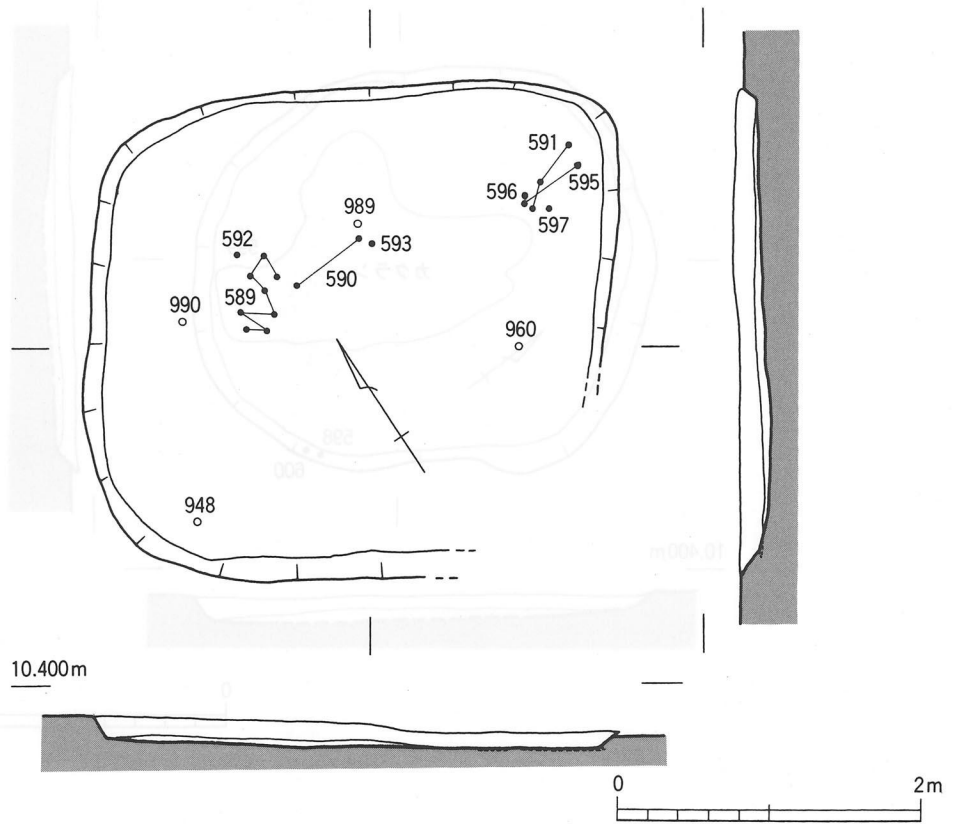
出土遺物は第73図に示している。589と590は西瀬戸内系の土器である。589は甕である。立ち上がる口縁部に2条の凹線をもち、長胴形で上げ底を呈する。最大径を持つ胴部上にハケ状工具による刺突が巡る。内外面ともハケ目で、外面胴部下位にはススが若干付着している。590は鉢で、口縁部が「く」字状に外反し、胴部が張り出している。頸部に3個の小さな穿孔がある。外面は横ハケ目の後丁寧なミ



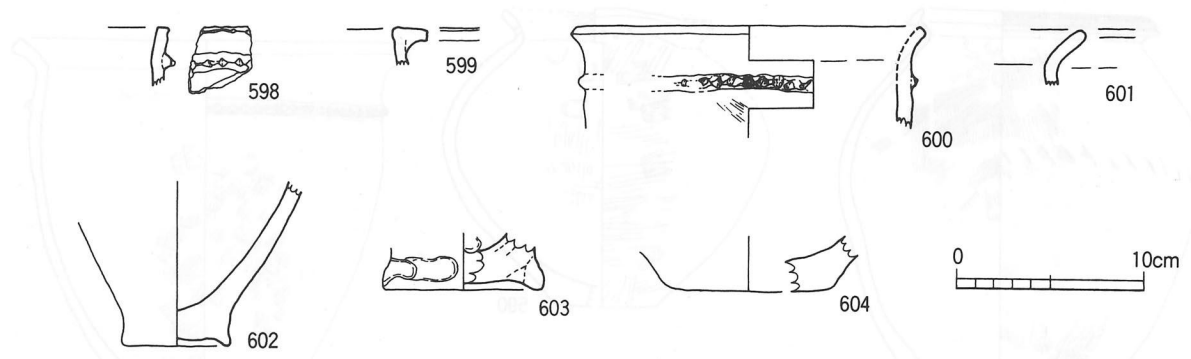
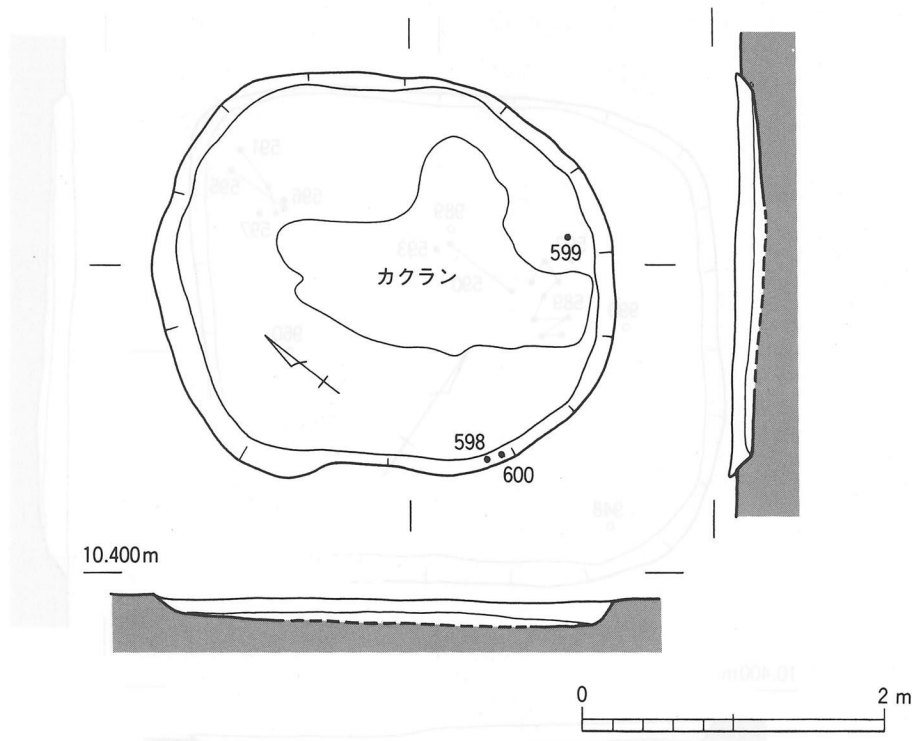
第71図 B区弥生時代遺構分布図 (S=1/300)



第72図 B区 SA4 実測図 (S=1/50) 及び出土土器実測図 (S=1/4)



第73図 B区 SA7実測図(S=1/50)及び出土土器実測図(S=1/4)



第74図 B区 SA10実測図(S=1/50)及び出土土器実測図(S=1/4)

ガキ、内面はミガキと丁寧なナデ調整である。外面の底部から頸部下にはススが付着している。591～597は甕である。591は口縁部が「く」字状に外反し、頸部くびれ部内面に明瞭な稜をもつ。胴部はやや膨らみをもち底部へとすぼまる。やや上げ底で裾部は外側に開く。頸部下に貼り付け刻目突帯をもち、調整は内外面ともハケ目である。胴部下位から口縁部までススが付着している。592は口縁部がやや外反し、頸部下に貼り付け刻目突帯をもつものである。内外面ともナデ調整である。593は口縁部が外反し、あまり張らない胴部から底部へとすぼまる。底部は上げ底で、裾部は若干外に開く。調整は外面は斜方向のハケ目とナデ、内面はナデである。外面の底部から胴部上位にススが付着している。594は口縁部が外反し、頸部内面に明瞭な稜をもつ。胴部はあまり張らないものと思われる。調整は内外面とも横・斜方向のハケ目である。595は口縁部が外反し、胴部にやや膨らみをもつ。調整は外面はナデ、

内面は風化の為不明である。596は口縁部が外側に開き、胴部の張らない器形を呈する。頸部屈曲部外面には著しい指頭痕がみられる。調整は外面はナデ、内面は風化が著しく不明である。597は上げ底の底部で、裾部が外側に開く。調整は外面は縦方向のハケ目、内面はナデである。

SA10 (第74図)

SA10はB区北側の第Ⅲ'層上面で検出した。長軸約3m、短軸約2.6mのほぼ円形プランを呈し、検出面からの床の深さは15~20cm、床面積は5.7㎡を測る。中央部は後世の攪乱によって壊され、支柱穴は確認されていない。埋土は黒褐色砂質土の単一層で、遺物も弥生土器小片が数点出土しているだけである。

出土遺物は第74図に示している。598~603は甕である。598は口唇部外面に刻目とその下1.3cmの所に貼り付け刻目突帯をもつ。調整は内外面ともナデである。599は口縁部に断面長方形の突帯を貼り付けている。調整は外面はナデ、内面はヨコナデである。600は口縁部がやや外反し、その下に貼り付け刻目突帯をもつ。調整は外面は斜方向のハケ目とヨコナデ、内面はナデである。601は口縁部が大きく開く。内外面ともナデ調整で、外面にはススが付着する。602はやや上げ底の底部である。内外面ともナデである。603はやや上げ底の底部で、裾部はやや外側に開く。内外面ともナデで、外面には指頭痕残る。604は平底の壺の底部である。内外面とも風化が著しく調整不明である。

3. 古墳時代の遺構と遺物

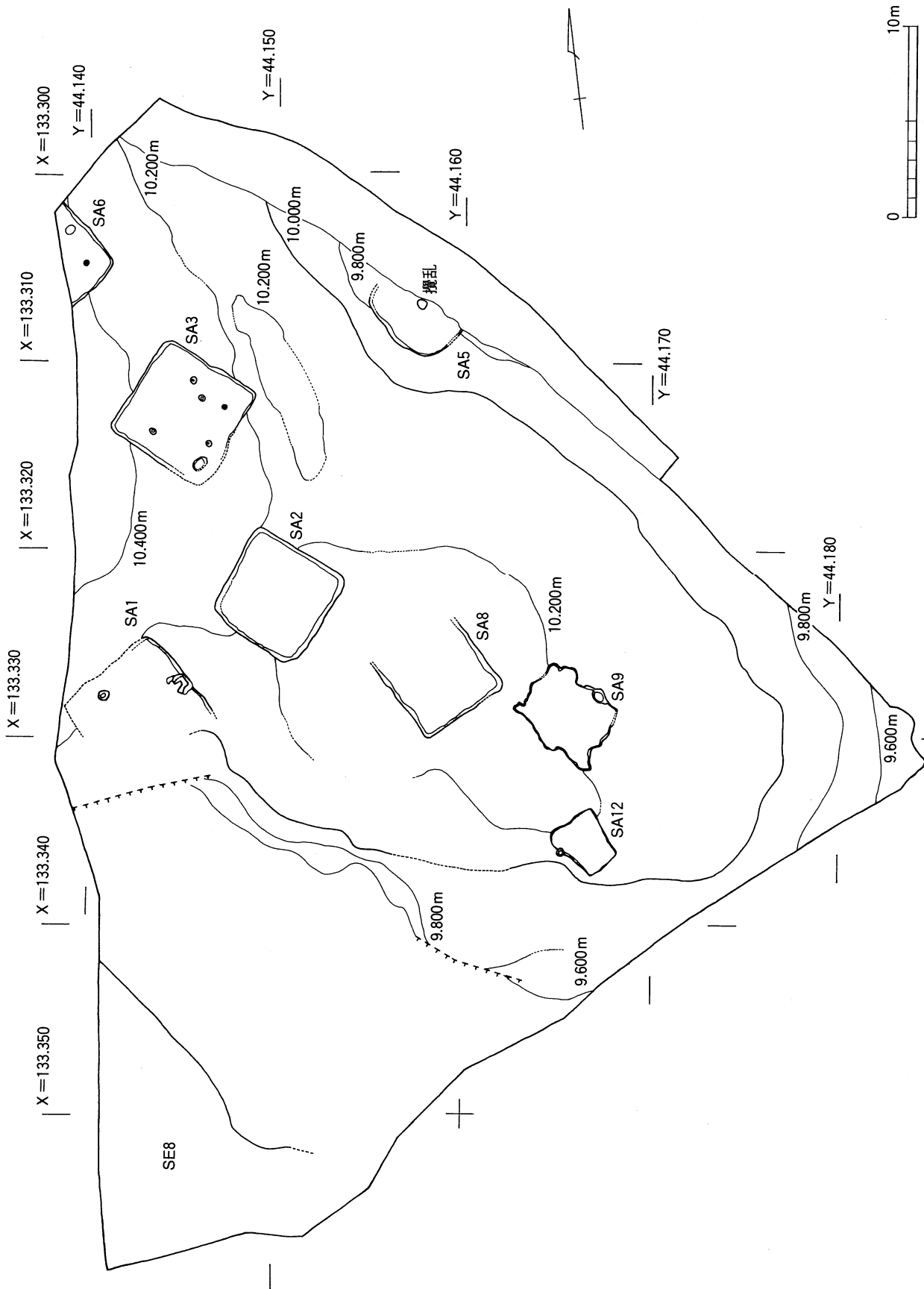
(1) 竪穴住居跡 (SA)

SA1 (第76図)

SA1は、B区の西側中央付近に位置し、Ⅲ層中で検出している。竈を持つ東側壁面については確認できたが、その他の部分についてははっきりしていない。検出面からの床面までの深さは約35cmを測る。埋土は1層で、細粒でやや粘性を帯びた、ややしまりのある暗褐色砂質土が堆積していた。北東壁中央には竈が、北西側には長径64cm・短軸56cm・深さ32cmの土坑が確認されている。竈は全長約100cm、両袖最大幅130cm、焚き口幅約30cmを測る。左袖部の先端が一部崩れ基底部のみが残っているが、比較的粘土の残りが良い。天井部を造る粘土も比較的残り良好であったが、調査の際に不注意により左部分を崩してしまっている。燃焼部は平坦であり、焼土が堆積していた。またその燃焼部には、2本の軽石支柱が立った状態で出土し、そのうちの1本は完形の状態で確認されている。竈の東側には径10cm程度に復元できる煙道が開いている。不注意により竈の土層断面や見通し図を紛失してしまい、詳しい説明が出来ないが竈の写真を図版に掲載しているので参照していただきたい。

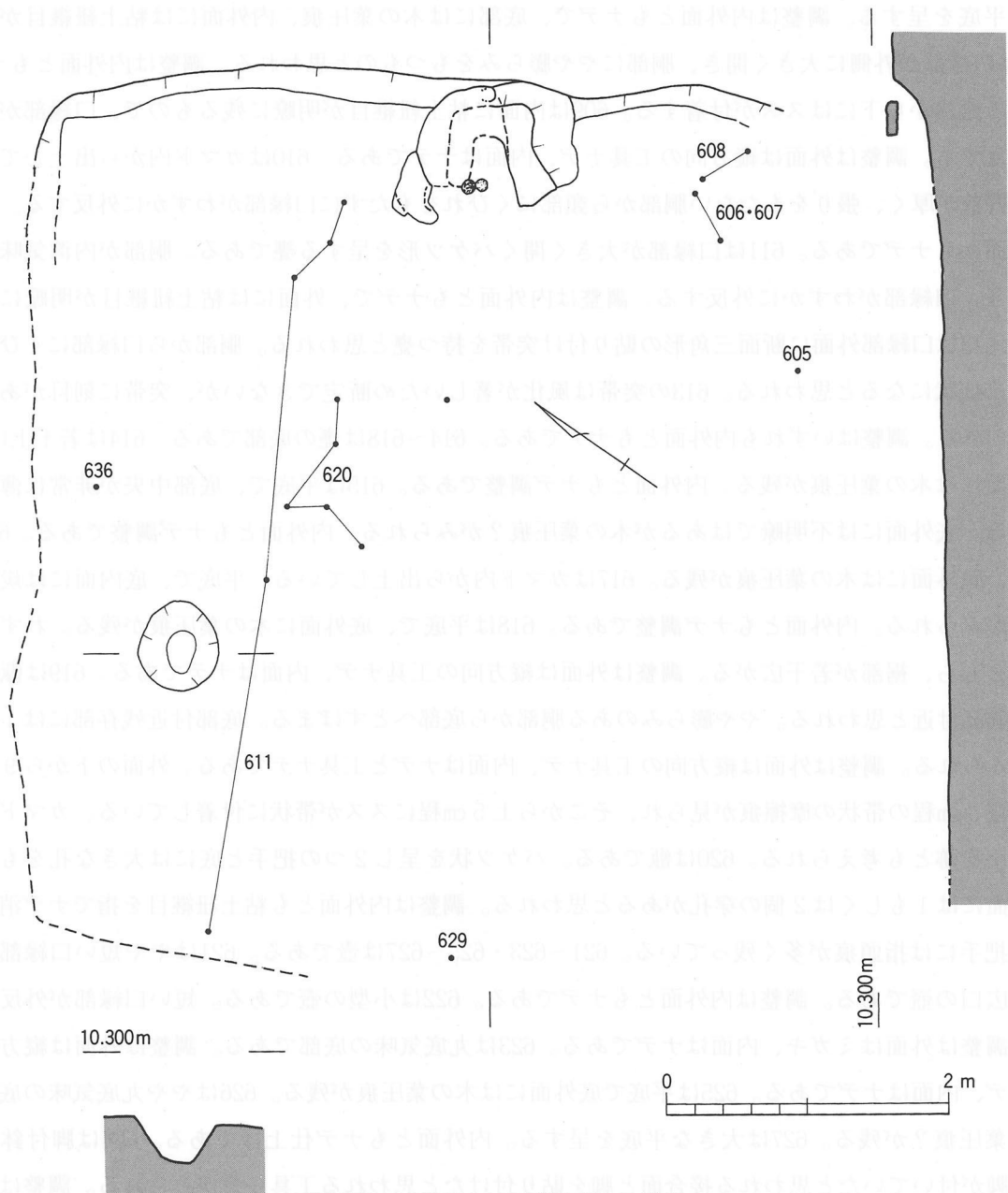
遺物は土器・石器合わせて約150点出土し、中央付近から北側にかけて比較的分布し、床面より約5cm~20cm浮いた状態で出土している。また石器について今回図示していないが、石器は36点出土しており、内訳は使用痕剥片12点・剥片5点・碎片4点・石核1点・石鏃2点・磨製石斧1点・砥石1点・石錘3点・台石片2点である。

出土遺物は第77・78図に示している。605~610は長胴の甕である。605は口縁部が外反し、胴部中位にやや膨らみをもつものである。内外面とも縦方向の工具ナデ調整で、外面の胴部下位から口縁部にはススが付着している。606と607は同一個体と思われる。口縁部が外反し、膨らみをもたないもので、底



第75図 B区古墳時代遺構分布図 (S=1/300)

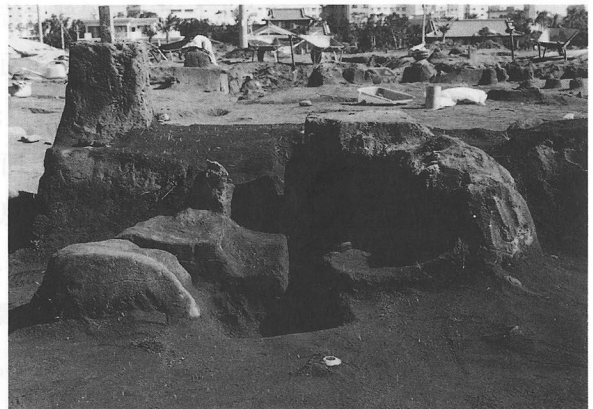
部は平底を呈する。調整は内外面ともナデで、底部には木の葉圧痕、内外面には粘土紐継目が残る。608は口縁部が外側に大きく開き、胴部にやや膨らみをもつものと思われる。調整は内外面ともナデで、外面の頸部から下にはススが付着する。609は内面に粘土紐継目が明瞭に残るもので、口縁部が緩やかに外反する。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデである。610はカマド内から出土している。やや器壁が厚く、張りをもたない胴部から頸部にくびれをもたずに口縁部がわずかに外反する。調整は内外面ともナデである。611は口縁部が大きく開くバケツ形を呈する甕である。胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。調整は内外面ともナデで、外面には粘土紐継目が明瞭に残る。612と613は口縁部外面に断面三角形の貼り付け突帯を持つ甕と思われる。胴部から口縁部にくびれをもたずに椀状になると思われる。613の突帯は風化が著しいため断定できないが、突帯に刻目があることも窺われる。調整はいずれも内外面ともナデである。614～618は甕の底部である。614は若干上げ底で、底外面には木の葉圧痕が残る。内外面ともナデ調整である。615は平底で、底部中央が非常に薄くなっている。底外面には不明瞭ではあるが木の葉圧痕?がみられる。内外面ともナデ調整である。616は平底で、底外面には木の葉圧痕が残る。617はカマド内から出土している。平底で、底内面には炭化物の付着がみられる。内外面ともナデ調整である。618は平底で、底外面に木の葉圧痕が残る。わずかにくびれをもち、裾部が若干広がる。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデである。619は甕の胴部から底部付近と思われる。やや膨らみのある胴部から底部へとすぼまる。底部付近残存部には1個の穿孔がみられる。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデと工具ナデである。外面の下から9 cm程の所に幅3 cm程の帯状の摩擦痕が見られ、そこから上5 cm程にススが帯状に付着している。カマドに据え付けた痕跡とも考えられる。620は甕である。バケツ状を呈し2つの把手と底には大きな孔をもつ。底部側面には1もしくは2個の穿孔があると思われる。調整は内外面とも粘土紐継目を指でナデ消し、内面と把手には指頭痕が多く残っている。621～623・625～627は壺である。621はやや短い口縁部が外反する広口の壺である。調整は内外面ともナデである。622は小型の壺である。短い口縁部が外反している。調整は外面はミガキ、内面はナデである。623は丸底気味の底部である。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデである。625は平底で底外面には木の葉圧痕が残る。626はやや丸底気味の底部で、木の葉圧痕?が残る。627は大きな平底を呈する。内外面ともナデ仕上げである。624は脚付鉢の底部か?脚が付いていたと思われる接合面と脚を貼り付けたと思われる工具圧痕がみられる。調整は内外面ともナデである。628～635は高坏である。628は坏部で、坏底部と口縁部との間に明瞭な稜をもたず、口縁部は外反する。調整は外面はミガキと丁寧なナデ、内面は横ミガキである。629は坏部で、坏底部と口縁部との間に明瞭な稜をもたず、口縁部は若干外反する。調整は内外面とも横ミガキである。630は椀形の坏部である。調整は外面はミガキ、内面は丁寧なナデである。631は盃形の坏部である。調整は外面は坏部が横・斜方向のミガキ、脚柱部付近が縦方向のヘラナデの後ミガキ、内面は横・斜方向のミガキである。632と633は坏底部である。内外面ともナデ調整である。634は脚柱部である。円柱状を呈し、裾部は屈曲して外側に大きく開くものと思われる。内外面ともナデ調整である。635は「ハ」字状を呈する裾部である。内外面ともナデ調整である。636と637は坏である。内外面ともミガキ調整である。638はカマドの支柱である。石材は軽石で、長軸方向に8～9の面取り加工が施されている。639は軽石製品で、両面及び左右側縁に擦痕がみられる。



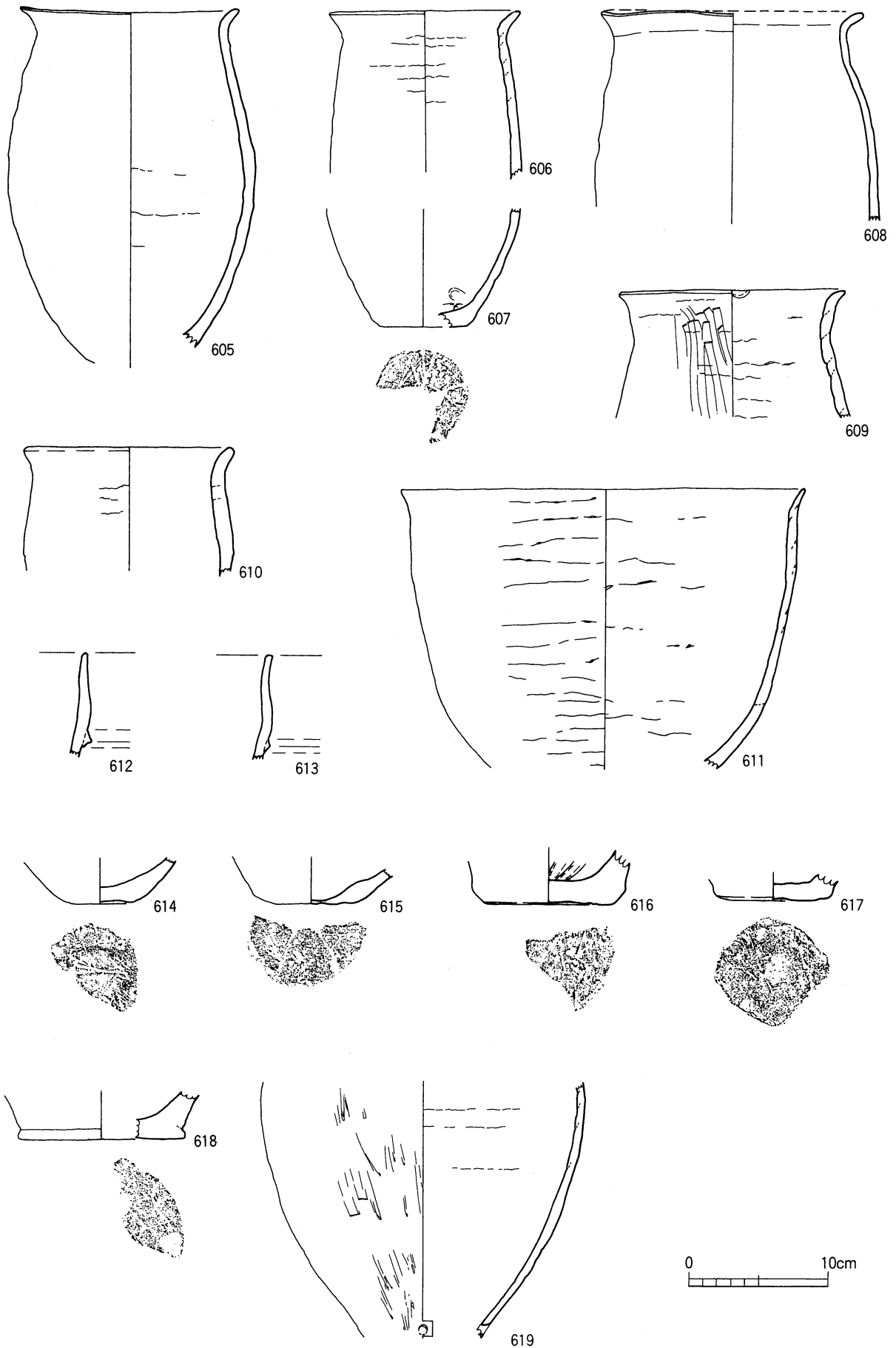
第76図 B区 SA1 実測図 (S=1/50)



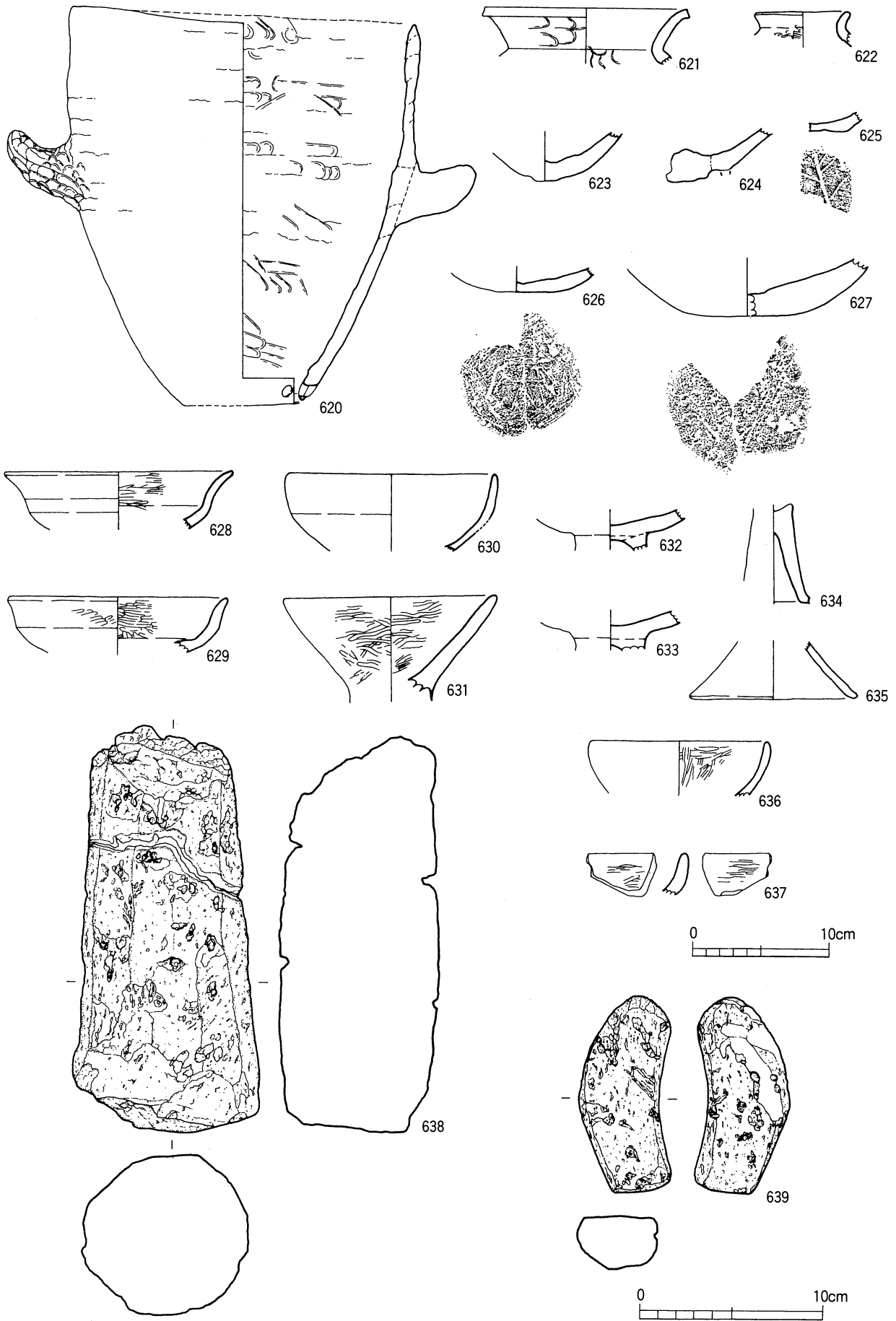
SA1 カマド検出状況 (北西より)



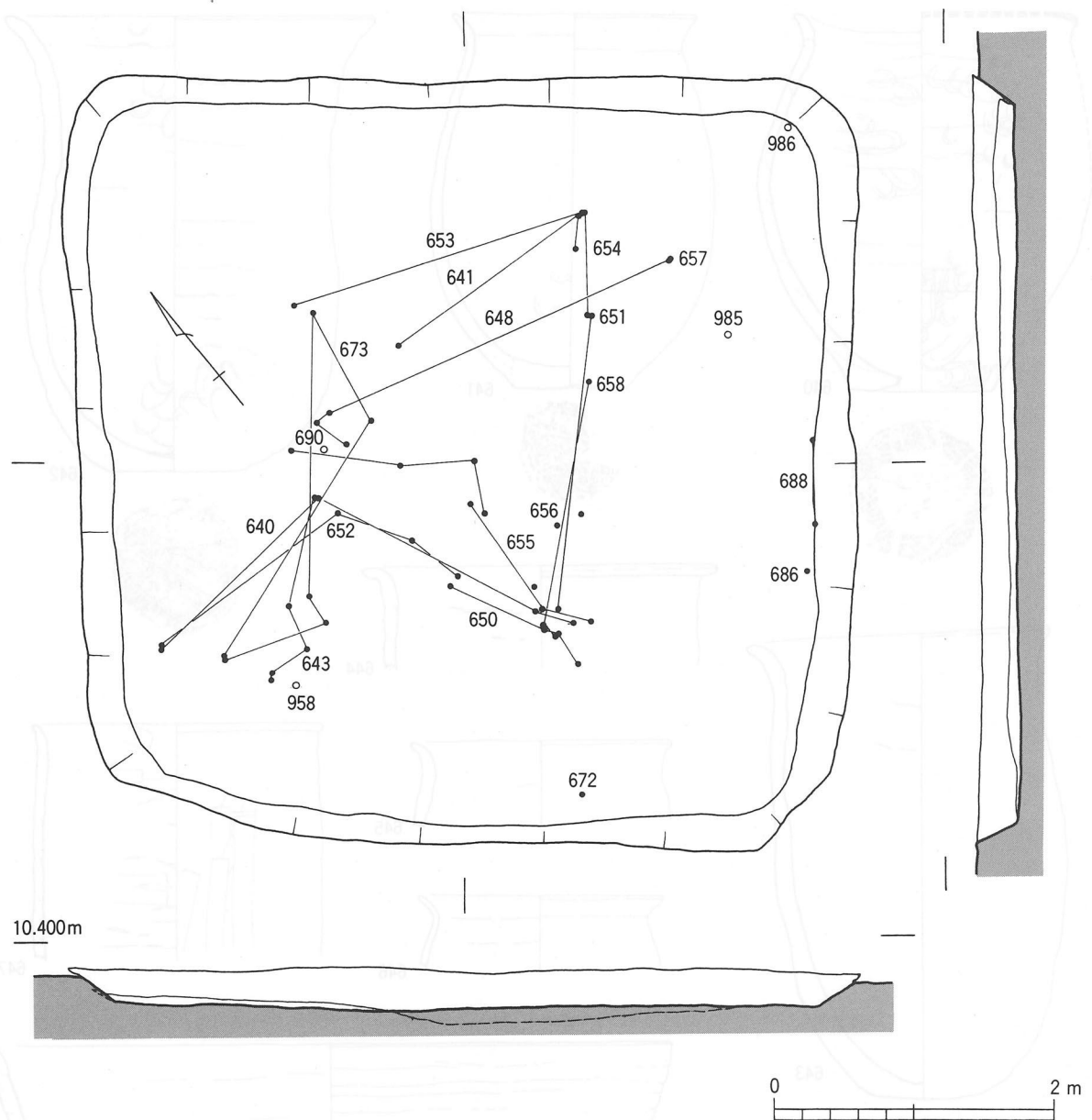
SA1 カマド完掘状況 (南西より)



第77图 B区 SA1 出土土器实测图 (S=1/4)



第78图 B区 SA1 出土遺物実測図 (620~637 S=1/4、638・639 S=1/3)

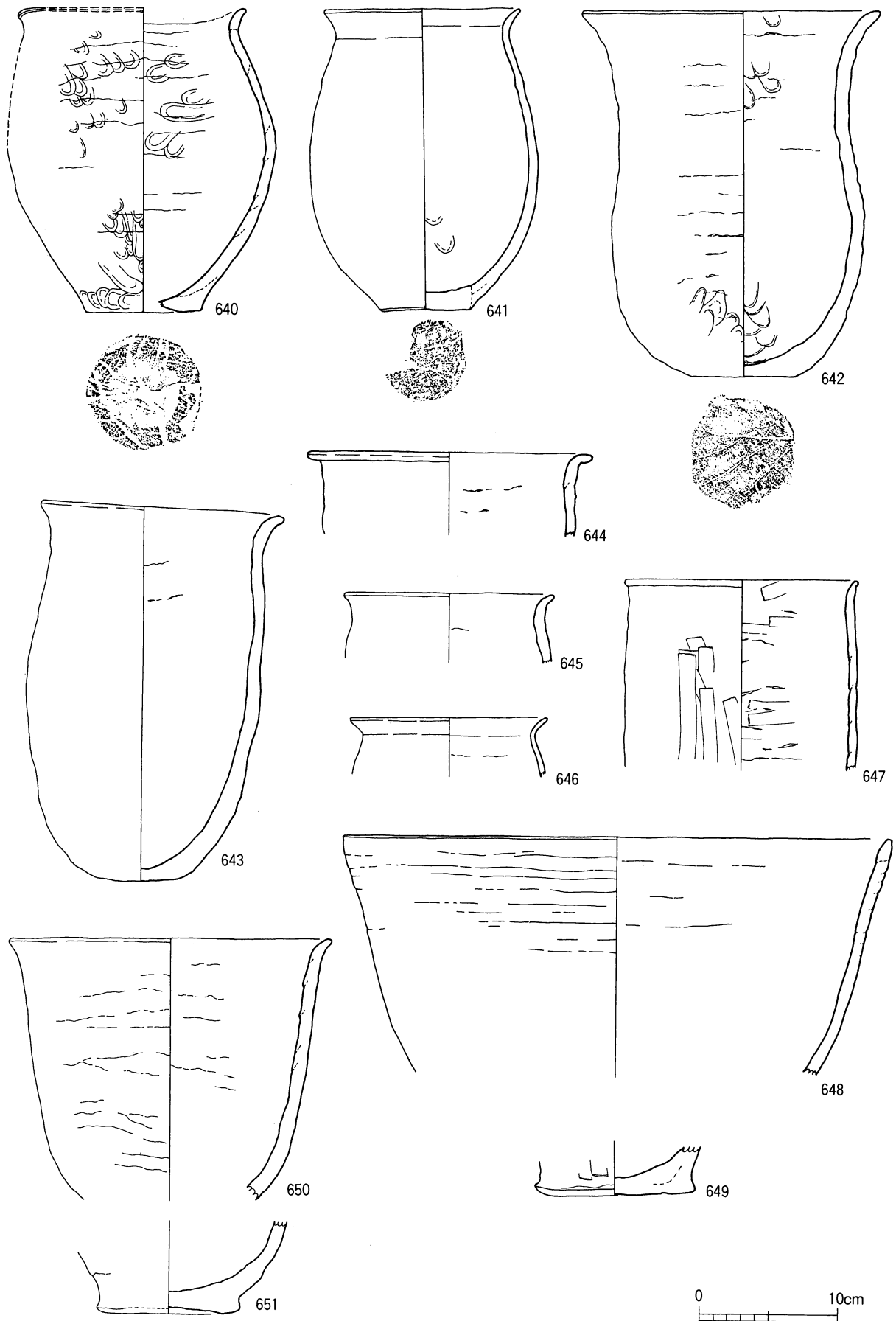


第79図 B区 SA 2 実測図 (S=1/50)

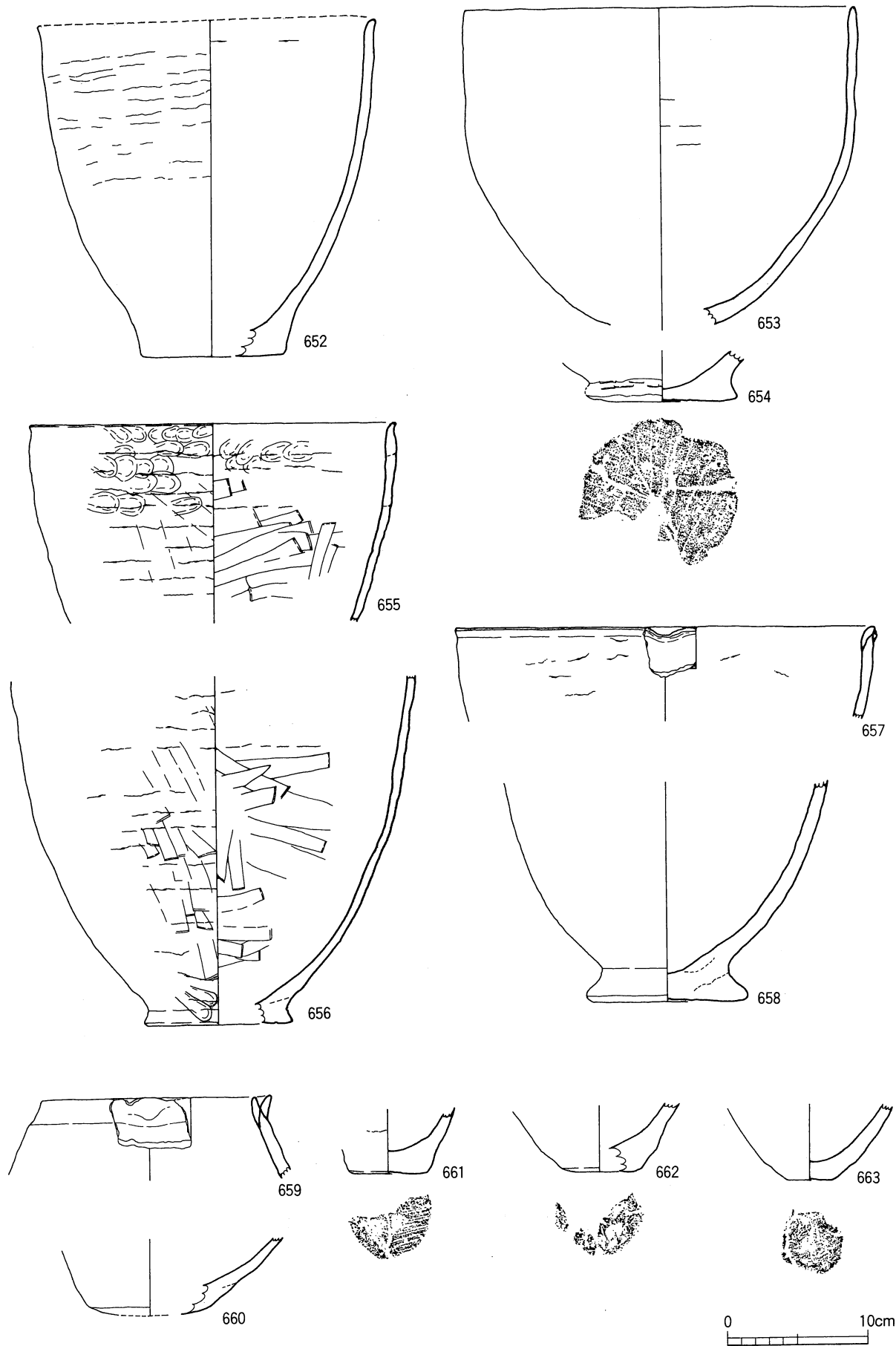
SA 2 (第79図)

SA 2は、B区の中央北西寄りに位置し、西にあるSA 1と約4 m離れている。Ⅲ層上位で検出している。長軸5.54m×短軸5.5mの方形プランを呈し、検出面からの床面までの深さは約30cmを測る。床面積は26㎡である。埋土は1層で、やや細粒でしまりのある暗褐色砂質土が堆積していた。なお、遺構に伴う柱穴等については確認出来なかった。

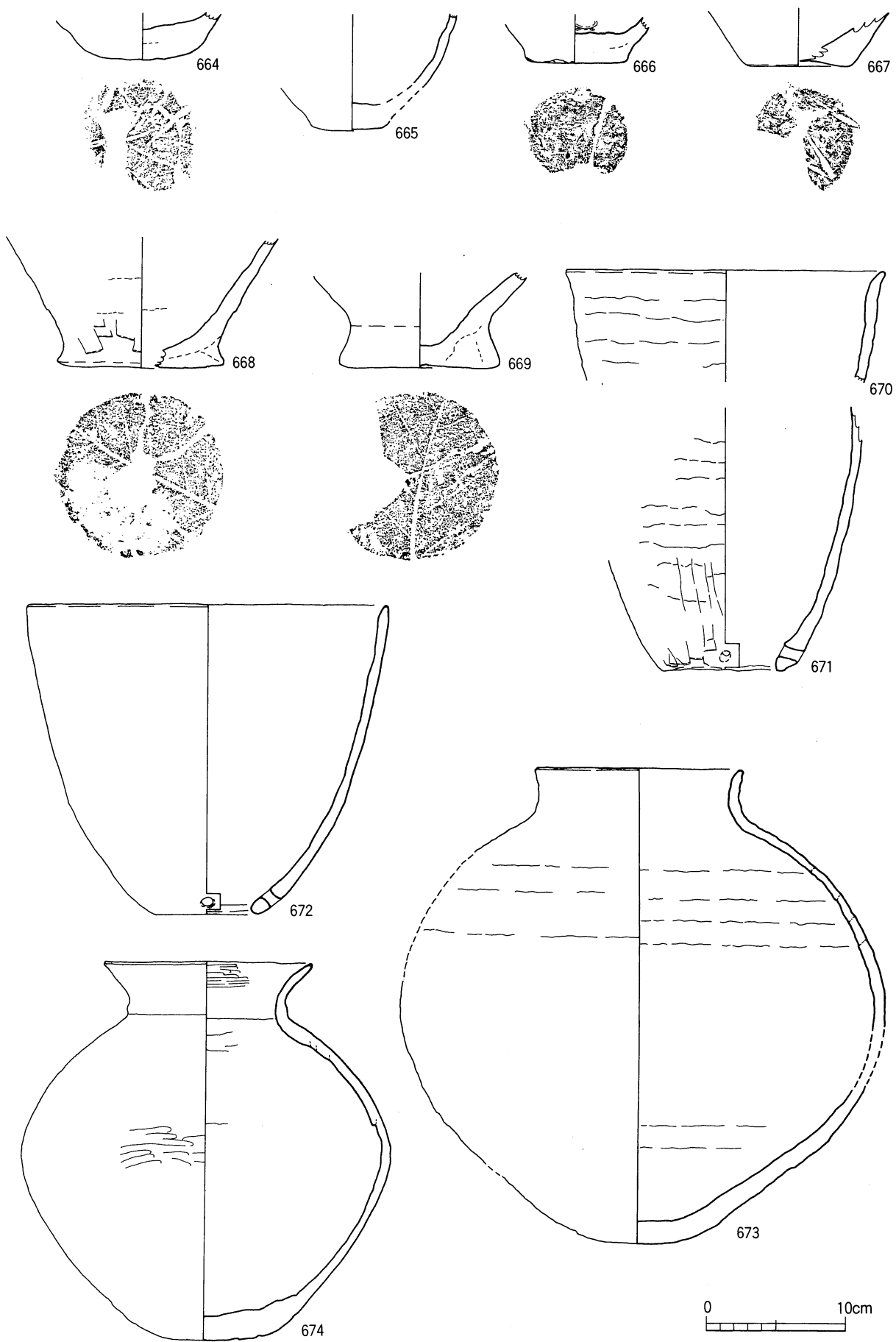
遺物は、土器・石器合わせて約250点出土し、住居跡内全体に分布しているが、特に中央付近は床面より10cm～25cmの高さで集中して確認されている。このうち50個体分を実測した。石器は41点出土しており、内訳は使用痕剥片6点・剥片16点・砕片1点・石核1点・石鏃1点・磨製石斧2点・砥石2点・石錘5点・台石片2点・軽石製品5点である。また5 cm～10cm大の焼成された粘土塊が数点北側で確認されている。



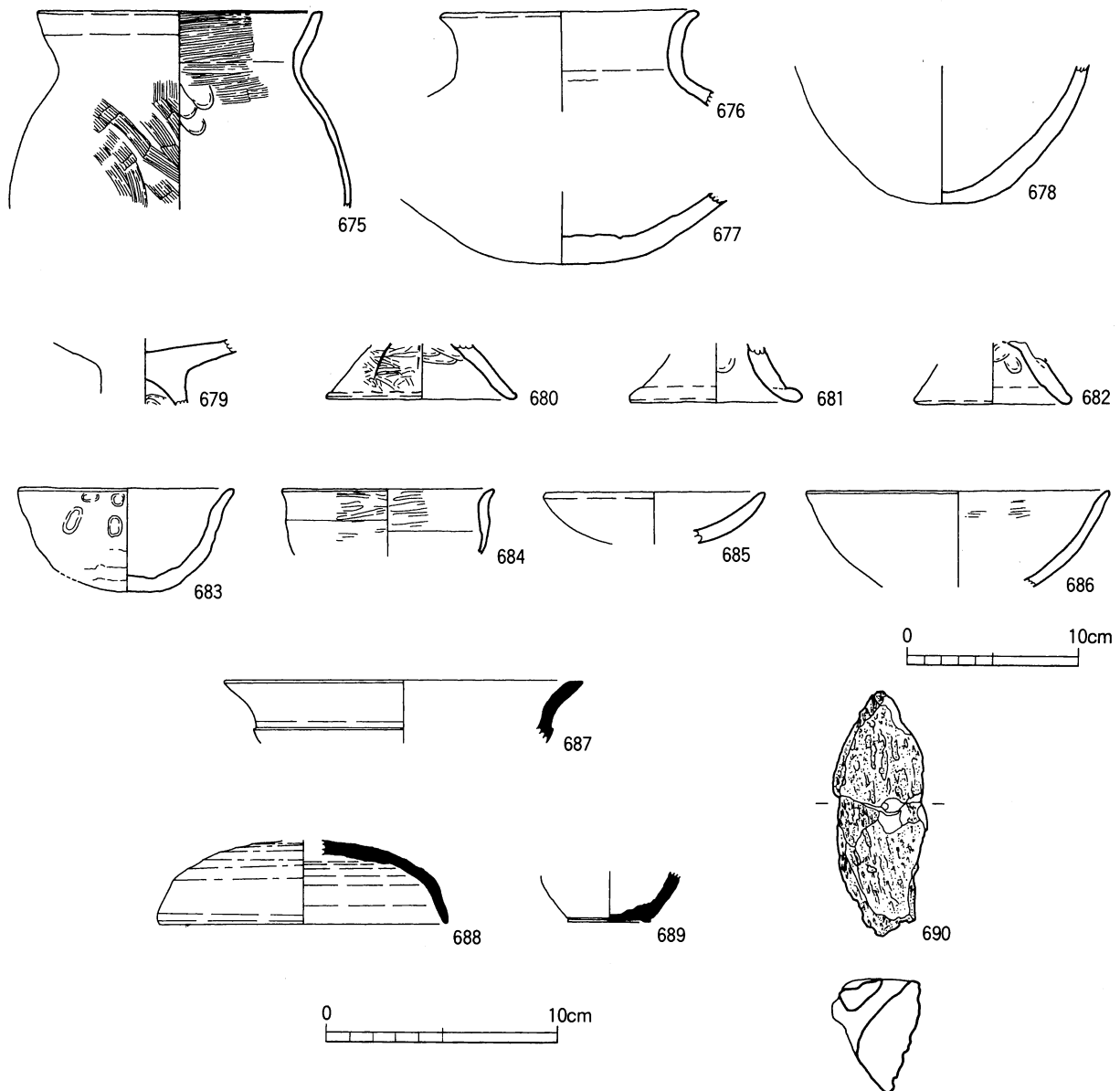
第80图 B区 SA2 出土土器实测图 (S=1/4)



第81图 B区 SA 2 出土土器实测图 (S=1/4)

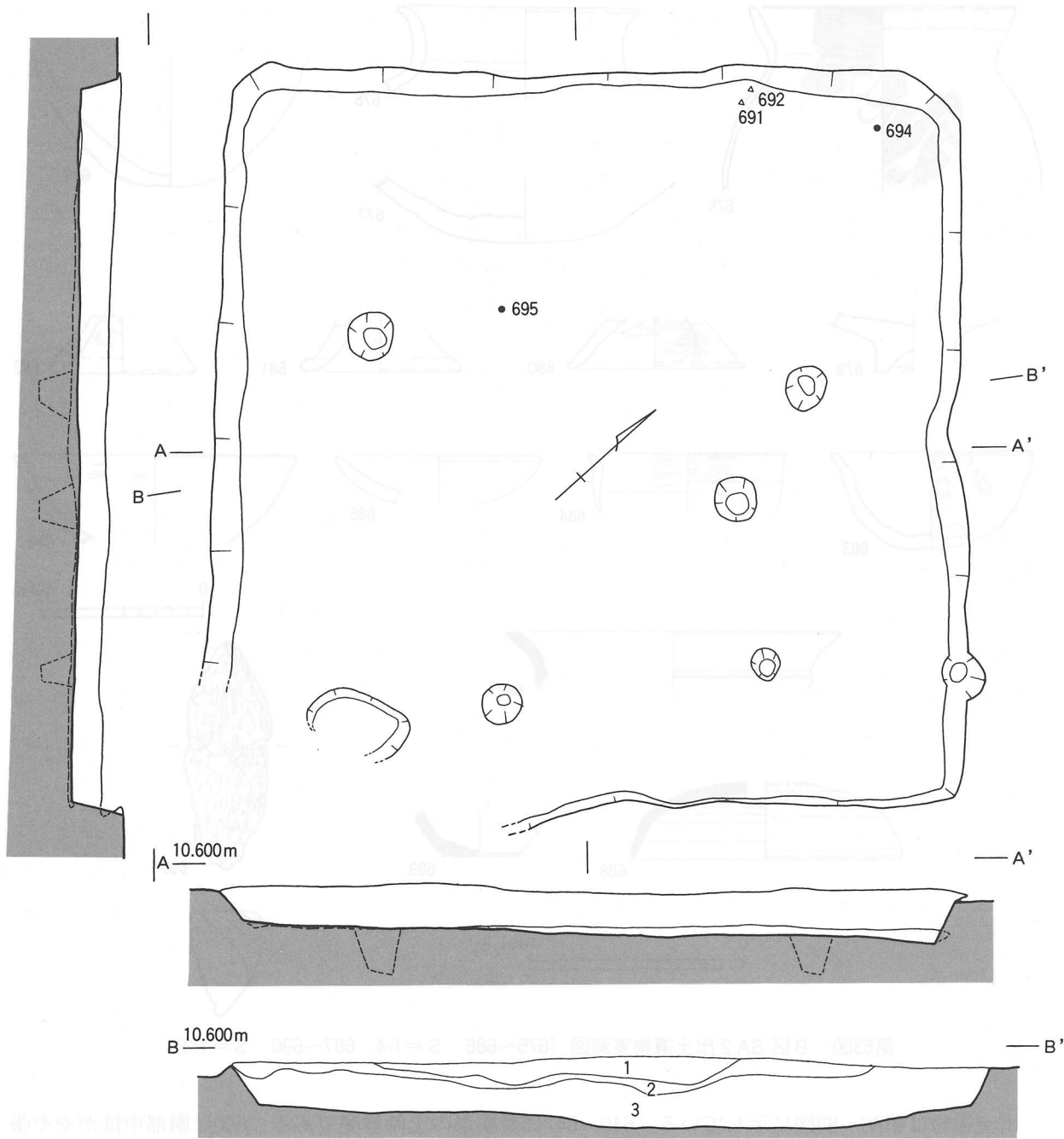


第82图 B区 SA 2 出土土器实测图 (S=1/4)



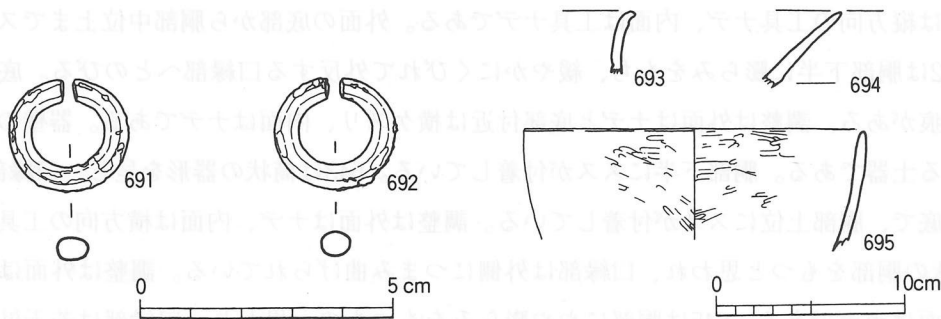
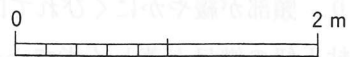
第83図 B区 SA 2 出土遺物実測図 (675~686 S=1/4、687~690 S=1/3)

出土遺物は第80~83図に示している。640~647は長胴形の土師器甕である。640は胴部中位がやや張り、頸部が緩やかにくびれて口縁部が外反する。底部は上げ底気味で、木の葉圧痕が残る。内外面とも粘土紐の継目が著しく指でナデ消している。外面の底部から胴部中位にススが付着している。641は胴部下半にやや膨らみをもち、頸部がくびれて口縁部が外反する。底部は平底で、木の葉圧痕がある。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面は工具ナデである。外面の底部から胴部中位上までススが付着している。642は胴部下半に膨らみをもち、緩やかにくびれて外反する口縁部へと伸びる。底部は平底で、木の葉圧痕がある。調整は外面はナデと底部付近は横ケズリ、内面はナデである。器壁の厚い、かなり重量のある土器である。胴部下半にススが付着している。643は筒状の器形を呈し、口縁部は外反する。底部は平底で、胴部上位にススが付着している。調整は外面はナデ、内面は横方向の工具ナデである。644は筒状の胴部をもつと思われ、口縁部は外側につまみ曲げられている。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデである。645は胴部にやや膨らみをもつものと思われ、口縁部は若干外反する。調整



SA3

- 1 黒褐色(5YR2/1)砂質土～やや軟質でしまりが無い。
- 2 黒褐色(5YR2/2)砂質土～やや軟質で若干しまりがある。粒子が細かい。
- 3 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土～やや軟質で若干しまりがある。土器片、石器、礫片等を含む。



第84図 B区 SA3実測図 (S=1/50) 及び出土遺物実測図 (691・692 S=1/2、693～695 S=1/4)

は内外面ともナデである。646は胴部にやや膨らみをもつものと思われ、頸部がくびれて口縁部が外反している。調整は内外面ともナデである。647は筒形を呈し、口唇部がつまみ出されている。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面は横方向の工具ナデである。外面の胴部中位にはススが付着している。648～658はバケツ形を呈する土師器甕である。648と649は同一個体と思われる。平底で、胴部から口縁部は鉢状に広がりながらのびる。調整は内外面ともナデで、外面は粘土紐継目が多く残り、胴部中位下にはススの付着がみられる。650と651は同一個体と思われる。やや上げ底で、胴部下に膨らみをもって直線的に胴部がのび、口縁部は外反する。調整は外面ナデ、内面ナデと工具ナデで、外面胴部上位から口縁部にススが付着している。652は平底で、底部が若干くびれてバケツ状の胴部が立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデである。外面胴部中位から上にススが付着し、内面には黒変や赤変がみられる。653と654は同一個体と思われる。くびれのある底部から最大径をもつ胴部中位まで広がり、湾曲して口縁部へと直口する。底部は平底で裾部が広がり、木の葉圧痕が残る。655と656は同一個体である。底部くびれ部からやや膨らみをもちながら胴部から口縁部へと広がり気味に立ち上がる。口唇部はわずかにつまみ出して外反させている。外面は粘土紐継目が顕著で、調整は内外面とも工具ナデと指ナデである。底部は平底で裾部が外に広がる。657と658は同一個体と思われる。大きくくびれた底部からバケツ状の胴部が立ち上がる。口唇部はわずかにつまみ出して外反させ、注ぎ口を付けている。底部は平底で、裾部は大きく広がる。調整は内外面ともナデである。659は注ぎ口の付いた甕の口縁部である。660の底部と同一個体で胴部が張り、口縁部が内湾する樽形を呈するものと思われる。調整は内外面ともナデである。661～669は土師器甕の底部である。661は平底で底外面に板目圧痕が見られる。662・663・665は長胴形甕の底部と思われる。いずれも平底で、662は木の葉圧痕が残る。664は凸レンズ状平底で厚みを持つ。木の葉圧痕が残る。666は平底でわずかにくびれを持つ。底外面は丁寧にナデている。667は平底であるが中央がやや窪む。木の葉圧痕が残る。668と669はバケツ形を呈する甕の底部と思われる。平底で裾部が開き、木の葉圧痕が残る。670～672は甌である。670と671は同一個体である。バケツ形を呈し、底部には1つの大きな孔と側面下部に2つの穿孔、口縁部はわずかに外反している。外面には粘土紐継目が顕著で、縦方向の工具ナデとナデ調整がみられる。内面はナデ調整である。672はバケツ形を呈し、口縁部はまっすぐにのびる。底部に1つの大きな孔があり、側面下部には2つの穿孔が付くと思われる。調整は外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデである。穿孔上の外面には馬蹄形状のススが付着している。673～678は壺である。673は玉葱形の胴部をもつ短頸壺である。口縁部は直口气味に立ち上がり、底部は凸レンズ状を呈する。内外面とも風化が著しく器壁が薄くなっている。胴部張り出し部上下にススが付着している。674は胴部中位の張った偏球形を呈する。胴部最大径の半分より小さくくびれた頸部から口縁部が外反する。底部は凸レンズ状の平底である。調整は内外面とも横ミガキとナデである。675は肩部が張らずに頸部に緩やかなくびれをもつ。口唇部は内傾した面取りがされている。調整は内外面ともハケ目とナデである。676は肩の張った短頸壺と思われる。口縁部は外反する。677は丸底気味の底部である。676と同一個体と思われる。678は長胴形壺の尖底気味の底部と思われる。679と680は高坏である。679は坏底部である。680は短い脚部で、「ハ」字状を呈する。調整は外面は丁寧なヘラミガキで、線刻?のようなものが見られる。内面はナデである。681と682は脚付鉢?の脚部か。「ハ」字状を呈し、681は裾部が開く。調整は内外面ともナデで、682の外面には一部丹塗り痕がみられる。683は椀である。底部は丸底気味で、口縁部は若干

外に開く。調整は内外面ともヨコナデである。684～686は坏である。684は外面の体部と口縁部との間に稜をもち、口縁部が外反する。調整は内外面とも横ミガキである。685は皿状を呈し、内外面とも丹塗りが施されていたと思われる。686は口縁部が若干外反する。調整は内外面とも横ミガキで、外面と内面口縁部にはススが付着している。687～689は須恵器である。687は高坏の口縁部か？口縁内部上面が平らに仕上げられている。688は坏蓋で、口径12.3cmである。689は小坏か小壺の底部か？平底で内外面とも剥離が著しい。690は軽石製品で、穿孔をもつ。

SA 3 (第84図)

SA 3は、B区の北西寄りに位置し、南西に位置するSA 1と約9 m、南に位置するSA 2と約4 m離れている。Ⅲ・Ⅲ'層上位で検出し、長軸5.76m×短軸5.7mの方形プランで、検出面からの床面までの深さは約30～40cmを測る。床面積は29.8m²であり、主軸方向がSA 2と同軸である。遺構内で柱穴5本、土坑1基検出したが、埋土は3層分かれ、レンズ状に堆積している。

遺物は、土器・石器合わせて約100点出土し、住居跡内全体に分布しているが、大半が20cm以上浮いた状態で出土している。調査中の段階では、弥生中期末～後期の土器片がある程度まとまって出土していることから弥生中期末～後期頃のものとも考えたが、北側壁面隅で耳環(691・692)2点と高坏の口縁部片(694)、床面中央より西寄りの部分で椀片(695)が出土した。また、西側壁面隅でヒノキ科の炭化材が出土し、放射性炭素(¹⁴C)年代測定を行ったところ、補正¹⁴C年代で1620±60年BPを示し、暦年代交点がAD430(AD395～AD535)という結果を得ている。(第IV章を参照)以上のことから、古墳時代に構築されたものと考えたい。

出土遺物は第84図に示している。691と692は耳環である。銅芯金張で、ほぼ同形、同重量を呈する。693～695は土師器である。693は甕の口縁と思われる。調整は内外面ともナデである。694は高坏の坏部である。口縁と坏底部との間に稜をもつ。調整は内外面とも丁寧なヨコナデである。695は椀状の鉢と思われる。調整は内外面ともミガキである。

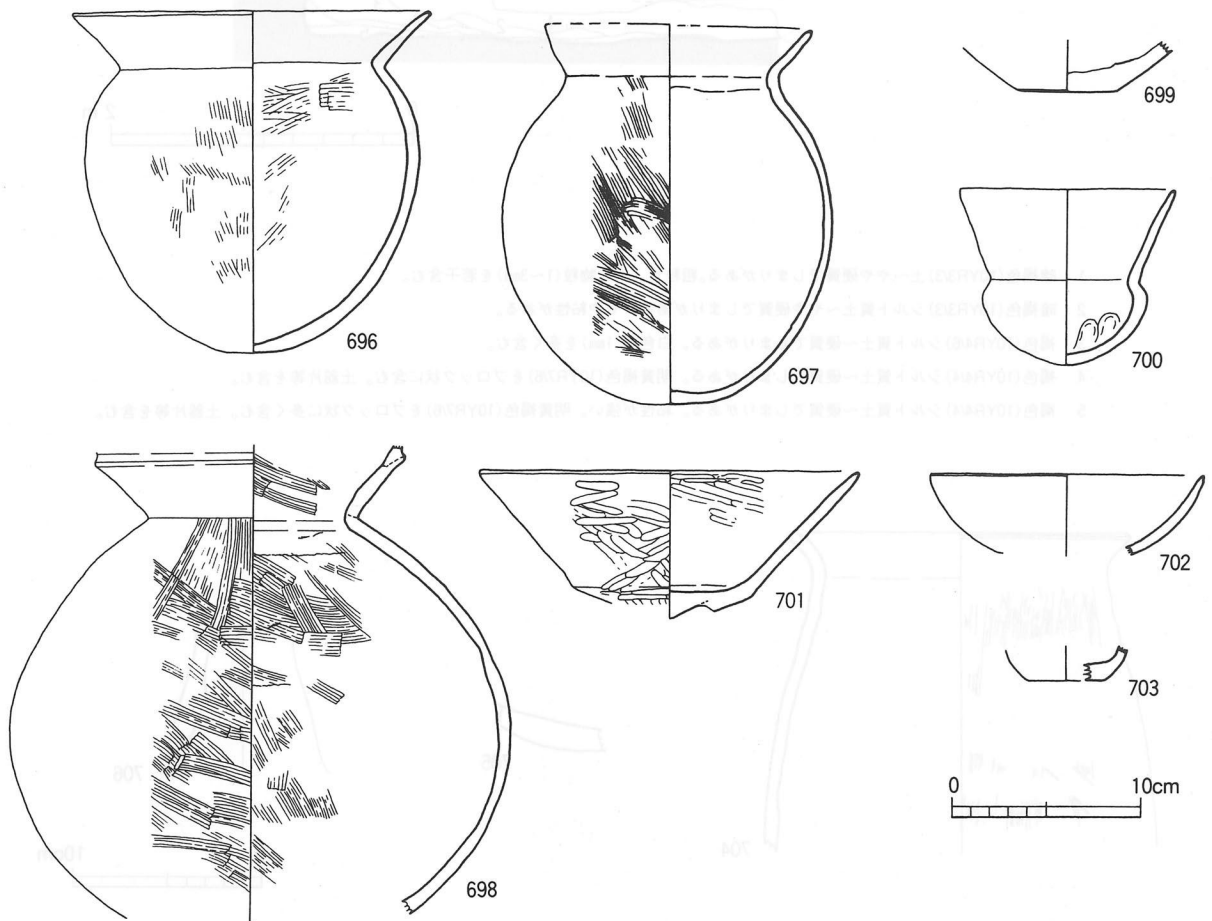
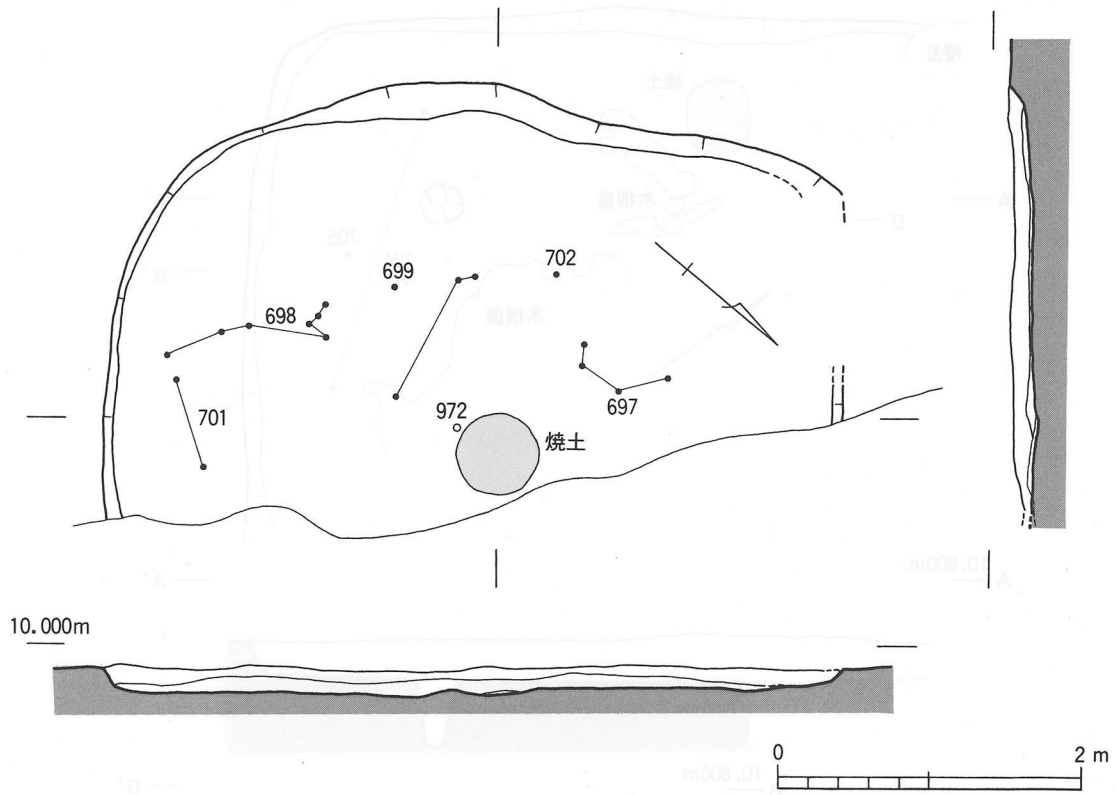
SA 5 (第85図)

SA 5は、層上位で検出していて、B区の北側に位置し、西に位置するSA 2と約8 m離れている。東側半分は攪乱により破壊されていていて、平面は不明だが、一辺が約5 mの隅丸方形になると思われる。検出面からの床面までの深さは約30～40cmを測り、床面積は10.8m²+αである。遺構中央になると思われる部分の床面には、被熱を受け赤化した焼砂がみられる。なお、遺構に伴う柱穴等については確認出来ていない。埋土は1層で、やや細粒でしまりのある暗褐色砂質土が堆積していた。

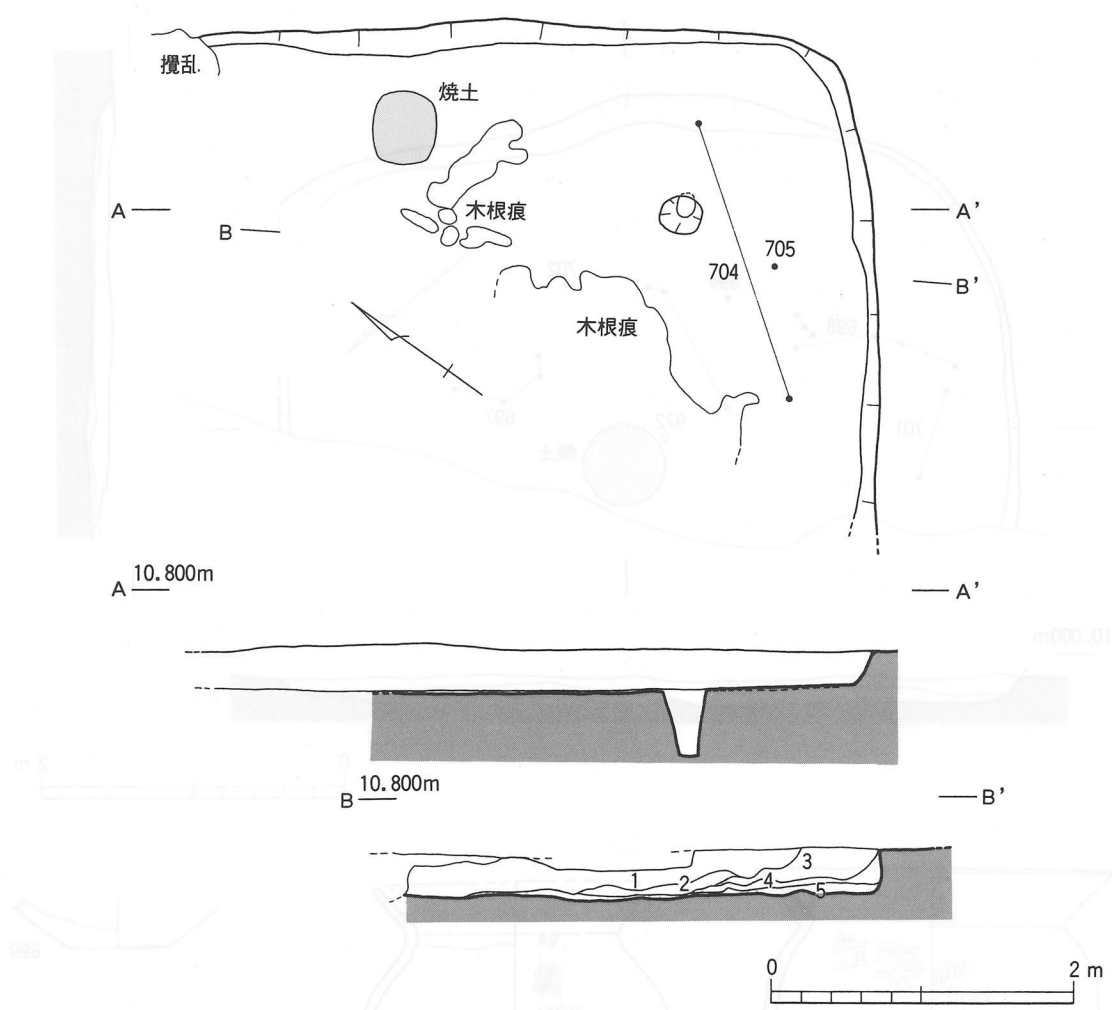
遺物は、土器・石器合わせて約60点で、住居跡内全体に分布し、土器の大半が床面より10cm～15cm、石器は約20cm～30cm浮いた状態で出土している。そのうち、土器8個体、石器1点を図化した。

そのうちの698・701は南東側、696や697は炉の周辺で696～698は横位に、701は伏せた状態で出土している。700は西側攪乱中の出土だが、本住居跡遺物出土の土器として扱っている。石器は5点出土しており、内訳は凹石1点・石錘2点・台石1点である。

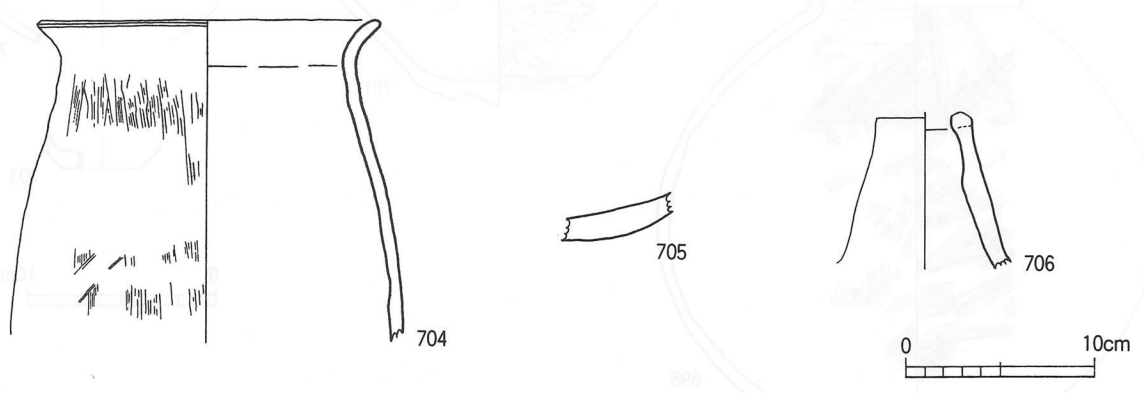
出土遺物は第85図に示している。696は甕である。口縁部に最大径をもち、丸底で胴部上位にやや膨らみのある球形を呈する。頸部が「く」字状に屈曲して口縁部が外に大きく開く。調整は内外面とも



第85図 B区 SA5 実測図(S=1/50)及び出土土器実測図(S=1/4)



- 1 暗褐色(10YR3/3)土～やや硬質でしまりがある。粗粒土。炭化物粒(1~3mm)を若干含む。
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質土～やや硬質でしまりがある。やや粘性がある。
- 3 褐色(10YR4/6)シルト質土～硬質でしまりがある。白色粒(1mm)を多く含む。
- 4 褐色(10YR4/4)シルト質土～硬質でしまりがある。明黄褐色(10YR7/6)をブロック状に含む。土器片等を含む。
- 5 褐色(10YR4/4)シルト質土～硬質でしまりがある。粘性が強い。明黄褐色(10YR7/6)をブロック状に多く含む。土器片等を含む。



第86図 B区 SA6 実測図(S=1/50)及び出土土器実測図(S=1/4)